

出藍文庫

3-1

夏目漱石没後百年記念  
東方×近代文学合同「それから」

近藤貴弥 編

余はわが文を以て百代の後に伝えんと欲する野心家なり

——明治三九年十月二十二日 森田草平宛——

# 目次

## 3 目次

ひととせ 文明開化の叫び	五
甘茶 天狗相聞	二七
長久手 出来事	三九
百合街かねる 生の実感	四七
ガルゾ 瞳	五三
完熟オレンジ 富士の少女	六五
こうず 無形の神武	九三
久我暁 賢者歎異―パチュリー・ノーレッジの手記―	一一五
幽 機会	一三一
青矢鴉 潮騒	一五一
嘉島安次郎 夜霧廻りて	一七五
ばつ 沈黙	二〇七
近藤貴弥 夢の続き	二二九

注釈 ..... 二五〇

後書き(近藤貴弥) ..... 二五二

ひととせ

文明開化の叫び

「やはり洋袴はまだ慣れないな」

映姫は、視界の奥にいる男、為吉がそういうのを聞いていた。時は慶応年間。二月に迎えた空つ風、草木もこごえて身体をこすらせて温めている。空を見れば灰色の曇天。赤く燃える炭がカラリと聞こえない音を立てて寝倒れた。

黒船来航により開国派と鎖国派の争いも一段落した頃であった。一方で、黒船の来航のみならず、その文化や植民地化の波は今も近い。対岸の火事だなどとは言ってられない。

そんな中で映姫は、閻魔の杵を拡大、また、昇格を言い渡され、再審を前提とした裁判まで可能となった。次いで、その能力と職務を理解しろという命令も出ている。有体に言えば、実務実習である。だが、不思議な点もある。

「やはり、西洋文化よりはヤマトの方がよろしいですか」

軽衫カルサシと同じ畳み方で良いのかしら、と小首を傾げながら洋袴——ズボンズボンを畳んでいるのは許嫁、セツである。

映姫が実務実習を命じられたのはセツであった。仮託されたエンマ帳や試算した寿命を見ても、後数年は死相も見えない計算になる。一体、どうなっているのか。

これがわからない。

(とはいえ)

上司たる閻魔羅閻エンマラジャの命令である。

何か考えがあつてのことだというのは間違いない。

「今日なんぞは江戸城に登城させていただいてね。ふらんす？ で作られた銃を撃たせてもらったんだ。凄かった。後ろから弾を入れるんだ。名前は……み、見煮え？ なんかそういう名前だな」

子供のようにはしやぎながら、帯を整えながら為吉は語りだした。それを、「へえ」「そう」「ようございまして」と言いながら夫婦の会話をしているのを、映姫が見ていた。

「それと、横浜の方からも人が来てね。色々と教えて貰ったんだよ」

この近代化の波によつて、紫は閻魔羅閻に閻魔増強を提言している。ついでに何か別のことを画策しているようである。が、映姫にはまだ知らされていない。ただただ、自分の役目を果たすだけであつた。

「らぶ、というのがあつたらしいよ。漢字になおすと『愛でる』の字を当てはめるらしい」

「へえ。どういふものなのでしょうね」

「人をいとしいと思う気持ちだそうだよ。もうちょっと深く言うと、その人にとって大事な相手に自分の全部を捧げることなんだとか」

へえ、と映姫はこれにも不思議な勉強をした。と同時に、セツと同じことを思った。

「一蓮托生みたいでございます」

この場合、語源に近い。

身を焦がす恋愛感情の果てに自尽した二人が、次は『一つの蓮に託して生まれよう』とすることである。なるほど言い得て妙である。為吉は納得した。確かに、『その人にとって大事な相手に自分の全てを捧げること』である。

「ところがね、人それぞれに『らぶ』の形があるそうだよ」

「そんなの、ワガママですわ。自分の勤めを果たせばお終いでしょように」

そうだ、と映姫は納得する。

為吉には奉公を務める勤めが、周辺住人との折衝をする地域政治を行う勤めが。セツには内職と家事全般を行う勤めが。時が過ぎれば、また別の役割が出てくるであろう。

そういう自らの勤めを果たすのが、社会を構築する動物たる人間の責任というものだ。

「ハハハ、まあ、そうだねえ。では、俺たちも『勤め』を果たそうじゃないか」

(おっと)

ここから先は二人の蜜月となる。映姫は思わず視線を逸らした。

「お勤めを果たさせていただきます」

セツが、そう言った。



☆☆☆

それから、一月ほど。

為吉が奉公をしている主君に一報が届いた。東北で戦争が起きたという一報である。

時、奇しくも秋田藩と会津藩による『反新政府』を掲げる会庄同盟が成立し、翌日に新政府軍が江戸城を無血開城に成功した時分である。為吉が奉公している君主も、今後、東北に出立して戦争に参加しろという一報であった。

その夜、為吉は門番に両手をこすり会わせながら外に出た。そのまま、月明かりを頼りにセツの家に向かった。ガガン、ガン、と。一拍を挟んで三度叩く無言の会話。これをもって引き戸を叩くと、セツが眼をこすりながら出てきた。

「どうしたのです？」

「ご両親を起こしてくれ」

同じく起きてきた老夫婦を見ると、為吉は頭を下げた。

「近々、東北への出征が決まりました。つきましては、一年を目処にここへ戻りますので、その時はセツさんと、改めて祝言をしたく思います」

老夫婦はこれを迎えた。為吉とセツは昔から仲が良い。現に二人を許嫁にしている。祝言はまだかと手ぐすねを引いていた部分は老父にもある。とはいえ為吉にも勤めを果たさねばならない事情がある。

「必ず、帰って来てくれよ？」

と、老爺は返事をした。

数日後、為吉はセツの世話を受けて準備をした後、夜陰人影に紛れてまず東へ、そして次は北へと向かった。後年に言われる戊辰戦争に参加することとなる。

(さて)

映姫は身構えた。これから、映姫の『務め』が始まる。

為吉ではなくセツの裁判を始めるべく、エンマ帳を取り出した。裁判の時にどうせ鏡で見のだから要らない、という部分はあるのだが、忘備録を残しておくことは決して悪ではない。その日から、記帳を始めた。

そこから先は、幾月か見ていた映姫であっても正視に耐えない状況であった。

『○月○日 内職の洗濯中に転ぶ』

『○月×日 自治会開催の排水口掃除参加者に振る舞う昼食を調理。焦がす』

『○月○日 掃除をして家具を破壊』

可能な限り人に見せれるものを列挙してこれであった。務めを果たす年頃の女にしては余りにも無惨な状況であった。

(何してるんですかねえ)

ああまたやった、とエンマ帳に筆が進む。

手を出してやりたくはなるが、手を出せない規則になっている。いたしかたなしと映姫は断じた。

が、些か様子がおかしい。

「大丈夫。大丈夫」

とセツが何度も言っていた。初めは周囲を気づかかってかと思つたが、何度か見ている内に、己の内からわいて出る、いやに苔むした暗い情を塞がんとする陰りが見えた。

違和感を覚えた映姫が、数日後、その答えに気づく。

無論、周囲への気遣いはある。何はなくともセツ自身に課せられた社会の務めを果たさねばならない。これから春雨も降るであろうし、綿抜きも近い。

一方で、セツの内に宿る、恋余る女の情念が、出征した為吉の身を案じさせていた。二階の座布団に座って蛇の目猪口に映る月を飲んだ思い出。あの、灰色の曇天までも彩る輝かしい恋情を手放してはならないと、恋草が激しく燃えていた。

その内からわき出てくる苔むした暗い情に対し、為吉は『大丈夫』だ、とセツはお題目を唱えるが如く言い続け、自らに対して暴走をしないように律していた。

そして、一年が経った。

折しも、今上天皇（明治天皇）による東京遷都が完了した前後である。

新政府、反政府ともども旧幕臣の動向はさておき。自らの住処である大江戸が、事実上、国家を代表する首都となったことを喜ばしく思った者は多い。連日連夜の宴会が行われていた。が、セツはその限りではない。

「無事か？」

「ええ『大丈夫』ですから」

老母の言葉に対しても、布団の中からそう返すだけであった。当時、手紙の行き来はそこまですぐで発達していないし、何より、為吉は出征したのだ。そう簡単に手紙が出せる状況ではない。この時ばかりはセツも天を怨み世を嘆いた。

そしてついに、お迎えがやってきた。セツの魂が是非曲直庁の鬼に連れて行かれる。

（早い！！）

映姫が顔をしかめて驚く。確かにセツは心労を抱えていたし、為吉を想うがあまり精神を磨耗していたであろうことは間違いない。死相を見たという者もいるであろう。とはいえ、水鏡

に似た映姫の瞳には、セツの瞳に為吉と会うまでは生き抜こうとする力強さが垣間見えていた。

計算違いだ!!

そう確信した映姫が、是非曲直庁に急ぐ。

巨大な門を押し開けて、虚の吊り下げられた是非曲直庁の廊下を抜け、映姫は巨大な伽藍の前にたどり着いた。この、善悪のるつぼと化している伽藍では、上司・閻魔羅闍が裁判をしている。

即刻、映姫は直談判をした。自らが記したエンマ帳を片手に、セツが如何にして父母を敬い、周囲を気遣い、為吉を想ってきたかを述べた。

「なるほど。四季映姫の発言を鑑みると、どうも手違いの予感がする。調べた上で、しっかりと判決を出す。調べてまいれ」

そう決定づけた。閻魔羅闍が話の通じる相手に助かった。あいきょうちよせう哀矜懲創、懲罰を与えるには思いやりがなければならぬ。許可を得た映姫が、寿命を計算する事務方に向かった。

「あー、急ぎの用なら自分でやってもらった方が」

映姫が頭を痛めながら、資料を片手に、算木を片手にして算盤に向かった。

微に入り細に穿つ性分の映姫は、事務方に向いているとは言えない。有体に言えば、質が良くて時間がかかる。映姫の長い——長い戦いが始まった。

計算する事丸二十四時間。

更にそれを三回で都合三日三晩。女靈魂が持つ生前の寿命を計算し終えた。結果としては、死人の入れ違いというのが発覚。

業務の不手際に怒りを覚える映姫であったが、彼女にそれを咎める権限はない。何より、セツ自身が死を納得してしまつたが為に、肉体と靈魂は切り離され、三途の川を渡つて是非曲直庁までやってきたのだ。

この状況は、強くは覆らない。

だが、やってみるだけの価値はある。閻魔羅閻に正しい計算結果を渡した。そして、新たな判決が言い渡されたのは、一刻後であつた。

そして、此岸では。

セツの死後、まず葬式が行われた。東京遷都が行われた宴会気分であるために、慎ましやかな葬式であつた。そして老いた父母はセツ以外に身寄りがいなかった為に、身辺整理をした後、千箇寺せんがじまい参りという、千軒の寺を参る長い旅に出た。

セツの死後四日目にして、為吉が出征から帰つてきた。口汚く罵倒する者もいる中で、為吉はセツの死を知つた。そして為吉も心労から病に倒れた。かろうじて元氣を取り戻したものの、

為吉が痛ましい事実を思い返した途端、再び、強い苦痛が蘇り、なぜ自分も死ななかつたのか、と酷く悔やんだ。

いっそのこと、と為吉がある事を決意する。

セツの墓前での自害であった。

夜半、人目をかいくぐって墓所まで行き、スラリと、柳刃の如く鋭い短刀を鞘から抜いた。

為吉がスツと瞼を閉じると、今は亡き父母の顔、会わせる顔の無い義父母、そして愛するセツの顔が浮かび上がった。

「今、会いに行くぞ」

いざ、と為吉が刃を腹に突きつけた瞬間である。

「あなた!!」

セツの、絹を引き裂くような声が聞こえた。馴染みのある声と長年恋い焦がれた言葉は、為吉にも聞き間違えようが無い。恋しい女の発したそれであった。為吉が振り返ると、セツは膝をついて視線をあわせ、柔らかに微笑んでいる。

「生きていたのか!？」

「私は死んでおりません。全ては『手違い』だったのです!!」

これが、是非曲直庁の出した判決であった。

確かに是非曲直の手違いであった。が、セツ自身も自らの死を一度は受け入れた。いかな閻魔、いかな是非曲直とはいえ、肉体と魂の接合を復元するなどということは簡単ではない。だが、セツは善人であった。

『せめて子を生して、それを夫への孝行、親への孝行としてやりたいのです。そうすれば、私は満足して、次の生を生きようと思いません』

どだい、一度は死んだ身である。

残してきた父母と為吉の為に動きたいと言い出した。

機構上の問題とはいえ、人間は生きていけば罪が累積していく。一度は切れたロウソクを繋ぎ直す行為によって、この女の徳は徐々に失われる。深い地獄に落ちるのは間違いない。だがそれでもセツは、務めを果たすことを望んだ。

これによって、子をなして孝行を果たすまでの間、蘇ることとなった。

「懐刀を忘れて危険な目にあつたからな。もう手放しはせんぞ」

「貴方へのお勤めを果たさせてくださいまし」

二人はそのまま出奔。

そして、甲斐国（山梨県）は身延村へと居を移した。川幅の広い富士川と急流の早川が合流



するここには有名な寺がある。女の提案により、僅かな賃金と男が出征した時に得た金とを頭金に、食べ物屋を開いた。

二年も経つと、商売も軌道に乗る。

商売繁盛のかたわらで、一粒種が生まれた。

その一粒種が一歳と二カ月を迎えた頃。

セツの老父母が身延村へとやってきた。長旅でくたびれた衣服をはためかせ、長い運動でついた筋肉を休ませようと、宿を探していた。そして一つの食べ物屋を見つけた。

「ああ、あそこで聞こう」

と、老父が言いだし、老母も後を追う。疲れた老体にムチを打って足を運び、食べ物屋の前についた時、目を丸く見開いた。

「そんな!」

自分が見知った男が働いていた。息子同然に思っていた男が、出征をして音沙汰一つ無かった男が、大事な一人娘と祝言の約束をしてもなお帰って来なかった男が、とある村の食べ物屋で何食わぬ顔で働いている。

老父に怒りの感情が芽生えた。

だがそれ以上に、喜びの感情が沸き起こった。

大粒の涙とを流し、張り裂けんばかりの鳴き声をあげ、恥も外聞もなく男の生還を祝った。

「だが、どうしてここに？」

「じつを申しますと、死んでおりません。——」

その会話までを聞いた女セツが、二階にいた。

我が子を隣にし、寝ぼけ眼のままセツは実父母の到着を知った。ああ茶の用意をしなければ、と。セツは寝ている赤子を起こさないように気をつけながら布団から出た。普段から大人しい子であるが、寝顔を見ながら父母に謝罪をして茶を飲み交わしたいと、セツは思っていた。

未だ霞がかかった頭で深呼吸を一つした時、強い視線を感じた為にセツが窓の方へと振り返った。

「——!？」

途端、セツの眠気は雲散霧消し、ハッキリと強い自意識を目覚めさせた。

背の高い、明鏡止水を身にまとったかの如く清廉さを持っている女が一人と、奇妙な鎌を持った、彼岸花の花を裂いて揃えた赤髪の女が一人。

それぞれが、宙に浮かぶ船に乗っていた。どうも船頭らしい、やる気の無い赤髪の女——小野塚小町——と、対照的にもう一人の女——四季映姫が鋭い視線を送ってくる。

「二年前の約束を果たしに、迎えにきました」

突如、セツの脳裏に走馬灯が走る。

為吉を想つて死んだあの日を。同じ赤髪の女が三途の川渡しをしたこと。そして裁判での答弁。月に揺れるススキと桑の葉。床の間の代わりは男の手と女の髪。鶴亀の置物ではなく江戸銀の玉カンザシ。宿の亭主から頂いたドブクロクでの三三九度。頬紅は乙女の恥じらいで十分に。そして我が子の初産。

生きるには十分な理由であつた。

死ぬのは嫌だと思ふには十分であつた。

「さあ。死後の務めを果たす時が来たのです」

映姫の凛々しい言葉を聞いたセツが、毅然とその場に正座をして相對し、苔むした暗い感情の蓋を開けた。

「仏さまか閻魔さまか、知りませんが。私にはもう関係のない話です」

為吉と再会したあの夜。為吉から出奔を提案され、それに乗つたセツ。

「あの日、あの夜の丑三つ時。私はあの人に言われました。『懐刀を忘れて危険な目にあつた。もう手放しはせん』、と。ですから、私もあの人に返事をしたのです」

ああ、そうだ。

セツが頓悟した。

自らの内からわき出てくる、燃えるような、乾くような、飢えるような慕情。この慕情に一切の加工を加えることなく、日常に関わる一切の行動の起源とし、自らの心身の安寧はおろか、ついには自らの存在理由ともなり得る。

これこそが、正しく為吉の言っていた外来語なのだ。

「貴方へのお勤めを果たさせてくださいまし」

自らの利益を捨て。

他者の利益にのみ我が身を費やす破滅的行動。

苦痛に快楽を見いだす被虐的嗜好にも通じるこの精神によって、セツは今、自らの愛を起源にして家族への孝行を果たし、自らの存在理由にまで高めあげようとしていた。

だが、映姫はこれを断じる。

「世迷い言を!!」

何たる身勝手か。

「為吉が生きている。父母が帰って来た。これにて貴方が持つ生前の務めは終了し、以後、裁

きを受けて死後の務めを果たすのみである!!」

そうだ。人は死後にも務めがある。

「その身勝手は貴方の身を滅ぼします」

映姫が悔悟棒に罪状を書き上げてゆく。

「生前こそ真つ当であったものの、男を失った途端に理性を失い、結果として上の空となった。それでも、と閻魔羅閻の慈悲を持ってしてもその体たらく。それではやがて取り返しのつかないことになるでしょう。今なら罪は軽い。ここで強制的に連れていきましよう」

「ならばこの身、生成なまなりと成りまして、生きて我が子を守りましようぞ」

映姫が一步前に出た途端、セツの肉体が爆発したかのような勢いで黒煙が吹き出た。赤いザクロに似た双眸が見え隠れする。

「鬼子母神にでもなるつもりか!？」

「我が子を守り、あの人にお勤めを果たせるならば不都合はございませぬ!!」

もはやこれまで。と、そう、映姫が断念した。

「ならば——」

墨汁を落とした闇がセツを覆うように広がる。

映姫とて二年間、自らの職業に理解することがあった。

一つ、裁判は上から下へ一方的に流れるという事。

一つ、靈魂は閻魔の判決には逆らえないという事。

つまり、このセツの靈魂は閻魔たる四季映姫には逆らえないことだ。四季映姫が小さな手鏡を取り出した。千年の昔から愛用している鏡——浄玻璃の鏡である。

「——開廷する」

莊嚴とした声が、セツの全身を震え上がらせた。開廷した瞬間、女は肉体を失い、此岸たる現世には存在しない状態となった。だがセツとてこのまま裁判を甘受するつもりはない。反撃に十分となるように力を溜めていた。

浄玻璃の鏡が、生前に加え、復活してからの行動が映し出される。特段、悪いことは何もしていないようである。強いて言うのであれば、子供を過敏に守ろうとして父親を遠ざけていたぐらいか。

だが、機構上の問題として、人間は生きるだけで罪を重ねる。

「貴方は生前、人に良く尽くし、死後も夫と父母を大事にし、今回も我が子を相手にしようと、生成や鬼子母神になってまで守ろうとしている」

——そう、貴方は『社会の務め』を重視しすぎている。

「それ事態を悪とまではいいませんが、いささか視野が狭い。自らの視界に映る範囲のみを社会とし、それ以外の広範囲は見えていない。貴方は、他がどうなるうとも、我が身周辺の務めだけを果たしてきた」

罪の書かれた悔悟棒を映姫が天へと向ける。

「閻魔さまはいつもそうでございます。何かにつれ揚げ足取りをして地獄に落とすばかり!! 私の抱いた想いとはそういうものでございます!!」

唸り声をあげながら、半ば妖怪となったセツが映姫に襲いかかった。

「この世には、天の理があるのだと、思い知れ!!」

悔悟棒が振り下ろされると同時に、靈魂を痛めつける弾幕が飛びでる。罪は重みとなり、靈魂を苦しめ、そのまま捕縛となる。ついにセツは、天を怨み、世を嘆き、人に怒り、天の理に涙を流した。

鎮静化した靈魂を片手に、映姫は小町に命じて船を進めさせる。

夫と父母が入ってきたのは、その直後であった。

寝ている赤ん坊と、数年前に父母が預けた位牌があるのみであった。

その河渡しの時に、映姫は思う。

なぜ、セツが地獄に落ちるのか。

生前は間違ひなく務めを果たしてきた。為吉と再会してからも、問題なく務めを果たしてきた。強いていえば、鬼子母神的なアヤカシになりつつあったぐらいであろうか。

確かに最後は地獄に落ちるべきであろう。

だが、務めに励む性格の女が、乾くような慕情によって上の空になり、その時に幾つかの悪業を重ねたであろう。遂には姪欲にまで到達した。長子が生まれたのは存外早い時分であったが、濃密で官能的な性愛の奉仕があったのは映姫も恥ずかしながら観測している。

恋に狂ったといえばそれまでであろう。

とはいえ、懸想した男が目の前からいなくなれば動揺を覚えるというのは、感情論から言えば極めて当然である。まして僧であるならばともかく、今回は在家の人間である。

まさか——と、映姫の脳裏に一つの可能性が芽生えた。

地獄行きが前提の仕事であったのか!?

そんな筈はない。だが映姫の精神にあるのは、幾度となく検算されてもなお地獄に落ちるセツの行動であった。

(愛染明王ならば何と言うであろうか)



あるいは、外来の神ならば。

鐘楼の鐘が鳴る。

遠い横浜でも聖心教会の鐘が響いているであろう。

異国からの神を讃える鐘の音が。

自然に抑圧された人間が自然に対し妥協と譲歩を勝ち取る自然崇拜ではなく。自然からの抑圧を受け流しながら人が何かに集中する仏の教えでもなく。

ただただ、人が、人の幸せを考えて動くことのできる異国の神を、鐘の音が讃えている。

どこから響く鐘の音を、映姫が真なる文明開化の音だと気づくのは、そう長い時間はいらなかった。《了》



甘茶

天狗相聞

とんと閉め切った四畳間である。麗かな陽光を差し入れる窓も無いのだから、静寂の中にどことなく暗澹とした塩梅の煙が立ち上る。事実、魔理沙と火桶を挟んで相對するこの主人は雁首を弄り何事かを言わんとする前に、煙管から論を呑んで居るわけだから豪も合点が行き尽く。勘当されたものばかりと思つていたものだから頗る決まりが悪い。

「魔理沙さんは——と振り出した言葉の切っ先に劍呑な話題を感じ得ぬままに拝聴する。「いくつになりなされた」「十八と少し」要領を得ない反応に煙管が呼応して気炎を上げる。「少しつてのは変な物言いだね。貸本屋の小娘でさえ自分の年は勘定できるさ」「何故私をお呼びになつたのですかお父様」魔理沙にお父様と呼ばれるこの男は、商人の相貌を天意に阿りて地に逢着した全きの商人であつた。贅を尽くした紺緋の襦袢を片掛けの紋付羽織で隠すままに、昂然と己が小金持ちを余念なく示す風采である。そうした風采は服の上だけに認められるものではない。四角に象られた眼球は絶えず人情を吶喊し勘定を探してざらざらと威光を放ち、鼻梁は高い内に口先へ落ち着いたかと思つたら、酷く幅を広げた漫罵口が待ち受けているわけである。是に差し向かいて常人はひとまりもない。「理由などは分かるでしょう」魔理沙が答えに窮していると下女が茶を運んできた。「絹を見習いなさい。女中奉公して家に入る準備をする年ごろでしょう」女中を顎で指し、火桶が苛立ちの不幸を受け煙管に殴られかんと震えた。「絹はいくつになつたんだい」魔理沙に聞かせるように大仰に聞いてみせる。

「十七でございます」「もう親父さんが相手まで決めてらっしやるそうで」気色にこやかに感じ入った様子で話す父親の縁談話をよそに魔理沙は頗る慄然りつぜんとし、動機を隠す様に帽子の先をほぐしていた。

膝行して部屋を出る時分には夜の準備は終わり、夏の風波が魔理沙の頬を撫でる。庭の檜は当に萎んで月影に沈んで曖昧な輪郭をその葉に投げかけている。魔理沙は庭には目もくれず門へ駆け出した。幼い時には季節折々の花々が見せる表情をこの上なく美しいものだと思ひて疑わなかったが、今ではこの商人の見栄と虚勢の張り子だとしか思えなかった。門扉の傍らに佇む者が在る。一見魔理沙は絹とは気付かなかつた。四畳間での父からの呵責かじやくの際には意識には及ばなかつたが、家を出た時分の記憶の絹とは一回りも二回りも成長しており、しばしば袖を引き、水あめをねだる姿は何処にもいなかった。銀杏に結つた髪は黒々として洋灯の鋭い光を珠の粒へと変えて夜に溶かしている。広々と開いた緩やかな富士額の下に、垂れ気味の瞳が伏しがちに収まっており、如何にも柔和な印象を見る者に落とし込む。口鼻は主張しない程度に小さく、全体を擁して性根の優しい徳が表れていた。が、今は逼迫ひつぱくした様子で虚空を見つめている。その姿に気圧されたか、魔理沙から口を開いた。「御見送り有難う」「お嬢様も気を付けて」頭を下げつつ、不意を食らつたかのように妙に他人行儀な挨拶だった。気恥ずかしさよりも魔理沙には奴の娘だと扱しんわれることに曠しん恚を覚えた。

「お嬢様はやめてくれ。昔のように姉さんと呼んでくれ」「はあ」と心許無い生返事した絹は「姉さんに頼みごとがあります」と至極真剣な面持ちで言葉を継いだ。魔理沙は姉ぶっておきながら今更無碍むひげにすることも出来ず、箒を片手に扉の淵に腰を下ろした。「急過ぎじゃないか」「姉さんにしか頼めないのです」「何でまた」「私の結婚はご存じで」「先刻引き合いに出されたから十分に承知しているさ」嫌味を混ぜたが絹は気づかない。「その結婚を―取り止めたのです」「はあ」魔理沙は大変に困ったぞと後悔した。「旦那が嫌なのか」「いえ、代介様はとても勤勉で私のことを大切に思ってくれています」「では何故」「―他にお慕いしている方が居ます」袖の裡うらを握りしめ、絞り出すように絹が呟いた。「代介様との縁談が進む以前より逢瀬を重ねていた御仁がおります。ただお相手の身分が身分故に父にも、ご主人にも話せずひた隠しのままに結婚まで取り決めとなつてしまいました。あれほどにまで娘の幸せを望んでいる父にどうして本当のことが話せましようか。このまま式まで進んでしまえば自分の定めだと受け入れるつもりでいきましたが、何の因果か姉さんが数年ぶりに訪ねて来て下さいました。これぞ御仏様の下さつた最後の機会に違いないと思ひ、こうしてお頼み申し上げるのです」

夜具に包まれながら魔理沙は宥然ようぜんと絹とその結婚する相手であろう代介と、絹が密かに慕っている相手とを思い浮かべていた。浮かんでは消え、消えては浮かぶ、揺揺ようようとしたまだ見ぬ男二人の影の中心に際立つて佇立している絹の姿は恐ろしいほどに美しく思えた。普遍的な美の

陰に隠れがちな、稍ぐやともすれば、醜悪なものとして認められる、一個の人間の芯に宿る激しい情愛を吐露した絹の善さを、露悪的に扱っては不可ない。言わば、喝采を送るべき態度であつて、彼女の機微を思うにつけて魔理沙の心奥は鐘の様に調和して震えるのである。そうして同時に、自分が折よく現れなかつたのならば、絹は何事も無いかのように結婚し不満も現さず人生を全うするのだらうと思ひ至り、暗い心持で眠りについた。

夜の明けて、日の高くならないうちに魔理沙は妖怪の山の麓へ向かつた。絹の頼みとは想ひ人に文を届けて欲しいというものであつた。何故妖怪の山なのか合点のいかなかつた魔理沙は絹に何度も問い正したが、どうかこの文を妖怪の山まで届けて欲しいとの一点張りで、絹の氣迫に押されて聞くに聞けぬまま文を届けるに至つた。里に居を構えない変人、偏屈、靈夢のよくな無頼の人のようである一端の娘と春を興じるに甘んじているあたり人界を捨て去つたわけではないと魔理沙は推察するにつれ、妙な楽しみを見出していた。人目を忍んでの身分違いの恋。桐壺帝とその桐壺更衣、はたまた夕顔と源氏かくやともあろう幻想郷に些ちとも似つかわしくない文の往来に助力できるとあれば、忽ち絹の不躰たちまも齒切れの悪い不明瞭うちやさも打遣つて、空に吸われし魔理沙の心である。半時も飛ばば妖怪の山の中腹に、哨戒を生業としてゐる天狗が濃い緑の丹青たんせいに白を塗抹とまつしているのが魔理沙の目に映つた。天狗達と不和を起すのを善しとしない魔理沙は箒を下り、徒歩で向かうとした。山路を登りながら魔理沙はこう考えた。至極

天狗や父親という輩は言葉だけは滾々こんこんとして、勿体らしく出てくるが、世間体ばかりで個人を睥睨し、社会という存在しない何かを神と崇め奉り、同時に恐れている。何ぞ個人や自由といった外で云う―童子の伝える―所の二十世紀然とした思考に至らないのか。殊更ことさらに独物的考えで個人、娘を道義の鎖で縛り上げ仕舞には血が噴き出すまで痛めつける。屢々しばしば己が煩悶で精神作用を悪くするのが魔理沙の癖であった。その為目的地に着くころには快活な四肢の運動後には似つかわしくない暗澹あんたんとした感情が渦巻いていた。

果たして着いた先は天狗の詰所から離れた。蕭疎しょうそな響きの、物置と称した方が適当な小屋であった。山路の神経活動のままに荒っぽく戸を敲くと一人の青年が出てきた。魔理沙はまず以てこの青年を驚愕の目で捉えた。木綿の紋付の羽織に袴を着けて、至極真面目そうな書生風の青年である。が、その背後には黒々とした翼を拵いそえている。相貌も至って幻想郷の男性の觀念から逸脱することの勿い様に思われるようである。翼を視界に捉えて鼻を見物するに於いて、里の男がべとりと障子紙を張り付けたような印象と比べ、些いさか鼻筋が通っており、長い。また目を横に滑らせると、耳も丁寧に尖っている。つまり、幻想郷での常識をもつてすれば、この男は天狗であった。「やあ」と柔らかに笑みを青年は浮かべるが魔理沙の警戒心は解けない。「天狗か」「驚くのも無理はない。此方こちらへ」促されるままに小屋へと上がるが、魔理沙は以前腑に落ちない面持ちである。「絹を食べるつもりか」「食べる何て料簡りょうげんなどは持ち合わせてな



い」笑みの中にいら立ちを隠したまま青年は続ける。「絹が二人の秘密を他人に話したことに驚いてね。僕は三四郎と言う」

薄暗い小屋の中で訥々と妖怪が語る様は、草子にも書かれているようなおどろおどろしい光景ではあったが、反して三四郎の語る馴れ初めは肉薄する恋の喜びを殊更詳細に語るもので魔理沙も感じ入っていた。三四郎は鴉天狗としては特筆して若く、妖怪となったのはここ数年であつた。鴉として力を増していたある時分、己が驕りからか、はたまた漲る妖力がそうさせたのか、体躯の何倍もある大鷹に喧嘩を吹っ掛け、見事に返り討ちに合い、民家の庭に墮ちた。それが魔理沙の父親の家であつた。無論主人は道に捨て置くように言ったが、幼かつた絹は土間の釜の後ろに三四郎を隠し、血止めや滋養をしてくれたと三四郎は語る。「あの時はまだ畜生であつたけれども、彼女の優しさに慥かに涙したと記憶しているよ」「鴉が泣くものか」、魔理沙は幾分か茶化した調子である。「じゃあ泣くために天狗になったのかもしれない」「ご立派だ」「あの時の感謝を伝えたくて、絹にもう一度会いに行つた」「どうだった」「絹は美しかった。そうして自分があの時の天狗だと伝えても、微塵も疑わず『大変良かった。急に居なくなるのだから猫に食べられたのかと思つたわ』と答えるもんだから、どこまでも人が好いんだろうね。君が食べるつもりかと聞く気持ちも分かる」「好い関係じゃないか」「ところがどうだい。何度か会ううちに彼女の中に何やら後ろめたい事があるのに気が付いたんだ」「婚約者か」

「ああそうだ。悲しき哉、僕の好意は彼女に辛い思いをさせていた」魔理沙は曖昧がちに首を動かした。「婚約者が絵に描いたような悪漢であれば社会の道義から離れて彼女を奪うことを考えた。が、どうにも彼と絹がくつつく方が幸せではないか」三四郎の口調は自分に言い聞かせているようでもあった。不憫に思った魔理沙は懐の絹の手紙を渡してやるとした。

手紙の内容はこうであった。「—私は卑怯な女です。父が縁談の御話を持ってきた時には本当に御恨めしく思いました。ですから、その晩にも三四郎様と何処かへ消え失せたいという気持ちもございましたけども、どうして娘が父を裏切れやしましょうか。ほんとうに世迷言であると知っておりまして、知っておりましても、内より出でるこの執着をどうすればよろしくて。娘でありながら女であつては、卑怯でしょう。御縁談を反故にして悲しむ父の顔を想像するにつけて、私は人の子でありますから、内に地獄の火が灯るようなのです。嗚呼。三四郎様は天狗でしょう。人の道理など気にすることがありませんか。娘にも女にも慣れず、永遠に漂白するのを可哀相と思つて」最後にかけては嘆願状のようなものではあつた。三四郎はこの少女の精一杯の文に涙が滲んできた。滲んだ後に一寸ばかり精俊な顔つきに為つて、また手紙を一から読みだした。魔理沙は茶化すわけでもなく凝と見ていた。三回程読み直すと、三四郎は「有難う」と魔理沙に述べ、床に顔の逼迫するまでに頭を下げた。「やあ、礼には及ばない。それでどうするんだ」「どうするとは」「絹の事さ。迎えに行かないとでも」「うーん」と

三四郎は腕を組んで唸るばかりである。この手紙に涙した三四郎だから、今すぐにでもこの小屋を飛び出して絹の元へ飛んでいくだろうと勘定していた魔理沙は、豪も煮え切らない三四郎の態度に苛立ちを隠さなかった。「何を唸ってるんだ。行くのか行かないのかはつきりしろ」「行くことには行くさ」「なら何を迷っている」「何故僕がこんな所に住んでいるか知っているかい」三四郎の口には自嘲と諦めの色が浮かんでいた。「知られたのさ。人間と天狗が通じるなど天狗様が許す筈もない。幸い、まだ若いからという理由でお許しを貰って此処に謹慎している。『次に天狗の道理を破れば分かっているな』と。僕は天狗だ。天狗の社会から外れれば絹と一緒になるうがなるまいが危ない事になるのは明瞭だ」三四郎の言葉の端々には悔しさも確かに認められた。が、魔理沙には天狗特有の美德とも捉えられる社会性が、悪として肉薄してきたようにしか思えなかった。平素魔理沙の抱えている矛盾は是に於いて不幸であった。天狗の社会がどうした。人間の社会がどうした。女だろう。男だろう。どれでも無い魔理沙が語るには余りにも滑稽であり、また傲慢であった。悄然としていた三四郎であったが、魔理沙の稚拙な論に絆される所となり、今夜には迎えに行くかと相決まった。幸か不幸か、三四郎と魔理沙の間に共有されるものは若さただそれだけであった。

役目を果たし、三四郎の元を安心して魔理沙は去った。帰りに知己の霊夢に土産話をと思い立ち博麗神社へと寄った。鳥居を潜ると、石も疎らな参道の先に霊夢は何をするでもなく立ち

尽くしていた。魔理沙はこの友人を酷く美しいと感ずると同時に常に疎ましく思っていた。それは何者でも無い自分を鑑みるに、楽園の巫女を務める霊夢に羨望を抱いてたことに起因する。―それは『何でも屋』を開いているのではなく、『何でも屋』しか開けない魔理沙の質であった―ただ今日は恋仲を取り持った為幾何かの優越感を持っていた。霊夢はただ話を聞くだけで別段いつもと変わらない様子であった。一通り魔理沙が話し終えた後、霊夢は徐に口を開いた。「私は人間巫女よ」鮮やかな悲哀の籠った声だった。ひよつとすると今までの霊夢は河童の機械で作られた合成音声を基として発声しており、今初めて己が声帯を震わせたとしても信じていくくらいに美しいと魔理沙は思った。思った刹那、霊夢の黒目が伏し様に慥かに揺れ動くのを見て後悔した。取り返しのつかない黒い光が、魔理沙の未来を貫いて、全生涯を暗く照らしたのだった。

虚空に霊夢の双眸が浮かぶ。雑音が切り取られる。周りの一遍が静止して色を失っていく。箒を固く握りしめるのだが、柄の形が安定しない。夏の昼の面影を消し去りながら魔理沙の頭の中には問いかけだけが反響していく。魔女か人間か。此方か彼方か。天狗と人間が結ばれることは果たして幻想郷ではとされるべきことか。否―。「ああ動く。幻想郷が動く」魔理沙は霊夢に聞こえるように呟いた。

後日人里離れの田の泥中で死んでいる三四郎と緋の姿が見つかった。しばらくは天狗の肅清

だの巫女による処理がなされたとの噂が広まったが、結局天狗による誘拐未遂で収まった。絹の葬式には父や婚約者の代介や奉公先の主人も並んだそうだが魔理沙の姿はどこにも見当たらなかった。

魔理沙の行方は誰も知らない。《了》



長久手

出来事

祭りの前のこんな夏の暑い昼下がりになぜ里に出ようと思ったのか、自分でもまったく分からない。大通りは地獄のようにごった返している。気温と人の体温で空気が揺らめいて、奥の方がどうなっているのかさっぱり見えない。手拭いで首筋を拭っても拭っても汗が吹き出る。前を歩く者の首筋にかかつて睨まれそうで、溜め息をつくことさえ憚られた。

少しでも新鮮な空気を吸おうと顔をやや上に向けて、神事が何かに使う木材を運んでいるのが見える。それも恐らく渋滞の一因になってはいたが、あまり責めるわけにもいかない。祭りの前であることが渋滞のそもそもの原因であるし、そうであれば祭りのための運搬は、どちらかというと結果に近い方の原因だった。そして、それらのこととは別に、祭りは私たちの大きな収入源だ。

揺らめく空気のせいかそうでないのかよく分からないが、木材はふらふらとしてどうにも危なっかしい。見ていると不安な心持ちになってくるので視線を下に戻した。しかし、こちらも当然ながら人々が暑さに負けてぐったりとしている様子ばかりが見えるのでまったく気が滅入る。溶けつつある化粧を頬に滲えている女がいる。自分を取り巻く気に入らないことのすべては、まさに今周りにいる人間たちのせいなのだと言わんばかりの卑屈な目つきで、腰の曲がった男が歩いている。前を歩く女の頭から耳が生えているのが見えて、ついに私も頭がやられたかと思った。



じつと見ているとそうではないことが分かった。目の前の女の頭からは本当に耳が生えていた。狐の耳が。八雲だ。暑さにやられていることは火を見るよりも明らかで、だからこそこんな人間たちのただ中で獣の耳を出しっぱなしにしているのだ。

平生の私であればすぐさま耳元に口を近づけ、低い声で名前を呼んで驚かせてやるのだが、そんな茶目つ気を起こす気も起こらないほど暑い。それでも私は自分の頭に手をやって、己が同じ失態を起こしていないことだけは確かめた。

幾分かが過ぎた。行列は遅々として進まない。ほとんど誰もがそもそもどうして今ここにいるのかさえ思いつくことができないだろう。私もまあ似たようなものだった。ゆらゆらと木材が揺れている。自分と木材との間の距離がよく分からない。私は恐らく苛立ちつつあった。私は目を瞑る。

大きな鈍い音と、少し遅れて悲鳴と呻きが混じって聞こえた。私は急いで目を開ける。八雲は既に人間たちを押しつけて、騒ぎの方へと急いでいた。彼女のかき分けた群衆の空白がそのまま道になっている。私は自然とそれを辿って歩いていった。

音がした時に予想されたことだが、運ばれていた木材が地面に横たわっているのが人と人の間からちらりと見えた。子供の大きな泣き声が聞こえてきた。私は顔をしかめる。足か手か、分からないが、下敷きになって潰されたと思ったのだ。私は嫌な気分になった。はつきり言う

が、私は子供に同情してそうした心持ちになったのではない。ただそうした場面、情景にこれから出くわす自分自身をのみ想像したのだ。このことは、後から思い返しても、いや、後から思い返した時にこそ私の気持ちはずいぶん明るくさせた。

私はそういう悲惨な光景を見たくはなかったが、八雲がかき分けた人間の空白を不運にももう半分以上歩いてしまっていた。私は観念して足を踏み出した。

私がおそこに辿り着くと、化け損ねの狐だけでなく博麗の巫女とがいた。巫女は半分眠たいような顔をして、泣いている小さな子供を抱き上げていた。手も足もすべて綺麗に付いている。私はほっとした。

木材を運んでいたのは四人の男たちだった。一人が座り込んでいた。貧血を起こしたのか子供がぶつかってきたのかは分からないが、こちらでも無事だった。

子供は烈火のごとく泣いていた。霊夢は面食らっていた。厄介な事件は解決するのに、泣く子供は彼女の手には余るようだった。彼女は子供の全身を怪我がないか一通り見回して確かめていたが、何もないと分かると、次なる問題はやはり腕の中で泣き喚く子供そのものになってしまう。

「泣くな、泣くな」と彼女は困った顔で言った。「ねえって」

子供はまたますます激しく泣いた。それどころか、じたばたと手足を動かして始めて、それが

巫女の腕やら腹やらに当たった。彼女は顔をしかめて両手をぐつと前に伸ばし、子供を身体から離した。

「助けてやったつてのに、この」と霊夢は小声で悪態をついた。それから不機嫌な顔で辺りを見回した。通りを歩いていたら人々は私たちから少し距離をおいて様子を見ていた。

「いや、しかし良かった」と狐が言った。「何事もなくて」

霊夢は子供を抱えたままで女を見て頷きかけたが、次の瞬間女の頭上に金色の耳があるのを見つけて呆気にとられた。

「あんた」と巫女が言うか言わないかのうちに「いやまったく」と私は割って入った。八雲は私の方を見て頷いた。

「実に見事な手並みじゃった」と私は見ていたかのように言った。霊夢は私を睨む。私は知らない振りをした。私は狐のようなへまはしていないが、霊夢は私の変装を知っていた。

八雲は水を得たようになり、また何か言つて霊夢を褒めたので、霊夢はもう何も言いだせなくなつてしまった。

苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらを見ている霊夢をしり目に私と八雲が話していると、八雲が何かに気付いて霊夢に近寄った。八雲はしばらく子供の腹や足を触っていたが、やがて口を開いた。

「服」と彼女は言った。

「は？」と霊夢は彼女を睨みながらきつい声で答えた。

「坊主、いつの間に小便をしている」

「え」

人々はどっと笑った。霊夢は赤くなって自分の服を見る。服から袖からぐっしよりと濡れていた。

「ああ、もう」と霊夢は泣きそうな声で呻いて子供の頭を小突いた。子供はなおさら激しく泣いた。

そうこうしているうちに人混みから母親が出てきた。醜い大きな女だった。子供を見るなり、馬鹿と怒鳴って頬を叩いた。膝をついて、乱暴に抱き締めてからもう一度馬鹿と叫んだ。子供はもういよいよ手の付けられないほどに泣いている。八雲はそちらにずんずん歩いて行って、母親に大体あなたも悪いんですよとやり始めた。母親は子供を怒鳴るそのままの目つきで顔を上げたが、話しかけてきた女の頭に金色の耳が付いているのに気付くとぼかんと口を開けて呆けたようになってしまった。

私は霊夢の方に歩いていった。小便で濡れた袖を脱いで指で所在無げにつまんでいた霊夢は、呆れた顔で八雲を見ていたが、その表情は先程のような厳しいものではなかった。近づいてく

る私に気付くと、一瞬だけ睨むような素振りを見せたが、諦めたようにふっと笑った。

「馬鹿ばっかり」と彼女は言った。

「ふむ」と私は中立的な声で言った。

気が付くと通りからは人がもういぶんと減っていた。材木を運んでいた男たちのうち一人がやってきて運び直して良いかと霊夢に訊いた。霊夢は頷いた。彼らは去った。

母親は霊夢に何度も頭を下げた。子供が何か八雲に言いたそうにして服の裾を引いたので、八雲は「なんだね」と言っただけでしやがみこんだ。子供は八雲の耳を、頭の上についている金色の耳を触った。八雲はようやくそこで自分の失態に気付いて真っ赤になった。母親も真っ赤になって、八雲に謝るべきか何も見なかったことにするべきか悩みに悩んだが、子供を大急ぎで抱き上げ、「この度は本当に迷惑をおかけして」とどちらとも取ることできる優秀な解答を提出して頭を下げ下げ帰っていった。子供は母親の肩越しに八雲に手を振っていた。

「あんたまた祭りでやくざな商売するんでしよう」と霊夢は言った。

「いや、まさか」と私は言った。

「何か悪ざしたらただじゃ済まないよ」と霊夢は言った。心なしかいつもより柔らかい声だった。彼女はふわりとどこかに飛んでいった。

相変わらず暑かったが、私の心は先程と打って変わって活き活きとしていた。

今更耳を隠した八雲が「お前最初から気付いていただろう」と絡んできた。

「いや、ちっとも」と私は答えた。

八雲は舌打ちをして少しだけ笑った。

里にやってきた用事は思い出せそうになかった。それは先程までのじつとりとした苛立ちと共にどこかに飛んで行ってしまったのだ。しかしまあそれで良いのだろう。

どこかで少しだけ飲んで帰ろうと私は考えた。《了》

百合街かねる

生の実感

メリーと猫はよく似ている。氣質の放埒である点や、身体がよく伸びてしなやかな所など、あらゆる所作の細部に至るまでそっくりである。こうして同じ部屋の一つの布団に二人で潜って戯れている時など、私はメリーの耳を抓ってみたくて堪らなくなる。メリーの耳もまた、猫と同じ、一種不可思議な示唆力を持つてゐる為である。愛蘭人の血が混じる彼女のそれは丸く非常に滑らかだ。檸檬色の髪の間、時折見える白い耳は、触れずに眺めてゐるだけでもその感触が想起され、指の先がうずうずする。そのうちに我慢ができなくなりゆるりと手が伸びる。そうして無言のまま、向かい合うメリーの右耳に指を這わせた。親指と人差し指で耳朶を掴み、柔く捏ねる。もっちりとした弾力が心地よい。それから耳輪に指先を滑らせ、少し内側を撫で擦る。こそばゆそうに漏れるメリーの笑い声を聞きつつ、やや残酷な空想を抱いた。この瑕疵なき皮膚にバチンと穴を開けてみてはどうだろう。「切符切り」、或いは、現実味を持たせるならばピアスなどで。猫が鋭い悲鳴をあげるように、彼女も喉の奥から短い叫びを吐くのだろうか。このたおやかな逢瀬の中には到底予期もされ得ない、突然の苦痛にどんな反応をするだろうか。——こうした児戯に類した妄想も一度始めれば止まらない。次第に艶の混じり始めた彼女の声私の好奇心に僅かな情慾を混ぜ込んだ。メリーの吐息が睫毛に掛かる。軽く瞬きをすれば臉に乗った熱が染み込む。それから口元を彼女の耳元に寄せると、辛抱堪らなくなり、とうとうその耳を噛んでしまったのである。噛まれるや否や、メリーは甘い声をあげた。私の齒



が甘噛みするメリーの皮膚がびりびりと淡い痛覚を生む度に彼女の声が切なく漏れる。唇をそつと離し、舌先を耳輪の内側に這わせようとした所で、彼女の白い手がそれを阻んだ。「ちょっと待って」の合図である。この程度の刺激であつても昂ぶるメリーの敏感さでは、ピアスどころの話ではないなど密かに抱いた空想が私の中で霧消していくのを感じた。

次に私が興味を抱いたのはメリーの爪だった。耳を噛む私を制した彼女の指は、ささくれや肌荒れなどとは一切縁がないようで、妬ましい程に綺麗だった。五本の細く滑らかな指先に生え揃った爪はいつだって慎ましやかな桃色で、ネイルアートやマニキュアで彩られているのを私は殆ど見たことがない。その印象をきっかけに、私はまた別なことを空想し始めている。それは、メリーの爪を全部剥いでしまうのである。メリーはどうなるだろうか？ 恐らくその激痛に耐えかねて、気絶、あるいはショック死してしまうのではなからうか？ 終ぞ色を纏うことのないメリーの指先が血の鮮やかな赤色に染まる。人間の体の脆い部分が剥き出しになり、容赦のない大気の刺激に晒される。掃除も、洗濯も、ましてペンを持つことさえ、彼女にはままならない。何もしていなくても痛いのだ、ましてそのように指を動かす作業など、地獄と形容するのも生ぬるいほどの苦痛が伴う事は火を見るよりも明らかである。そうしてついには人間の器用さをそっくり失ってしまった彼女の精神までも、絶え間ない痛みと絶望によって赤く煌びやかに装飾され、椿の花が落ちるように死んでしまうのだろう。獣性の象徴たる爪を

失った猫のように、夢と現の境目さえもわからずさまよう痴れ者のように、その些細な面積を欠いただけで彼女は途端に能無しになるのだ。この空想は私を少し奇妙な心地にする。私が掌にそっと包んだメリーの愛らしい白い手が、今もこの生爪の下に熱い血をどろどろと煮えたぎらせて、痛覚をぎゅつと一点に押し隠しているのかと思うと、なんとも言えない昂揚感と背徳感が同時に私を苛むのだ。そんな物騒な興奮を彼女に悟られないよう、彼女の指先にそっと優しく唇を押し当てた。

手の先を剥ぐ、といえば、私はこんな夢を見た事がある。私の祖母……宇佐見董子の自宅である。古い木造の家は科学世紀の今ではとんと見かけなくなつた年代物で、その床に敷き詰められた畳も木枠の中に嵌められた襖や障子もどこか湿っぽく黴臭い。そんな彼女の部屋の中には、用途不明の珍品が数多く眠っている。夢の中の彼女は、箆笥の中を整理していた。そこにいた私の姿は幼く、まだ小学校にも上がっていない年頃のように思われた。よちよちと覚束ない足取りで彼女のそばへ寄って行き、作業する手元を覗き込んで私はアツと驚きの声を上げた。彼女の引き出しの中には、なんと！ 人の手が仕舞い込まれていたのである。私はゾツとした。しかし、なおよく見てみると、それはどうやら本物ではないらしく、人肌にしては無機質すぎる色の白さと光沢を帯びていた。しかしその光景が余りにも不思議なので、私はうしろから尋ねずにはいられなかった。

「おばあちゃん、それなあに？ その、たんすのなかでひかっているもの」

「これ？」

祖母は微笑みとともに振り返った。眼鏡の奥の優しい視線が私の顔と筆筒の間を緩やかに滑り、再度こちらに向けられた後、少女のように無邪気な声で平然と言葉が返された。

「よく、猫の手も借りたといっていうでしょう。これがね、私の『ネコ』の手よ」

ずるりと仕舞われた手を引きずり出すと、愛おしげに頬擦りする。艶やかな甲から手首に伝い、さらにその先の腕に至るまでの間でちょうどぼつさりと切断された格好で、その義手らしき物体は静かに祖母の愛を受けている。しかし、彼女がその手の角度を変え、こちらに断面が見える向きにした瞬間、いよいよ私は恐怖に竦んだ。義手であるならばただの肌色の平面が見えるべき切断面に、黒く赤く青く混沌とした重い色がおどろおどろしく蠢いていた。そしてその奥には、こちらを見つめる無数の赤い目が……。

「夢の中が通り道なの。×××の手が幻想へいざなってくれるのよ」

異界へ誘う異人の手！ 私はメリーの細い手首を柔く撫でさすりながら、心底満たされた溜息をつく。彼女の皮膚は白く非常に艶やかで、なるほど作り物と見紛うこともなくはなさそうな具合である。しかしその印象が何になるう？ 彼女は生きた人間なのだ。赤黒い血を薄い皮膚の下に通わせ、その薄皮を張り貫き剥ぎ取り断てば悪夢の如き苦しみに喘ぎ叫ぶ、鮮烈な痛

覚を持つ生き物なのである。私は上半身を少し起こすと、焦らされ続け既に見て分かるほどに発情しているメリーの唇に吸い付いた。乾いた彼女の口内に緩やかな舌遣いで侵入し、温い唾液の湿度を満たせば、しみじみとした安らぎと愛おしさが胸いっぱい染み渡る。

あまりに人間らしくないメリーの生の実感を、そうした危うい妄想と重ねて得ることが、畢竟私の性癖なのであった。《了》

ガ  
ル  
ゾ  
  
瞳

一匹の蟬の音が聞こえた。音はかつてを偲ばせるように壁に消えていった。

彼女は友が横たわる寝台の傍の椅子に座り本を読み聞かせていた。窓から差し込む光が至る所を照らしていたが暗がりとは雲と空のように、混じり合うことはなかった。紙をめくる音が囁き声のように思われた。

「蛍光灯なんて随分とレトロなのね」

「そういうものよ。ずっとここにいると古い匂いにも慣れてくるけど」

本を閉じる音が小さく響いた。

「つまらない人ね」

「あなたこそ」

その言葉は揺らぐ小さな炎のようであり、寝台のくすんだ白色と横たわる友の髪の毛の褪せた茶色はどこか似ているように思われた。友は彼女の本から瞳へと視線を移し、その視線を引きずるように窓の外を見た。

「昔はもつとうるさかったって聞くわ」友がそうこぼした。

「音だけじゃないはずよ」

「懂れているの」

「まさか。でも人が過去を振り返るときは感傷的になりやすいもの。私ももしかしたらね」

「私たちが出会った頃のこととは覚えてるかしら」

「唐突なのね」

本を机に置いてこちらを見る友の瞳を見たが、出会ったときから変わっていないように思えた。友は大切な人の前に立ったときのように、再び窓の外に眼差しを向けるのだった。

「私、行きたいところがあるの」

彼女は黙っていた。どこに行きたいのかと聞いても友はいつも答えない。そのようなときは彼女の瞳を見るしかなかった。視線を移せば肉体が目に入る。目を逸らし、聖堂の教職者と信徒たちのように瞳と瞳を合わせるのだった。

「体の方は大丈夫なのかしら」

友は答えなかった。酷く残酷な質問であることは分かっていた。彼女は友を試したといつてもいい。そしてその試みは反復されてきた。友は彼女の瞳を見てから静かに目を瞑った。

彼女は友との不思議な冒険とその顛末を思い出していた。こういった場所に来るのは初めてではない。生きていくことには絶えず希望と絶望が混じり合うものだ。しかし前者が後者の部分集合となつていくという事実は彼女の表情に少なからず暗い陰を落とすのだった。悪いことがあつた日の日記を読み返すときのように。

風は緑を孕んでいるようにも思われた。山の方から僅かな音を伴いやつて来ては窓硝子を撫

でる。夜が辺りを覆うときのよう染め上げようとしているようであった。彼女は目を瞑り、友はその右の脛にそっと指を置いた。指が触れると友は産声をあげるときのように肉体を震わせる。そして暫くの後には彼女が指を離させると友はねだるような眼差しを彼女に向けるのであった。

「ひどい人。あなたって」

「ものを見るのにも体力がいるのよ」

「私のこと、分かっているんでしょ。だったら構わないでしょ」

「駄目よ。体を大切にして」

「それなら私は消えてしまいたいわ」

「そんなこと言わないで。寂しいとは思わないの」

友はそれきり黙ってしまった。焼けつく自責の念を見つめる。それは甚だしく不合理なものであった。しかし彼女は友の救いのため患難を受け入れた。そんなとき彼女は磔刑に処された聖者の話を思い出すのであった。聖者には苦痛があった。肉体を釘で打ち抜かれることによる身体的な苦痛はもとより、彼が人の子であったならば神の子として死ぬことを余儀なくされた苦悶が、神の子であったのならば人の子として死ぬことを余儀なくされた煩悶があったのではなか。しかしいずれにしても、身体の、精神の、合理的な苦痛の他には非合理的な苦痛があっ



た。彼は一人、他の大勢の救いのため自らを差し出したのだから。彼の目には何が映ったのであろうか。友の脛に再び指を置こうとする自分に眼差しを向けると、この問いへの答えは見えなくなってしまう。ちょうど物語を紡ぐ手が止まるときのように。

涼しい風に吹かれた海浜の砂がばらばらと音を立てた。彼女は友のいる場所の近くを回り、風景を瞳に焼き付ける。上手い具合に景色を刻むことができると、彼女は揚々と友の病室に戻るのであった。

「澄んだ空からの日差しで紺の海の色は濃くなり、山茶花の一群は広い緑の中で花卉を広げ、白い海鳥は砂の上に足跡を黒く残していたわ」

友の脛に指を置く。友は震える。そして幾分もしないうちに指を離してしまうと、友はその残酷な行為に対して変わらない非難の眼差しを向けるのだった。

「あなたってずるいわ。私はこんな瞳しか残されていないもの」

「本当は全て使わせてあげたいのよ」

「だったら私を連れ出してよ」

「何を言っているの」

「ね、ね、いいでしょ。少しぐらいは」

「あなたは安静にしていなければ」

友は拗ねたように口をつぐみ、それからまたゆっくりと赤みを失った唇を開いた。

「こうして寝台の上からあなたを見つめると、以前は気付かなかったものが見えてくるわね」

「それは私だって同じよ」

「あなたって私が思っていたよりずっとひどい人なんだって分かったわ」

「そう思われても結構」

「あなたはとても残忍で悪辣な人。自覚した方がいいわ」

「そのひどい人に頼り切りなのはどこのだれなのかしら」

「いいわよ。私、消えてしまうんだから」

「もう聞き飽きたわ。その言葉は」

「本当に消えてしまうわ。そうしたらあなただってきっと悲しんでくれる」

「私はいつも悲しいわ」

「そんなことを言って。もつと悲しませてあげるんだから」

友は眼差しを所々黒っぽい染みが目立つ天井に移した。天井をじっと見つめる姿は薄暗い林の中にある一本の樹木を思わせた。

「ねえ、人がこの世界から消えるときってどんな感じなのかしら」

「さあ。でも、もしあの世があるんだらどう思うの」

「あの世のためにこの世を生きている人もいるけど、私はそうじゃないから分からないわ」

「現実的よね。昔から……」

「違うわ。私は単に事実を観測していたにすぎない」

友の目は上を向いているようには思えなかった。

「現実には絶えず人を変化させる。でもそれは普通見えない。だからその変化が打ち止めになつたとき、私たちは目を開かされ、そして真つ黒な掟の前に立たされるのよ」

友は窓の外に目を向けた。窓からは赤松の木が茶色い松かさをぶら下げているのが見えた。

「人が消えるときってどんな感じなのかしら」

彼女は黙っていた。

雪の混じった風の音が激しくなるにつれ友の容態は悪化していった。かろうじて光を宿していた瞳は精彩を失い、腕は緑の苔に蝕まれた木の枝を思わせ、体は白色の蠟細工のようであった。時折枕が赤く染め上げられる。友は目を瞑って過ごすことが多くなり、食事もろくにとらなくなった。生涯を修道院で過ごす修道女のように、友は不自由という黒く煤けたラベルの貼られた世界で生きることを選んだのだった。しかし彼女は友に語りかけることをしなかった。

そんな折、友がよく語っていたことをふと思い返す。客観的に見て明確な真実が存在する。いかにも前時代的な考えである。その話を聞かされるとき、彼女はいつも、かつて全ての人間に訪れ、そして自分にもいつか訪れる現実のことを考えざるを得なかった。

『夢と現実とは違う。だから夢を現実に変えようと努力できる』

友の言葉を反芻する。しかし友の言うことが真実であるのならば、希望にすぎりつくことができるのではないか。彼女は最近昔の夢をよく見るようになった。共有された時間は移ろいでゆく、それでいて決して消えることのない水面の日の光のようだ。しかしそれは夜の訪れと共に役割を終えてしまう。そんなとき、友は一体どこへ行くのだろうか。彼女はかつて見た夢の世界のことを思い返したが、悪い考えを抱くに至り思考を拒絶することしかできなかつた。

「ねえ」

友は目を閉じたまま静かに口を開いた。数週間ぶりであった。

「私、昔は夢と現実とは違うって思ってた」

「そうじゃないの。あなたはずっとそう言ってきた」

「いいえ、きつと夢と現実とは等価なのよ」

「どういう風の吹き回しかしら」

「あなたの言う通りよ。味気ない話。でもようやく理解できたの」

「そうだとしても何が変わるといふの」

「人は死んだ後、どこに行くのかという話をしたわね。死はどこまでも個人的で主観的なもの。分かるわよね。だから死は夢と同義なのよ」

「不吉なことを言うのはよしてよ」

「しかしそれは希望でもあるの。そうであるのなら死を恐れる必要はない。きっと鼓動が止まっても、目を覚ましたら私は薄茶色く染みたベッドの上にいるわ」

「そんなことを言うなんて、あなたらしくもない」

「聞いてくれるかしら。客観的な真実が存在するのならば、死はただの生理現象に成り下がる。私はそれが正しいと思っていた。でもただの強がり過ぎなかつたの」

「死を恐れるのは普通よ」

「死後の世界なんて存在しない。それは客観的なものだから。あなたの見た夢の世界は主観的なもの。どこにもない。手の届きそうに決して届かないところにあるのよ」

「夢は現実に変えられるわ。そうじゃないと私はあなたと一緒にいることができない」

「そう思うんだったら、私のことをたまに思い出してよ」

彼女は目頭を拭いながら顔を逸らした。友は目を瞑っていたにも関わらず。

メジロの鳴く声が入った。雪はだんだんと茶と緑に混じり、梅の花も次第に色づき始めていようであった。あの日から二人は一切喋ることがなかった。友はまれに目を開いて老人のように光を確かめてまた目を閉じる。自分にできることは何もないのだと彼女は認めた。子を見つめる母のように傍らに座していることしか。しかし彼女はただ一つのことには気付いた。ゆっくりと目を瞑る。見えるものは何もなかった。友は先史時代の洞窟のようなこの世界で生きていくのだ。安寧がもたらされるこの世界を心地よく思い、目を潰したいという欲求さえ湧き起こる。その折、彼女は視線の先に光があるのを見た。しかし一人その先に行ってしまったらもう戻って来ることができないことは分かった。目を開く。未だ光が焼き付いていた。そして、もう二度と触れることのないであろう友の脛に指を置き、離すのだった。

少し経って友もまた目を開き、彼女の瞳を見つめた。

「また見るようになったのね」

「でも以前とは違うわ」

「もう何を見てもああいうふうに考えないと思っていた」

「あの言葉は本当は強がりだったのかしら」

「ええ。私は考えざるをえなかったの。夢を映したあなたの瞳が私の瞳に現実を映すのであれば二つは混じり合うことはないのではないか、って」

「本当にそう考えていいの」

「ええ。正しかったのはあなたよ」

「……いいえ。教えてくれたのは蓮子じゃない」

「恐ろしかったの」

「私がいるわ」

「ねえ、もし手が届いたら」

「ええ、分かってる」

やわらかな日差しが明るく照り返していた。彼女と友は手と手を握り合わせた。そして日が落ちて黒く塗りつぶされた部屋の中で二人は目を閉じるのであった。《了》





完熟オレンジ

富士の少女

昨年、十一月、御坂峠にある天下茶屋の二階より下った私は、甲府の町へと、やって来ていた。茶屋にて取り掛かっていた小説を完成させぬうちは、東京の地は踏むまいと、勝手に自分と約束を交わしていたのだが、山の寒さに耐えかねて、降りてきてしまった。約束を破ることは、無論よろしくない。約束を交わした相手が、自分であつてもだ。むしろ、自分相手だからこそ、居心地が悪い。後ろめたさが、裾を引くようであつた。

甲府の町は、温かつた。拗らせていた咳もなくなり、日当たりのよい部屋で、机に向かい、続きを進めた。

しかし、十一月が過ぎ、十二月、新年を迎えて一月にもなると、甲府の町といえど、寒気は否応なしに増していつて、ペンを持つとうと、ペン先が震えて書けやしない。

それでも、三時までは粘る。三時までペンを動かせば、喜久之湯へと向かい、原稿との睨み合いで生まれた疲れを湯に流せば、家には燗酒が待っている。近頃は、それをチビチビやりながら寝るのが、日課となっている。

その日も、そのつもりで家を出ていた。芯から冷えた体に、熱い湯は安価な極楽を見せてくれるが、浸かり過ぎると、却って湯冷めし易いので、烏の行水もかくやの勢いで、湯船を出る。湯は、もう少し浸かっていけばかりに波を立てるのだが、私は、断腸の思いで、その誘いを断り続けなければならない。手拭い片手に、喜久之湯を出ると、北風が、狙い澄ましたように、

横を吹き抜けていった。長く浸からなかったことを、後悔した。

はあ、と白い息を吐き出し、それが晴れると、遠くに、富士山が見えた。手前の、釈迦ヶ岳や節刀ヶ岳に裾を隠して、やあ、と白い頭を、覗かせている。冬の日の入りは早く、この時間にはもう、陽が沈みかけていて、斜陽に照らされた富士が、ほんのりと赤く染まっていた。

おいおいと、私は嘆いた。天下の富士山が、ちよつと顔を出して、それも赤ら顔でいるんじゃない、と憤った。女々しい富士の姿に、見ているこちらが、面映ゆい気分だった。

けれども、私と富士、どちらが女々しいかと聞けば、百人が百人、私の方が女々しいと、答えるだろうし、私自身も、そうだと答え、もし富士に口があれば、こいつの方が女々しいと、評すだろう。正しい。だからこそ、一切女々しい姿など見せず、富士には、威風堂々としてもらいたいのである。

遠く、真白い富士の頭を眺めていると、一人の少女が、思い出された。まだ私と、井伏鱒二氏が、天下茶屋に逗留していた頃、三ツ峠を登った先で、出会った少女である。彼女の髪は、冬の富士の冠雪が如く、白く、美しかった。

御坂峠が海拔千三百米に対して、三ツ峠は海拔千七百米、頭二つ分ほど高かった。

井伏氏の仕事が一段落ついた頃、三ツ峠を登ってみよう、ということになって、峠の入り口まで下り、氏と一緒にえつちらおつちらと、山道を歩いた。頂上に登るまで、そう時間はかか

らなかつたが、細く険しい坂道を歩いたものだから、額には玉の汗が浮かんでいた。

頂上に着いた私たちを迎えたのは、でんと聳え立つ富士ではなく、それを覆い隠すほどの濃霧であつた。富士はとつくに見慣れたものであつたが、登つた以上は、その場その場から見える山々の姿を楽しみたいもので、これには私も井伏氏も、水を差された面持ちであつた。

井伏氏がゆつくりと煙草を吸い、私は断崖の縁に立つては、見えない底の深さを想像した。そうして、汗が引いた頃合いに、三軒ある中から一軒の茶屋を選び、入つた。老夫婦が営む、小さく地味な茶屋であつた。立地と天候も相成つてか、客は私と井伏氏以外には見えず、酔狂な登山客である私たちを、夫婦は温かく迎えてくれた。

番茶を、と短く注文を済ませ、畳の上にへたり込んだ。疲れた身体には、多少、くたびれたくらいの畳の方が、ちょうどよく思えた。

しばらくすると、カチャカチャと、少々騒がしい音を立てながら、番茶が運ばれてきた。運んできたのは、まだ年若い娘で、私と井伏氏は彼女の姿を見て、思わず動転した。顔は、年頃の少女といったようであどけなく、それでいて、吹き出物の痕もない整つたもの、使い古された様子の割烹着も、少女が着ていると、若々しさを取り戻したように思えた。何より目を引いたのが、踝の近くまで伸ばされた長髪である。まるで、髪だけが年をとってしまったように、白に染まっていた。

あまりに不躰な目を向けていたからであろう、少女が固い顔で「なにか？」と聞いてきて、私は「いや、なにも。」と決まり悪く口をもごつかせると、少女は、奇異の目を向けられるのにも慣れていたのか、特に気分を悪くした様子もなく、番茶を置いて離れていってしまい、私と井伏氏は、どうにも落ち着かない気分させられて、とりあえず、茶を一口含み、淹れ立ての熱さに舌を火傷した。

「見事だね。」井伏氏が、少女の髪のことを言っていることはわかった。「まるで昔の貴族のようじゃないか。」

井伏氏は、感嘆の吐息を漏らした。昔の貴族は、自らの髪の長さを、美しさの基準としていたとされる。なるほど、と思つた。髪の色こそ違えど、長さだけならば、時代という壁を越えて、貴族の娘が現代に抜け出てきたとも取れる。

けれども、私はどうにも井伏氏のように、少女の容姿を、肯定して見る事ができなかった。確かに長く、それでいて真白な髪ではあるけれど、そこに美しさ以外の、哀切を感じたのである。それは同時に、奇妙な親近感を懐かせもした。

茶を啜る傍らで、井伏氏が老婆に「お孫さんですか。」と尋ねられた。氏も、少女に対して何かしら思うところがあつたのかもしれない。老婆は、孫ではない、と言つた。少女は、家無し子だそうだ。

ある日、茶屋の前にふらりと現れ、断崖の縁に立っては、一日中、富士を見ていたらしい。夕方になっても、迎えの姿はなく、帰る様子もない。足を踏み外せば、転落死も起こりうる少女の姿に、老夫婦は声を掛けずにいられなかったのだという。何をしているのか、と問えば、富士を見ている。迎えは、家族は、と聞けば、首を横に振ったのだと。

近頃は国内も慌ただしく、きな臭い空気が、あちこちで蔓延している。少女も、その煽りを受けたのだろうと、夫婦は考えたのだそうだ。山を下るよう言うのは容易いが、少女の言が本当であれば、帰すのはあまりに無責任。ならばと、茶屋に居候することを、提案したらしい。少女は、断ろうとしたようだが、上手く言い包めたそう。少女は藤原妹紅といって、愛想はないが、気の利くいい子だと、老婆は聞いてもいないことまで話してくれた。そうそうあることでもないのです、誰かに話したかったのではないかと、私は邪推している。

いくら家無し子とはいえ、出会って間もない少女を預かるのもどうかと思われたが、本人が申し出を受け入れたのであれば、私たち、外野がなにを言おうと無駄なことであり、何よりも濃霧のために富士が見られない私たちを氣遣って、富士の写真まで持ち出しては、「普段はここに富士が見えますよ。」と、懸命に説明する老夫婦を見る少女の目が、二人の人柄の良さを雄弁に物語っていた。

私と井伏氏は、いい富士を見れた、と満足して下山した。その日、それ以上、少女と話すこ

とはなかった。

翌々日、井伏氏は、御坂峠から引き上げられ、私は氏の紹介で、とある娘さんと見合いをすることになっていたので、甲府までお供した。見合いは、つつがなく終わった。間を取り持つてくださった井伏氏、客間の長押にかけられていた、富士の鳥瞰写真に、後押しされるような形であった。帰京される氏に、米搗きバツタにでもなったように、頭を下げては見送りをし、私は、御坂峠の天下茶屋に引き返そうとした。少女との二度目の出会いは、この時であった。

私が、御坂峠行きのバスの乗り場へ足を運んでいると、向かいから、見たことのある顔が歩いてきていた。背負い籠などを持って、どこか不安げな様子をしているのは、つい一昨日に三ツ峠の茶屋で働いていた少女であった。それを証明する白い髪は、やはり珍しいらしく、彼女とすれ違う人の多くが、振り返り振り返りしていた。揃って似たことをするものだから、私は可笑しくて、つい笑ってしまった。それが原因だったのかは、わからない。ふと、少女と視線が、バツタリと、合ってしまった。少女の表情に、私が何者かと気付いた様子はなく、視線を逸らすのも失礼だと思ったことと、私が一方的に相手を知っているのも落ち着かないということもあったので、話しかけることにした。

「やあ。」と、私は片手を上げて、少女に声を掛けた。そうして、言葉を口にして、すぐに失敗を悟った。二言、三言ばかりの言葉を交わしただけの相手に、よりにもよって「やあ。」など

と、これではまるで軟派ではないか、と自分を恥じた。少女も、私のような輩など知らぬ、といった風に、首を傾げていた。

「覚えていないかな？　一昨日、峠の茶屋を訪れた者だけれど。」

動揺が伝わらないよう、努めて紳士的な言葉や、声音を選んだつもりである。本物の紳士からすれば、失笑ものであろうが、この時の私は、必死であった。その熱意が通じたか、少女は、得心がいった表情を浮かべた。

「ああ、あの、妙な恰好をしたお客さんか。」

雑踏の中にも関わらず、少女の凜とした声は、よく通る。とはいえ、妙な恰好というのはどういうことかと思つたが、あの日の自分の服装を思い返せば、仕方のないことであつた。キチンと登山服を着用されていた井伏氏とは違い、登山服を持ち合わせていなかった私は、ドテラ姿に逗留先で借りた地下足袋に麦藁帽子という、見苦しい出で立ちをしていたのである。氏にも気の毒がられた、一尺以上も毛脛を露出させた大の男を、少女が可笑しく思わない方が、不思議な話であつた。

「あの余所行きしかなかつたのだよ。」

「今日は立派に着込んでいるようだけれど。」少女がからかうように言ってくる。

「羽織を着て登山をする馬鹿はいないよ。これは僕の勝負服だ。」



私が腕を広げてみせると、似合っているよ、と少女が褒めてくれた。無論、世辞ではあろうが、その言い方がまるで、母が子に言うようで、何ともこそばゆかった。

「藤原さんは、買い物かね。」

私が問うと、彼女は、怪訝そうな表情を浮かべた。遅れて、老婆を経由して、勝手に名前を知ってしまったのだと思い出した。碌に知りもしない男が、自分の名前を知っているのは、気の悪いことだ。誤解を招いても困るので、経緯を説明すると、藤原さんは、なるほど、と頷いた。お喋りなんだから、とこぼす彼女に、私もまた頷いた。あの老婆の口が軽いと思つたのは、どうやら私だけではなかったらしい。

「あの二人に遠出させるのも忍びないし、散歩ついでにね。」

そう言う彼女をよく見ると、軽く息が上がっていて、額には、汗が浮かんでいた。

「まさか、ここまで歩いてきたのかね。」思わず、頓狂な声を上げてしまう。三ツ峠から甲府まで、少なくとも、七里ほどは離れているはずである。それを歩いてきたとなれば、恐ろしいほどの健脚である。

「それこそまさか。人が多くなつてから歩き始めたんだよ。」

それを聞いて、私は安堵した。藤原さんのような少女が歩いているのに、大の男が歩いていないというのは、少々、バツが悪いからだ。声を掛けこそしたが、別段、彼女に用があつた訳

でもない。所用があつて来たのなら、邪魔をしても悪いと思ひ、ここで切り上げ、私はこの場を去ろうとした。それに待つたを掛けたのは、藤原さんであつた。

「何か？」 出鼻を挫かれ、少しムツとした調子の私の声。

「いや、私はここに來てまだ日が浅いの。お兄さん、よかつたら案内してもらえないかしら。」  
思ひもよらぬ頼みであつた。まさか、初対面も同然の男に案内を頼むとは、この娘さんは、思つた以上に面の皮が厚いのもしれぬ、と心中でこぼした。實際は、無駄な脂肪も見当たらない、スツキリとした顔立ちである。それが笑みの形を作つて、真つ直ぐ見てくるのだ。私には、眩し過ぎる笑顔であつた。

この日の用は見合ひだけで、それを終えた私は、帰路に就くのみであつた。畢竟、藤原さんの頼みに付き合うことに、何の問題もなかつた。むしろ、私などでいいのか、と聞くのだが、お兄さん以上の赤の他人に頼めないでしょう、と返されてしまい、何も言い返すことができなかった。

頼みに付き合うと言つても、私がすることといえば、藤原さんの買いたい物から、その手の店を紹介する案内役の真似事である。彼女はといえば、案内した先で目当ての物を見つけては、すぐに会計を済ませ、次々と自前の背負い籠に放り込んでいった。こちらを見る店員の目が白ような氣もしたが、どうしようもなかつたのだと、この場で弁護させてもらいたい。

藤原さんほどの年頃であれば、色々なものに目移りしそうなものであるが、一切そういった様子を見せない。ふと足を止め、飾り物のひとつにでも目を留めていけば、懐から財布を取り出すことも吝かではなかったのだが、一度たりとも足を止めなかった。であれば、中々の量が詰め込まれた背負い籠から、幾らか持とうか、と言うのだが、それもやんわりと断られてしまったので、終ぞ、私が男を上げる機会は訪れなかった。周りから見た私は、さぞや、軟弱者に映ったことだろう。それを思うだけで、胃の腑が、重く感じられた。

しかし、どこか達観した雰囲気のある彼女も、街並みへ向ける目には、好奇心が浮かんでいたように思う。現に、あれは何か、これは何だ、と質問攻めにあつた。しかも、東京の街並みはこの比でないよ、と言うと、東京とは何処だ、と聞かれたので、仰天した。帝都のことだと教えれば、都は京ではないのか、と返されて、さらに啞然とした。小さな子どもでも、知っている常識である。よもや本当に、平安の世からでもやって来たのではないかと、思ったものだ。藤原さんの買い物が終わると同時、私の、案内人としての仕事も終わった。一時間ほどではあつたが、身体の芯まで、疲れが溜まってしまっていた。それでも隣を歩く、見た目は年下の少女が、一片もそういった素振りを見せないのだから、大の男である私が、弱音を吐く訳にもいかなかった。

とはいえ、甲府の町から御坂の茶屋まで、徒歩で戻るなんてことは、さすがの私も勘弁願いた

かった。

「藤原さん、バスの乗り場はここですよ。しばらく待ちましょう。」

先へと歩を進める少女に声をかけると、彼女は「おっと。」と慌てて戻ってきて、私の横に並んで、バスを待った。そう待たされることもなく、バスはやって来て、二人で車内へと乗り込んだ。藤原さんは、二人掛けの椅子の手前側に座るので、困惑した。並んで座るものだとばかり考えていて、たかが数時間ともにしただけの男が横に居座るのも窮屈だろうと思ひ直し、隣の二人掛けの椅子、その手前側に、自分の身体を収めた。そんな私たちを咎める人もいないほど、この日のバスの車内は空いていた。

何の変哲もない、私には乗り慣れた、河口行きバスである。他の乗客も、特にお喋りをするでもなく、外の景色を茫然と眺めているか、俯いて舟を漕いでいるかのどちらかであった。隣に座る少女は、そのどちらでもなく、運転手や、他の乗客たちを、珍しそうに眺めたり、弾む車体に合わせて、楽しそうに身体を揺らしていた。

「バスにはあまり乗られないのですか？」その姿が微笑ましくて、思わず、声をかけていた。「——うん。こんな乗り物に乗ったのは初めて。」私の方へ少しだけ顔を向けて、また外の景色に戻っていった。

私たちは、河口村まで乗っていった。降りるときに、藤原さんが運賃の支払いを戸惑う場面

もあつたが、私が彼女の分も出すことで、事なきを得た。彼女の「ありがとう。」という言葉に、ようやく、男としての面目が立った思いであつた。

河口村まで来ると、富士もさらに近く、その偉容を見せつけてくる。晴れた日の河口湖の湖面には、逆さ富士が映り、その姿は彼の葛飾北斎さえも魅了し、富嶽三十六景が一つ、「甲州三坂水面」は、その様を夏と冬とに分けて描かれている。俗人の思い浮かべるような、如何にもといった富士を、私は軽蔑さえしていた。

御坂峠行きのバスに乗り換える為に、乗り場まで歩いていた私は、後ろを付いてくる藤原さんの視線が、富士に向いていることに気づいた。

「富士に、何か思い入れが？」一日中富士を見ていたという、老婆の言葉を思い出したのだ。

「思い入れと言っているのか。」藤原さんは困った様子だった。「でも、思うところがないと言えは嘘になるね。」

「そうか。僕は、ここから見える富士は嫌いだ。」つい、口から言葉が出た。しかし、本心である。

「正直なのね。」藤原さんは笑っていた。「けれど、正直者は長生きしないよ。言葉には気をつけた方がいい。」

思いがけず真剣な目を向けられたものだから、知らず、歩みを止めてしまっていた。彼女は、

そんな間抜けに頓着することなく、追い越し、歩いていった。間抜けな私は、慌ててその後を追った。

その後は、特筆すべきこともなかった。天下茶屋に向かう途中、三ツ峠の登山口で降りた藤原さんは、付き合わせた詫びと感謝を私に告げ、峠の老婆たちが待つ茶屋へと歩いて行った。私も、見慣れた茶屋へと帰っては、見合いはどうだったか、と聞いてくる女将さんをおかわして、部屋の上の寝そべった。くたくたであった。ほんやりと、天井の木目を眺めつつ、今日の見合い相手の娘さん、それと入れ替わるように表れた藤原さんの姿を思い浮かべているうちに、いつの間にか、私の意識は、夢路を辿ってしまっていた。

ここで終わっていけば、私と藤原さんの関係は、顔見知り程度で済んでいたことだろう。私は思うのだ。富士が、私と彼女を、引き合わせたのだと。三度目は、甲府での出会いから、またしばらく経ってからであった。

その日の私は、数人と、吉田の町へとくり出していた。新田という青年と、その連れたちと、馬鹿話などして、酒を飲み交わしたのだ。皆が家路につき、私は、その宿屋に泊まることになった。そして、寝つけないことを理由に、ドテラ姿のまま、外を歩くことにした。恐ろしく、月の明るい夜であった。

富士山は月光を浴びて、青く透き通るように、燃えていた。まるで、鬼火や狐火を纏ってい

るかのように、私は、その姿を何度も振り返り、見た。魅せられたのだ。思考が、頭から綺麗に抜け落ちてしまったように、意識は俯瞰し、足は雲を踏むようであった。それでいて、下駄はカラコロン、カラコロンと、音を響かせるものだから、気分はまるで天狗である。人目が無いのをいいことに、懐手などして、傾いてみせた。大層、気分が良かった。

阿呆である。だから、財布など落とす。気づいても、しばらくは平気であったが、やはり引き返した。来た道を辿れば、拾い直せるのだと、当たり前前にことに気づけたのだ。復路の富士は、変わらず、青く燃えていた。

知らず、自分でも驚くほどの距離を歩いてたようだ。歩けど歩けど、財布は、なかなか見つからない。目を皿のようにして地を見ていると、無い銭を探し求める、乞食にでもなったような気がして、慌てて背筋を伸ばした。一度は来た道、それも一本道だというのに、私は、どこかで道を違え、見知らぬ場所へ迷い込んでしまったような、心細さに襲われた。影が、不安定に揺れていた。月明かりは、人の弱さを浮き彫りにしてくれる。

足元の下駄が、カラコロカラコロと、若干、せわしない音を立て始めていた。不安が、足を速めさせた。私の中の天狗は、その高い鼻を折られて、すっかりと参ったようで、雲を踏むかのように軽かった足には、正体不明の恐れが纏わりつき、ひいひいと、喉から浅い息を吐き出す私を、嘲笑うように、それは重みを増して、手こずらせるのである。

夜道を、一人で歩くから、こうなるのだと、遠くにある、富士山が言っているように思えた。何のことはない、見知らぬ土地の夜道に、気が動転していただけのことである。だが、この時の私は、正常ではなかった。だから、「まさに、貴方様の仰る通りである。軽挙妄動極まりない、この阿呆めを、どうか、許して欲しい。」と、本気で願った。すると、私の視界を、炎が焼いた。すわ、今度は鬼火か狐火の類かと身構えると、聞き覚えのある声が掛けられた。

「おや、誰かと思えば、いつかのお兄さん。」声の主は、藤原さんであった。「こんな夜更けに一人で歩いては、危ないよ。暗がりには、なにが潜んでいるか、わからないんだ。」

「それは私の台詞だ。君こそ、こんな所で何をしている。」

「散歩よ。今夜はこんなにも月が——富士が綺麗な夜だもの。お兄さんも誘われた口でしょう?」

おまけによくないものまで連れてきて、と藤原さんは、仕方がないとでも言いたげに、ぼやいた。彼女の言う、よくないものとは、何だったのか。先ほどの、燐を纏ったような火の玉のことかと問うも、さあどうだろう、と嘯くばかりである。ただ不思議なことに、あれほど湧いていた焦燥感は、綺麗さっぱりと、消えてしまっていた。

「女性の一人歩きは、感心しないね。不逞な輩がいなくても限らないのに。」

と、ごく当たり前のことを口にしたつもりだったのだが、どうも藤原さんには、予想外の言



葉だったらしい。狐につままれたような表情を浮かべたかと思えば、そんな言葉をかけられたのは久しぶりだと、破顔した。あまりに綺麗に笑うものだから、口を噤んでしまった。彼女は、自分が襲われるなどと、欠片も思っていなかったのだろう。驕りではなく、自信から来るもので、それが、藤原さんという少女を曖昧にしていた。

即ち、藤原さんという少女を、見た目相応に扱っていいものかどうか、ということだ。

「私なら平気。これでも腕つぶしには自信があるの。」

その細腕を見る限り、とてもそうには見えなかったが、私は「そうかね。」とだけ返した。

「しかし、今夜は富士が一段と綺麗だね。」

「詩的ね。もしかして、私って口説かれてる？」わかっていて、彼女はそんなことを聞いてくる。

「単なる世間話だよ。生憎と、既に心に決めた女性がいる。」

「なんだ、ひと足遅かったか。惜しいことをした。」

ちっとも惜しんでいるようには、聞こえなかった。それが何故か、私の心に、小さなしこりとなって残った。

「それにしても、お兄さんはつきりあの山が嫌いなのかと思っていただけ、勘違いだったかな？」

「富士が嫌いなのではない。誂えたように映る、富士の眺めが好かないだけだ。」

「成程、難儀な人だ。」藤原さんはまた笑った。

「そういう君は、どうなんだ。思うところが、無い訳じゃないだろうか？」

よく覚えてるわね、と彼女は呆れたように呟いた。あまり聞かれたくない話題だったかと思つたが、私が話題を撤回するよりも早く、「信じるも信じないも勝手だけど。」と前置きをしてから、言つた。

「私は昔、あの山で人を殺した。それも、自分の欲を満たす為に。そんな場所、好き嫌い以前の問題でしょう？」

絶句した。目の前の少女が、過去に、人を殺めたことがあると、告白したのだ。私は無意識に、足を後ろに引いていた。彼女には、それがどう映つたのだろう。しまったと、己の失態に気づいた時には、もう遅かった。これ以上の話はやめだとはかりに、藤原さんは、別の話題を振ってきた。

「そうだ。この財布、お兄さんののでしょうか。道の真ん中に落ちてたよ。」

気持ちのいい笑みを浮かべて、彼女は財布を放る。ずしりと、しつかりとした重みが、受け止めた両手に伝わってきた。その人となりを見た私は、彼女が人を殺した人間には、どうしても見えなかった。

「これは、ありがとう。礼といつてはなんだが、もう遅い。ご主人たちも心配しているだろうし、送っていいこう。」

「いらぬ。送り狼が怖いもの。」

「その心配はいらぬいよ。それと、さっきの話だが——」その先を口にしようとして、待ったをかけられた。

「その話は、やめよう。私も、口を滑らせた。二人とも、富士に化かされたんだ。」

そう言つて、藤原さんは富士の方を振り仰いだ。波打つ白髪が、月の青い光を返し、まるで火の粉が踊るようであつた。霊峰を前に佇む姿は浮世のもの、それでいて生に満ちたその背。妖という言葉が、頭を過ぎつた。

彼女は、身体を半分だけ向けてきた。その瞳には、凡夫程度では推し量れないほどの憂いが浮かんでいて、私が、どのような言葉をかけていいものか懊悩しているうちに、おやすみなさい、とぼつり呟くと同時に、藤原さんは、月明かりと同じ、青い炎に包まれて消えてしまつてた。その場には、呆然とする私ひとりが残された。

その晩は宿へと戻り、翌朝、ふらつく足で、御坂へと戻つた。朝帰りを冷やかす女将と、その娘をかわした私の頭を占めていたのは、やはり、昨夜の出来事であつた。少女は言つていた。富士に化かされたのだと。なるほど、と遅れて納得した。この日のことを思い返すと、今も億

劫な気分になるのだ。

この日から数日が経ち、富士の山頂を、雪が覆った。天然の化粧が施された御坂の富士は、美しかった。

二度あることは三度あり、三度もあれば、四度目の出会いは、もはや必然と言ってもいい。そして、それが私と藤原さんの、最後の会話でもあった。

暦は十一月を迎え、来たる冬に向けて、一層寒さを厳しくしていた。部屋に炬燵を備え、上にドテラを重ね着ることで、細やかに抵抗してみせたが、御坂の寒さは並みではなく、私の心は挫けかけていた。遅々として進まない原稿を前にして、それでも集中しろというのは難しい話である。これ以上の逗留は無意味と感して、下山を考え始めた、そんな折のことであった。その日も、息抜きに茶でも飲むかと、腰を上げた。廊下に出ると、雪でさらに白く染まった富士が居座っていた。まるで貫頭衣を纏ったようだと、ほんやり思ったことを覚えている。

しばし足を止めてそれに見入り、茶を飲み、階下へ向かおうとしていたのを、忘れていた。それもこれも、頭の巡りが悪いからだと思いつけ、とびきり熱い茶を、女将に頼んで淹れてもらおうと、階下へ足を向けようとした。彼女の姿を見つけたのは、本当に偶然であった。御坂の長い登り道を、えっちらおっちらと、登ってくる少女がいた。その髪の色、冬の富士山の冠雪が如し。

「おおい、藤原さん！」私は、廊下の窓を開けて、叫んでいた。無意識の行動に、自分でも驚いた。

少女——藤原さんは、自分を呼ぶ声に戸惑った様子であったが、手を振る私を見止めると、あちらからも振り返してくれた。階段を、跳ねるように下る。自分でも、浮足立っているのが分かった。お出かけですか、という女将の声も無視して、茶屋の外を指した。茶を頼もうと思っていたことなど、すっかりと抜け落ちていた。突っ掛け草履で飛び出した私を、彼女はおかしいものを見るように、くすくすと笑っていた。初めといい、前回といい、彼女の前ではどうにも、恥ずかしい姿を見せなくてはならないらしい。

「やあ。変わらず、元氣そうだね。」失態など感じさせない調子を装う。

「そっちは風邪でも引いたの？ ヤケに着膨れているけれど。」

重ね着をしたことが、裏目に出た。冬眠を控えた熊かといった体であったので、笑われるのも、致し方ない。対する藤原さんは、例の茶屋夫婦のお古でも着せられていたのか、野暮ったい装いをしていた。おまけに、薄着なのである。峠を歩いてきたからか、その額には汗も浮かんでいたが、見ているこちらが寒かったので、羽織っていたドテラ一枚を貸し与えた。彼女も素直に受け取ってくれたので、凶らずも、再び面目躍如が叶った。

ここに住んでいるのかと聞かれたので頷くと、ここからだど富士もよく見えるだろうと、意

地の悪い顔で言われた。確かに、御坂から見る富士は、如何にもお誂え向きといった感じで、私の好むものではない。しかし、たとえ甲府の町に下ろうが、富士はよく見えるのだと、私は事前に学んでいた。だから、平気な顔をして「お陰様で、毎日、顔を突き合わせる仲ですよ。」と答えると、彼女はつまらないといったように、膨れていた。

茶屋の椅子に並んで腰かけ、しばらく黙っていると、「聞かないの？」という藤原さんの声聞かない方がいいのかと思ってと、正直に言えば、私が話したいんだと、不機嫌そうに返されてしまった。どういった心境の変化があったのか、女性の心とは、かくも難解なもので、私には、到底理解できそうもない。

「あの晩、私が言ったことは本当。」彼女の視線は、真っ直ぐ富士山へ向いていた。「私は昔、あの山で人を殺した。見も知らない子どもだった私を、親切にも助けてくれた男を、蹴り落とした。」

彼女は語る。時の帝が、愛した女性から譲り受けたという、不死薬のこと。駿河で最も高い山、即ち、富士の山頂で、それを焼く任を帯びた者たちがいたこと。とある理由で、無謀にも、その者たちに付いていった少女がいたこと。行き倒れた少女を助けた男は、岩笠という名前であったこと。山頂での出来事、その後の悲劇は、少女の初めの言葉と繋がった。最後に、私は人殺しだと、そう締めくくった。

荒唐無稽、眉唾もいところである。私のよく知る物語の顛末を、脚色しただけかもしれない。そうであれば、よくできた作り話だと、手放しに褒めただろう。しかし、語る藤原さんの横顔は固く、その話が真実なのだと、否が応にも伝わってきた。だからこそ、私は信じたくなかった。彼女の話を信じられないのではない。彼女が、藤原さんが、人を殺したなどという事を、信じたくないと、私の心が拒んだのである。そもそもの話、

「何故その話を僕に？」当然の疑問であった。

「だから、話したかったからだって。」

「そうではなく。そんな話を、僕のような男にしてよかったのかと、聞いているんだ。」

私と藤原さんの関係は、他人である。知人以上友人未満といったところだ。その程度の相手に、それこそ、墓にまで持って行ってもおかしくないような話をするのには、相応の理由があると考えた。そうでなければ、納得がいかなかった。もつと言えば、私は、彼女に選ばれたかったのだ。私という人間に、特別な何かを感じ、それを理由に話してくれたのであれば、至上の喜びと受け取ったであろう。私は、この少女に懸想していたのだ。

「どうして。さて、どうしてだろう。強いて言えば、貴方に自分を重ねたからかもしれない。

貴方は、どうにも生に対する執着みたいなものが希薄だから。ねえ、お兄さんは、何度死に損ねた？」

藤原さんの言ったそれは、私が、彼女に懐いていた思いでもあった。彼女の肌は瑞々しく、声には張りがある。若さと、生命力に溢れている。それと相反するように、彼女からは、死の気配が濃かった。死に馴染んでいるというのか、その淵に、何度か手をかけたことのある私には、それが感じられた。四度、と返すと、納得がいったように、頷いていた。その時になってようやく、藤原さんの瞳が、深い紅の色をしていることに気づいた。

「不死人と死に損ないが出会うなんて、こんな偶然もあるんだね。」

呟く藤原さんが、感慨深げに頷く。「事實は小説より奇なり」という言葉がある。私たちの数奇な出会いは、その偶然が、途方もない数積み上がった末に、生まれたものだろう。到底、ここに書き記せるものではない。

「こんな話までしたんだ。君は、私に何を求めている？ できる限りのことはしよう。」  
「その申し出はありがたい。けれど問題は、私自身、何をしたらいいのか分からないことなの。」

聞けば、彼女は元々、こことは違う所に住んでいたのだという。ある日、気づけば三ツ峠の山頂にいて、帰る手段は無く、特に帰る理由も無いので、途方に暮れていたところを、例の老夫婦たちに拾われたらしい。すぐ目の前には、因縁深き富士の山。過去を思い、眺め続けても、それを払拭しようと登る気は、そうそう湧いてはこないのだと、これはきつと、自分を怨んだ



岩笠の呪いなのだ、藤原さんは言った。

「殺した時の、あの人の顔は、今でも忘れない。信じられないものを見るような目をしていた。あの人が、私を怨まないはずがない。これは、私がしでかした過ちへの、正当な報復なのよ。」

「君は、まだ罪を背負うと言うのかい。」

自罰的な彼女の言葉に、疑問を呈さずにはいられなかった。藤原さんの犯した罪、それは確かに、どうしようもなく大きな罪であった。人が、一生をかけても、清算できるかはわからない。しかし、彼女は、他人の何十倍もの長き時間を生き、その罪を背負ってきたのだ。既に、人が背負うには、十二分であった。何より、

「千年とは、人を変えるに余りある時間だ。岩笠という者の人柄は知らないが、それだけの時間があれば、抱えていた思いに、変化のひとつも生じるだろう。そうでなくとも、君の罪はもはや時効だろう。」

不死だという彼女は、これから先も生き続けるのだろう。きっとそれこそが、藤原妹紅という少女にとっての罪であり、罰なのだ。私は、その細い肩に、これ以上の重荷を、負わせたくはなかった。

「貴方は、私が許されると、思っているの？」

「許されるかどうかは、君が許されたいと思っているかどうかだ。」

許されたいと思わない者を、許すような者がいないように、許されたいと思っている者を、許さない者もいない。極々、当たり前前の話である。そうかと、ポツリ、藤原さんの声。

「私は、これまで特に目的も持たずに生きてきた。自分でもこのまま、惰性で生き続けいくのだと思っていた。呪いだなんて、私は大馬鹿者よ。あの人は、岩笠は、私に知る機会を与えてくれたんだもの。」

そして貴方もと、藤原さんは、私の目を見て、言った。

「貴方と、こうして話すことが無ければ、ただ生きているだけの亡者になっていたかもしれない。」

「不死とは生きながら人を殺すのか、恐ろしいものだ。しかし、僕などの言葉で救いになれたのなら、幸いだ。」

「ええ。お陰で、まだ生きてもいいかなと思えたわ。ありがとう、お兄さん。」

礼を言う藤原さんが、私には眩しいものに見え、つい目を逸らしてしまった。千年以上もの時間を生き、それでなお、生に対して前向きに考えられる彼女は余りに尊く、私のような死に損ないには、直視し難かった。遠くもなく、かといって近くもない富士を見て、心を落ち着けた私が首を戻した時には、少女の姿は無かった。

そうして後日、御坂から甲府へと下った私は、井伏氏の自宅で、今の妻と結婚した。

妻、美知子との暮らしは良いものである。あれは毎日、甲斐甲斐しく、私を世話してくれている。出来た妻であり、私も、そんな彼女を心底から愛している。この気持ちに偽りは無い。

しかし、藤原妹紅という少女を忘れられないこともある。また事実だ。目の前から姿を消した、あの日から今日まで、彼女のことを考えなかった日はない。初めて恋を知った時のように、私の心は、未だのぼせ上がったままである。その癖、それ以上のこともできないでいる。妻がいるから、仕事があるからと、自分に対して言い訳ばかりを並べては、机の前で燻っている。彼の「安珍清姫伝説」の清姫が如く、相手を思う気持ちのみで、日高川を渡り切るような熱を、私は持ちえない。何もかもが半端なままだ。生き様も、少女への思いも、妻への愛しているという言葉すら、薄っぺらく感じ、母堂へ孝行すると誓ったあの日が、遙か過去に思えた。私は、あの少女のように目的を見つけ、生き続けることができるのだろうか、死に損ないにも、できることはあるだろうか、自問する時間ばかりが増えた。答えが出ないまま、今の妻を愛そうとだけ、心に決めた。

半端者の私は、これから何度も挫けるだろう。その度に、あの日のことを思い出そう。「やい、なにをへたってやがる。恥ずかしくはないのか。」と、過去の自分が喝を飛ばしてくれろことだろう。そうして、藤原妹紅という人への思いが消えた時には、私も、自らの生きる目的を見つけているはずだと信じて、こうして、書をしたためようと、思いついた。今この時も、

答えは、出ない。

甲府の冬はまだ明けない。陽が沈み、富士の銀の頂きも、次第に闇に包まれていった。《了》

こうず

無形むぎようの神武しんぶ

犬走棍を甚だしく後悔させたのは、酔った勢いの口論である。

昨晚のことをつらつら思い返すに、己の浅はかさに腸が煮えくり返る思いがする。白狼天狗の酒宴の場で、同輩とふとしたことから諍いになったのがすべての始まりだ。その種というのは単純なことで、楡祐にれすけという男が棍の剣術を未熟と嘲ったのであった。

自身が剣術の達人であることに恃たのみ、少し傲岸などころのあるこの青年は、棍の振るう剣を「所詮は女子供のままごとよ」と罵倒した。心の中ではどうであれ、酒さえ入っていないければそこまでの物言いはしなかったであろうものを、彼はさらに加えて「弾幕ごときにかまけているから、その程度なのだ」とまで評した。

悲しいかな、氣短きみじかで直情径行なのが白狼天狗という種族である。楡助の売り言葉に棍の方も買ひ言葉、周りでやんやと囁し立てる仲間たちにも引きずられ、自らも酒の勢いで、

「言つたな！ ならばこの犬走と一対一サでの剣術勝負をせよ！ 鼻高天狗より驕つたその慢心、皆の前でへし折ってくれる！」

などと宣言してしまつたのである。

こうなつてしまうと物事の展開は早い。

やれ「会場は妖怪の山の練兵場」だの、やれ「形式は木剣を用いた防具なしの打ち合い」だの、やれ「どうせなら見物人を募つて参加料を取ろう」だのという話が当人たちの意思を離れ

てどんどん決まっていき、終いには「勝負の日取りは五年後の今日」ということになってしまった。五年後というのはいかにも気の長い話であるように思われるが、天狗というのは千年の長命を保つ生き物だ。その点を推し量れば、むしろ、僅か五年かと短く感じるくらいであろう。集まりが散じてからねぐらに帰った柁は、寢床に身を横たえた瞬間こそ「自分の腕前を衆目に示す好機だ」と考えて戦意を昂ぶらせ、興奮しきっていたが、翌朝になるとそんな酔いからはすっかり醒めてしまっていた。

冷たい水で顔を洗い、哨戒の任が一日非番なのを良いことに目的もなくぶらつくつと、改めて、昨晚の愚かしさが自身の骨身に染みてきた。酒気満つる場とはいえ、何ということ約してしまつたか。

相手は、その剣名も高き楡助である。

白狼たちはおろか、他の種族の天狗たちを見回しても彼ほどに腕が立つ者はそう居まい。楡助は、年齢も体格も自身に勝る鴉天狗や山伏天狗たちを、剣の勝負でことごとく打ち破つてきた達人だ。種族と階級の上下を絶対視する天狗社会において、普通であれば許されぬ下剋上というものは、武芸を競う場でだけは例外的に目こぼしを受ける。白狼天狗が、鴉天狗や山伏天狗、鼻高天狗を完膚なきまでに叩きのめすことが、むしろ尚武の模範であるとして肯定さえされるのだ。そのような武の規範の体現者とも言うべき楡助に、一介の哨戒天狗である犬走柁が

真つ正面から戦つて勝てる道理は、どう考えてもないではないか。

種族に特有の白髪を片手で搔き回しながら、人気のない山の奥へと向かう栴である。朝飯を食べに適当な店を探す気にはなれないし、講談を聴きに行つたり芝居を觀に行く意欲もない。自分の馬鹿さ加減を呪うには、周りに人気のない方が好ましいのだ。

昨晩は深更から天が臍を曲げたらしい。山肌のどこに眼を向けても雨の跡が濡れ光つていた。森の木々は冷たい雫を絶えず葉先から落としてくる。それをかわしてさ迷い歩くと、後には天狗の高下駄に耕された地面に、等間隔の畝うらのような下駄の齒の痕跡が、幾つも幾つも残されているのだつた。

やがて栴は、野花の自生する開けた土地に出た。樹木の群れに囲まれながら、そこだけが原っぱのようになり、ちょうど良い具合に雨や日の光が降り注ぐかたちになっている。まるで栴の底から花々が大空を眺めているような情景だ。

野の花が散らされるような勝負なら、例え楡助に負けたとしても、未だ美しくはあれ無様ではない。後から「勝負を約したは過ちだった、どうかなかったことにしてくれ」と頭を下げて物笑いの種になるよりましだ。ならば、やはり万にひとつも勝ち目のない勝負に挑まなければならなくなる。しかし本当に負けるとなると、たとえその戦ぶりが無様でなくとも、楡助の罵倒が真実だったと認めることになる。前門からは負け戦、後門からは臆病者との嘲笑が、虎狼



となつて迫りくる。

後悔はどうしようもない苛立ちに変わる。腰にした刀を引き抜き、めったやたらと振り回し始める椈。今の彼女は何ものをも斬ろうとはしていない。ただ、こうして暴れでもしなければ落ち着くこともできないという、白狼天狗の悲しさだ。

乱れた呼吸いを整えて鞘に刃を納めんとしたとき——しかし、椈はあることに気づいた。自分しか居らぬと思つていたこの山中の原に、もうひとりの誰かが居る。

見れば、老人であつた。

捨ててあつたのを拾つたのかと思ふようなぼろぼろの直垂ひたれ\*。もう幾十年か伸ばしつばなしにされているらしく、束ねたり結つたりはおろか櫛を通してさえいないであろう白い蓬髪ほうはつ\*。一見して武士らしく見えはするが、刀の代わりに木の棒を握つて、その先端を中空に遊ばせている呆けた爺だ。

地表に這い出た樹木の根が、ひとつの大きな岩を起点にして絡まり合つた箇所があり、その大岩に爺は寄りかかつて腰を下ろしていた。辺りを飛び回る蝶や羽虫に気を取られているのか、やはり木の棒を遊ばせながら、真白く長い髭に隠れた口をもぐもぐと動かしている。あまりに呑気、また牧歌的、見様によつては痴呆的とも言えそうな男である。

この爺に、椈の苛立ちはことさら高まる。

それは、自分が厄介ごとを抱え込んで苦しんでいるというのに、目の前の爺が呑氣そうにしているのが許せないという、手前勝手な理屈ではあったけれど——ともかくも梶は自身の短絡さに任せ、爺を斬って憂さ晴らしをせんと目論んだのである。 magari なりにも先程までは愛でる心地で見つめていた花々を踏み潰し、刀を振り上げ爺に迫る。

だが、いっさいは徒勞であつた。

爺は、フ、と息を吐いて立ち上がると、眼前に迫つた危機になどまるで頓着せぬかのように、蝶を追い、木の根につまづき、花に見入つた。終いには欠伸あくびまでするその余裕は、すべてがのらりくらりとした回避となつて、一度たりとて梶の剣をかすらせもしなかつた。

やがて、梶の方が剣を構え直すもならぬほどに疲れ果てると、爺はようやく眼前に誰か居ることに気づいたらしい。彼は手にした棒を改めて構え——次の瞬間には、相手に向けて振り下ろした。ただそれだけで、勝負ならぬ勝負は決した。木の棒は、しよせん木の棒である。生き物を斬り殺す力はない。ましてや爺のそれは、先端さえ梶に届くことはない。そのくらいには二者の間は隔たつていた。だというのに、梶は負けた。なぜかといえば、爺が木の棒を振り下ろした瞬間、このちっほけで下らぬ得物がたちまち幾数十尺もの長大な利剣と化し、こちらの脳天を兜割りにしたかのような幻影にとらわれたからであつた。

大事な愛刀さえ取り落とすほどの衝撃を、梶はその心に受け取つた。さらにまた恐るべきは、

爺の手で激しく動く木の棒に一匹の蝶々が留まり、悠然とその翅を休めていたことだったのだ。

打ちもせぬのに相手を打つ幻影。

蝶々という臆病な虫が、動くものから離れようとしないう事実。

この二点を以て犬走棍は確信した。この爺——否、老剣士は、世に類なき達人であると。そしてまた、差し迫った苦役に勝つべく光明が見えたのも感じた。彼の技を体得すれば、楡助にも勝てるのでは……と。

改めて剣を納めると、棍は老剣士に非礼を詫びた。

加えて自身の素性を明かし、五年後に差し迫った剣術勝負のため、あなたを師としてその教えを乞いたいと頼み込んだのである。

老剣士は、この若い白狼の頼みに是とも非とも答えなかった。

ただ「妖忌」とのみ言葉を発し、森の奥へ入っていく。彼の名であろう。名を明かされるを以て弟子入りの許しと見た棍の欣喜は、それこそ文章に起こすさえもつたないほどの喜びようであった。

妖怪の山の防人たる白狼天狗は、山外から入り込んだ者、とりわけ人間を討つが職掌しよくしやうである。

けれども、さしたる脅威にならぬと思われれば、適当に捨て置かれることもある。妖忌老人がまさにその類であつて、この人物が山の奥深くに誰にも見咎められることなく庵を結んだは、いかにも風采の上がらぬ浮浪乞食ルンペンとしか思われぬ見た目をしていたからであろう。

そんな妖忌の棲む庵——ほとんど獣の巢のようなあばら小屋を傍らに、彼が最初に弟子に課したのは、至極単純な修行である。

ひたすらに、剣を引き上げて、落とす。ただそれだけだ。

つまりは、構えた剣を頭上に振りかぶり、真っ直ぐに面を打つ動作を延々と繰り返すのみ。

正直を申せば、枕は拍子抜けした。こんなことは子供の白狼でもやっている。人目につかぬ場所に隠遁する仙人のような劍客だからこそ、誰も知らぬ秘伝秘術の類を伝授してくれるものと思つていたのに、と。

しかし、自分から乞うて弟子にしてもらつたのだ。簡単に投げ出したとあつては白狼天狗の名折れである。だから、とにかく言われた通りのことを愚直にやり続けた。朝も昼も夜もなく哨戒の任というのは、大きな戦とか異変がない限りはどうにも暇が有り余っている。退屈しのぎにかこつけて、師の言いつけを守り、木剣を振り通したのである。

剣を引き上げ、落とすだけの単純な動きをひたすら繰り返すという行為は、剣を握って間もない幼い日々を除けば、絶えてなかつたと言つて良い。実戦本位が尊ばれる天狗の劍術は、言

つてしまえば「敵を殺せればそれで良い」という兵法の真理の体現である。常に状況が転変する戦場において、あるひとつの動作だけを突き詰めて行うということはあり得ないからだ。

そのあり得ないことを繰り返すうち、椀の肉体には、中心を貫く一本の強固な軸が完成しつつあった。ふらついていた幾重もの骨肉の連なりを、強固に押し留める役目を果たす軸だ。剣を振り抜くたび、それが強く意識されてくる。試しに、椀は頭の上に水で満たした杯を置いて剣を振ってみたが、一日の内に千を超える行に励んでもなお、水は一滴とてこぼれなかった。

ほどなくして、己の手が剣と化し、離れた場所を自在に突く——そんな感覚が少しずつ大きくなってくる。これは、得物を手足のように扱えるようになったという比喩ではない。椀はその意識の全面において、肉体と道具とが有為に融け合って境を失くしていくのを経験した。剣を振れば振るほど腹中に胆たんが練られて熱を生じ、自身を押し包む殻を焼き尽くす。ついには己が何の一念も持ち得ない、ひと振りの巨大な剣と化したかと思われた。犬走椀は天狗の形をした剣であり、剣は天狗の形をした武器である。先に作り上げた身体の中の軸なるものは、あるいは刀剣の茎なかこにも等しき、心身の土台であったのか。

そうなると、後は容易だ。一間いっけんの先を突いた想像の利剣は、次には二間先を、その次には三間先を……高ずるうちには十里、百里と伸びていく。椀という剣がついに夜空の月にまでその尖端を突き刺したのは、ある夏の日のことだ。彼女の心は地上と月との間を往還していた。そ

して、絶え間なく振り抜かれていた木剣には、その尖端が動くさなかにも一匹の螢が炯々たる光を宿していたのである。

以て彼女が知ったのは、己と得物とが同一の存在であると気づき、剣に殺気を宿らせぬ法である。何気なく手足を伸ばすにことさら強い意気を込める者は居ないし、それと気づいて全力で応ずる相手も居ない。つまりはそれと同じである。殺気なき剣はこちらから向こうに届きはしても、向こうがこちらの意を読めるものではないのである。故に虫さえも剣とは気づかず憩うのだ。「すなわち、〈無念〉の剣なり」と妖忌は言う。修行を始めてから、実に三年が経っていた。

### 「見事」

妖忌は初めて弟子を褒めた。寡黙な彼にしては珍しく、髭の下の顔もくしゃりと笑んだ。

だが、まだ修行は終わらない。次に課されたのは、動く剣に留まった虫を、今度は斬つてみせよというものである。

三年の修行の成果を実感し、名前以外には何も知らぬこの師をすっかり信用するようになっていた柩は、今度の課題にも諾として取り組んだ。もはや殺気なき剣を操る方法は身に着けているのだから、その要領を転ずれば易い。

そうは思えど、実際に挑むと簡単なことではない。剣を振り続けるという単純な動作であれば、いつしか無念に至って殺気は消える。だが、いざそこから眼前の目標に狙いを定めて斬らんと欲すれば、たちまちのうち殺気が生ずる。殺気が生ずれば、意思が興って相手に伝わる。斬ろうとするだけこちらの考えが向こうに悟られ、柎に狙われた蝶は、螢は、羽蟻は、逃げて逃げて逃げまくる。

最初の半年ほどは、完全なる徒勞に終わった。柎の握る剣は、一度として虫の脚の先さえ打ち落とすことができなかった。至芸の域を志して道半ばなる者には決して珍しくもない行き詰まりであつたかもしれないが、柎には悠長に求道を行っている暇はない。彼女は楡助との勝負に勝たねばならないのだ。焦れば焦るだけ、無念に至つたはずの心に沸々と醜い色が湧き、剣をさえも鈍らせる。なまじ、千里の先を見通す眼を持つ犬走柎である。敵が見えはするのに斬れはせぬというもどかしさは、人一倍の苦しみであつたに違いない。

遅々として進まぬ修行の有り様に業を煮やしたか、あるとき、妖忌が自ら重々しい口を開いた。老人はいつものように木の枝を遊ばせながら

「心に思慮あつて勝負の場に立てば、敵がことさら遠くに見える。勝負というものにとらわれて、剣は向こうへ届かぬようになる<sup>\*</sup>」

そのように説いたのである。つまりは、

「目には色を視ると雖も瞽の如くにせよ。耳には声を聞くと雖も聾の如くにせよ」  
そして最後に

「我あるが故に敵あり。我なければ敵なし」  
と、つけ加えた。

椀の徒勞は、その後一年も続いた。

楡助との勝負の日まで残り半年という頃合いになって——棄て去ったはずの苛立ちが、蘇ってきてしまった。妖忌より授かった無念の劍について鍛練を欠かした日こそないが、寡黙な師への懷疑は日一日と強まっていく。ひよつとすると、自分は担がれているのではないか。妖忌老人は、天狗を出し抜いて喜ぶ意地悪い妖怪か何かなのではないか。

確かめようのない疑いではあるが、それを取り払うのもまた難事といえる。

椀は劍を納め、ねぐらに帰った。疲れに沈んだ身体を横たえると、生ぬるいまどろみが彼女を包み込む。師への疑いも晴れぬまま、眠りに落ち込んでいく椀。

その晩、彼女は夢を見た。

一匹の蝶になった自分が、野の花を求めてさまよう夢だ。

だが、花と思つて蝶がその脚を触れたのは、ひとりの妖怪の身体であった。妖怪の顔に触れ



た蝶は、そのまま相手の唇に挟まれて身動きが取れなくなってしまう。夢はそこで終わる。

はッ、と、息を吐いた椛が気づいたは、その蝶が——夢の中で自分が化身していた蝶が、この覚醒の瞬間、まさに自分の唇に捕らえられていたことである。捕らわれた蝶と、捕らえた白狼。どちらも確かに犬走椛だ。夢の中では自身の肉体という枷は無くなり、椛は天狗でもあり蝶でもある何かと成った。否、初めからこの二者は一体だったのである。なれば、己でも他でもあるものに剣が届かぬ道理はない。目には色を視ると雖も瞽の如く、耳には声を聞くと雖も聾の如く。眼が良いからと、そればかり当てにするから惑わされる。耳目の感覚に頼らず、剣と化した己を研ぎ澄ます。そうやって自他を分かť想を拭い去れば、相手の心さえ読み取れる。妖忌は嘘を言っていなかった。彼の発したいずれにも、今こそ是と言うことができるではないか。

翌朝早くから師の庵に向いた椛は、妖忌の目前で自身の感じたままに剣を振るい——そして、ついに蝶を打ち落とした。無念の剣がその切っ先を蝶にまで伸ばすと、次に心は椛であることを止め、一匹の虫となって夢の中に遊ぶ。そのとき彼女が見せた挙動は、まさに妖忌が木の枝で虫を追うときとまったく同じ、無垢なる閃きなのだ。

「すなわち、〈無想<sup>むそう</sup>〉の剣なり」

無念にして無想の剣。このふたつこそが永年の練武の果てにたどり着いた、妖忌必殺の秘剣

という。その名を明かされたことで、ついに柊の修業は完成を見た。

合戦、異変や酒宴の日を除けば、妖怪の山が騒がしくなる機会はほとんどない。けれども、今日という日はこの大山たいざえが久方ぶりに鳴動せんとしている。発するは、鼠一匹を見るよりは華やかな、ふたりの白狼天狗による剣術勝負である。

大山鳴動の理由を語るには易い。五年前、酒席の諍いから始まった剣術の腕比べの約束は、時を経るうちにどんどん話が大きくなっていき、ついには守矢神社から八坂神を招いての天覧試合と相成ったのである。元が軍事いくさの神なのだから、天狗同士の剣術勝負に八坂神をお招きするも不思議ではあるまいと、誰かが言い出したせいらしい。

野外に在る白狼たちの練兵場には、今日の試合のために臨時に掘すり鉢ばち型の試合場が設けられていた。鉢の底に当たる場所が実際に剣を闘わせる広場と決まり、棧敷席が段を連ねてぐるりとその周りを取り囲んでいる。席のほとんどは見物客で埋まっていた。太平に飽いていながら、しかして女子供の遊びである弾幕戦に熱を上げるわけにもいかない山の天狗たちにとって、今日の催しは格好の娯楽であつたのだ。会場の設営を担当した河童たちも稼ぎどきを見逃さず、菓子や飲み物を販売する。さらにまた、ずる賢くも試合の結果を巡って賭博を行う者まで現れ、老若男女となく誰でも一口は賭けに乗る始末であつた。

際限なく昂ぶる山の人々の熱気を鎮めるかのように、風祝の東風谷早苗が、会場の最上段に陣取った八坂神に祝詞を捧げる。それが終わると東から楡助が、西から柊の入場であった。

互いに得物の木剣を構えると、審判役を仰せつかった大天狗が勝敗を決めるあれこれの条件を並べ立てる。ほどなく、五年の時を経て全山が待望した勝負は始まった。

だが筆者はこの勝負のあらましを、読者諸兄の愉しみに供すべく詳らかにするだけの地力を持ち合わせない。戦いの展開を語るには、いま与えられているこの紙幅はあまりにも多すぎるし、また、無念無想の剣を会得した柊の恍惚を述べるには、逆に紙幅が少なすぎると言えるからだ。

幾つかはつきりと書けるのは、犬走柊は、この戦いの大本命と皆が考えていた劍豪・楡助にあっさり勝ってしまったということ。殺気に満ち満ちた楡助の攻めを柊は難なくかわし——否、気づいてすらいらないように足を運び、ついには引き上げられた剣が、相手の頭頂を打ち据えた。以上ですべてである。

大衆は、ふたりの劍客が腕の限りに鏢競り合う烈しい戦いを期待していたことだろう。それをこそ見たいがために、全山挙げての大仰な催しとして今日の試合が在る。だが、そうならなかった以上、筆を滑らせ事実を枉げるわけにもいかない。

八坂神より勝者の柊へと賞金が下賜されたが、そんな儀式になど、もはや天狗たちはすつか

り興味を喪っていた。大山鳴動して出てきたは鼠一匹ではなかったが、その後の人々の落胆ぶりは、鼠一匹ばかりを見たのとさして変わらぬほどであったに違いない。

かくて幕切れを迎えた五年越しの対決は、いつしか天狗たちの口の端に上ることさえなくなっていた。

楡祐に勝利した柗は、同輩たちからの賞賛やからかいを受けながらも、概ね以前と同じだけの日々を送っていた。哨戒天狗として山を駆け、暇さえあれば剣を振り、無念無想の恍惚に浸る。妖忌老人より秘剣を伝授され、楡助にも勝った。ふたつの事実が、強烈な自負となって彼女の心を形づくっていた。

その自負は、いつしか傲慢に至った。

きっかけは、

「今の私と妖忌先生、いったいどちらが強いのだ」

そんな、小さな疑問であった。

師は老体ながらも傑出した剣客であり、秘剣を以て柗を鍛え上げた大恩ある人物。だが今の柗には、日かな陽光の下で木の棒を振り回し、蝶や花と戯れ、雨や風を愛でるだけの生活を送るこの隠遁の老人は、果たして自分がかつて感嘆した、あの妖忌と同じ者であろうかと思われ

てならない。加えて最近では、劍の代わりの木の棒すら持たず、瞑想とも居眠りともつかぬような無言の沈思に耽るところばかりが、やけに目につく。

修行を全うせざる折、椛が妖忌へ疑念を抱いたことはすでに書いた。なれど、今度の気持ちは疑念というより軽侮に近い。師弟のどちらが強いかというのは、畢竟、自分の方が強いという自信がなければ出てきようもない考えである。元より天狗は驕る生き物。傲慢の芽は、尚武、練武のために精神の贅肉を削ぎ落としてなお、棄てようもなく存している。

だからこそ、弟子は師の顔を見る度に直に劍を交わしたいと願い、試合の形式にて今現在の腕前を見て頂きたいと懇願し続けた。けれども妖忌はいくら頼まれようが「それには及ばず」と断るばかりなのである。これを椛は師の怯懦きょうだと見た。もしや、自身の敗北を怖れているから弟子の頼みに取り合わないのではないかと。それならばなおのこと、椛は自身が強者たるを証すべきとの思いを強くしていくのであった。

とはいえ、師弟の道義を重んずる倫理は彼女にもある。妖忌を打ち倒す心の準備を済ますまでは、幾数十日の熟考を要した。その後、ようやく弟子は師の庵に馳せて行った。

来意を告げる間も惜しく、椛は得物を握り、構える。使い慣れた木劍の頼もしさが心地よい。一方で、師はいつも以上に上の空であり、木の棒はすでにどこにもなかった。代わりの武器は石ころでさえも握られず、ただ両の空手が弟子の劍を出迎えるのみだ。先生、いよいよ見た目

通りに呆けられましたか、と、笑いを頬の真裏にて囁む椛である。では、あなたを師と呼ぶのも今日が限りか。湧き立つ心をどうにか抑え、師を打ちこまんと大いに駆けた。

しかし、そのとき――。

己の手より得物を取り落とし、大地に膝を屈していることに白狼は気づく。否、そうではない。敗北した自分の姿を、自分自身が向こうから見下ろしている。そんな幻を感じた。

椛は妖忌であり、妖忌は椛である。無念無想の境地に至らば、そうした心地で戦うことができるはずであった。相手の意識を自らの内に写し取り、その挙動を一分のずれもなく思い描けるからこそ。だが、できなかつた。師の操る無念の剣は、弟子のそれよりはるかに素早く相手の心をひと突きにする。無想の剣はまた、完全に椛の意識を掴み、とらえて、模倣し、強烈な敗北の瞬間を幻視させ、その通りの事実を形づくつた。

そのすべてを、妖忌は剣もなく、木の棒もなく――手にいっさい何もものも握らず、構えもせず、しかし、それ故に長大にも鋭利にもなり得る空想の剣を以て、椛の心を打ち砕いたのだ。否、真実、椛を敗北に至らしめたのは椛自身ではなかつたか。今の妖忌は、澄み渡つた鏡のように清冽だ。そこに映つた椛自身の影が、妖忌の形を借りて打ち込んできた。椛は、己に負けたのである。

「練武極むれば殺気を棄てる。殺気を棄てれば技を棄てる。技を棄てれば斬るを棄てる。斬る

を棄てれば敵を棄てる。敵を棄てれば劍を棄てる。劍を棄てれば、すなわち〔無形〕の劍に至る

無念、無想、そして無形。妖忌が練り上げた、第三の秘劍。

老劍士は多くを口にしなかった。代わりに姿だけが饒舌であった。武器をも棄てた無形の神武——思考によって理解が可能な術理術法を超越した、純然の〔技術そのもの〕が人のかたちを取っている。杖ごときにどうにかできる相手ではないのだ。

敵わぬ相手に勝てると思つて戦いを挑むは、まさしく匹婦ひつぷその所業といふべきであろう。弟子は、いま惨めである。妖忌の顔を見ることができず、地に伏して許しを乞うている。老劍士は弟子の醜態に頓着することなく、またいつものように思索に復していた。

妖忌は杖の叛逆について怒りも悲しみもしなかつたし、何を言うこともなかつた。ただ、彼はそれまで通り自らの庵に起居し、隠遁の暮らしを続けたのである。加えて無形の劍を得た今、劍の役目を果たすであろう道具は木の棒にさえも思い至らぬ。一日中でも座り込んで瞑想を続ける様子は、呼吸いそぎをしているのかすら疑わしい。人が木石ぼくせきのようになったのか、木石が人のようになったのか、それさえ野の鳥獣には区別のつけようもないことで、鳥が妖忌の身体に木の枝を重ねて巢を掛けたり、猪が自分の縄張りであると示すべく身体をこすりつけていくのも、

決して珍しいことではなくなっていた。

柁は、師に改めて仕えることを始めた。

妖忌にちよっかいをかける野良妖怪を追い払ったり、食物を差し入れるなど身の回りの世話をする。直に剣を打ち合わすところそなかったが、ときどき師弟は剣理について問答を交わし合う。

柁は問う。

「いかにすれば、無形の剣に至ったということが解りましょうか」

妖忌は答える。

「己が無形と気づくうちは、未だ有形うぎよう」

その言葉の意味が柁には解りかねた。剣持たぬ境地こそ剣士の究極と思っていたからだ。ただ、師が、自らの無形の剣をも有形として否定することで、想像を絶する高みに入らんとしていることだけは容易に察しがつくのだった。

やがて妖忌の口は、そうした剣理の問答に対してさえ沈黙で縫い閉じられていく。柁に語りかけられても、己がかつて説いた術理が何であったのか、その手に何を握っていたのか、それに、教えられなければ剣や刀という名さえも思い出せない。

「お前の言う無形とは何か。剣というのを手に持って、それは行うものなのか？」



これが如く、劍持たぬ無形の境地に劍は要るのかと、大真面目に問うのである。

劍を極め果て、却<sup>かえ</sup>つて劍を忘却した劍士を、凡俗の言葉では愚者と呼ぶだろう。以前の柁もまた、おそらくそうであつたろう。今の柁はそうではなかった。妖忌の眼には豊饒な智の焰が燃え続けていると知っている。彼は賢者だからこそ、他人の目からして愚者に見えてしまう。宝がもたらす虚飾を怖れて貧しきを選ぶは知者である。されど、多くの宝を持ちながらそれを使わぬは、ときに愚昧に見えこそすれ知者より優れた者である。数え切れぬほどの宝を持ちながらも、賢者は決して宝に触れず、見ることもなく、しかも宝を見ようとしないう己すらも存在せぬかのように、あらゆる自己から自由であるからだ。

師は、無形を超えた無形の境地に至つた。

劍ということからさえも解き放たれば、もはや妖忌の語ることはない。柁はこの無形を超えた無形を、妖忌自身に代わつてやむなく「無己」の劍と名づけた。無己とは、すなわち克己<sup>こくき</sup>の究極である。無形の形を成す己そのもの——無形を尊ぶという執着をも断ち斬り、完全な無となった妖忌は、もはや一個の現象であるに過ぎぬ。現象は言語を持たない。ただそこに發生し、静かにたたずむだけなのだ。

師弟が出会つて十年目の初冬、妖忌は忽然と姿を消した。

椛が、彼に新しい藁布団を贈らんとして、妖忌のもとに出向いた日のことだ。

隠遁の師にとつて財産と呼べそうなものは、ただ庵の奥に設えた藁の寢床がせいぜいである。そんな寒々しい暮らしの老体を氣遣つて藁布団を用意したのだが、普段なら早くに目覚めて瞑想に耽つている妖忌の姿が、どこを探しても見当たらぬ。周辺を探し回り、白い溜め息を吐いて空を見上げる。そのとき、椛は手にしていた藁布団を思わず取り落としてしまった。

遅い暁を迎えてから数刻という冬の空が、鮮やかな紫雲しうんに覆われ、光り輝いていたのであるから。弟子は師の行く末を思い、慟哭と歎息の入り混じった涙を流す。

「ああ、夫子かうしついに成道じやうどうせり。されど情けなし、あれほどの師に教えを乞いながら、我は未だ剣を棄て得ざるなり」

覚者かくしゃの恍惚とは覚者にしか解き明かせぬが故に寡黙であり、寡黙なるが故に、その境地に至らぬ者には想像するしか余地がない。妖忌の悦びはいかばかりであったことか。否、悦びをいたずらに悦びと感ずる心さえ、無己の彼は克服したのであるうか。美しき紫雲の空に頭を垂れる椛は、自らが今もつて一剣を腰にしていることに、ただ恥じ入るばかりであった。《了》

久我暁

賢者歎異―パチユリー・ノーレッジの手記―

魔理沙が地霊殿の主とお茶会をしている間、私達も暫く休息を取ることになった。咲夜の用意してくれたサンドイッチを摘みながらお茶を啜る。にとりがいることも鑑みてキューカンバーサンドイッチなのね。相変わらず、抜け目がなくて瀟洒なこと。もう一口紅茶を啜ってから、アリス達の方に目をやると、アリスはにとりが持つてきていた機械人形を弄くり回していた。「これは本当に自動で動くものなの？」とアリスが不審そうに尋ねる。「とてもそんな風には見えないのだけれど……」

それは私も同意だった。良く言って出来損ないのオブジェ、有り体に言えばごてごてした金属の固まりにしか見えなかった。

「そんなに疑うなら動かしてやろうか？」とにとりは不敵に口角を吊り上げると、じゃあやってみるか、とばかりに機械人形の背中を弄り回す。すると、先ほどまでどっしりと座っていたそれは、見た目に反して機械に跳ね回り始めた。そうして、暫くの間は無軌道に動いていたかと思うと、急に立ち止まった。眼もないくせに、まるで睨め回すようにしてから、アリスの横にフワフワと浮いていた上海人形に飛びかかった。

「え!」驚きの声を上げるアリスをよそに、機械人形は上海人形を追いかけ回している。

「ちょっと、止めなさいよ、にとり!」とアリスが怒鳴る。「へいへい」と頭を掻きながらにとりは機械人形の背中を触る。するとプシュッと情けない音を立てて、それは崩れ落ちるよう

にして止まった。私はクスリと微笑むと、隠すように紅茶を啜った。

「へえ、本当に動くのね、これ」とアリスが感心したようにそう言うが、どこか呆れた感はない。

「どうだい、なかなか凄いだろ？」そんなアリスの態度を歯牙にも掛けないで、にとりが鼻息荒く胸を張った。

「そうね、これだけ動くのなら、もう少し改良すれば自立した機械人形になるかもしれないわね」

「ゆくゆくはもつと色々なことをできるようにするつもりさ」

「うーん、でもそれって、貴女がこの機械に教えるってことよね」

「そうだよ。何か不満があるみたいだね、アリスには」不服そうな様子を隠すことなく、にとりが頭を掻く。

アリスにしてみれば、このにとりの機械人形も、あくまでからくり人形の域を越えていないと言いたいらしい。要するに、アリスの考える自立した人形とは、自ら学び、自ら動くものだということのようなね。たとえどれだけ精巧な動きをし、精密に作られていたとしても、それが何者かによって制御されているのであれば、それはあくまで自立人形とは言わず、いわゆる操り人形の延長線上にあるということ。生み出された時点で、何もかもできる必要はない。周り

の環境に適応していく、云々。

「自分勝手に動くつてのは、そんなに良いもんかねえ……」

にとりの懐疑的な呟きに、アリスは柳眉を顰めながら口を開く。

「別に自分勝手ではないわ。自律した人形というのは、ちゃんと周りを見て、行動を決定づけられるわ」

つんけんしたアリスの声色からは、何を分かりきったことをという意志が感じられた。

「ふうん、要するに人間みたいに？」

「まあ、そういうことね」

断言するアリスの言葉に、にとりは納得しつつも、如何にも面白くないといった風である。

「そっかー、そういうことかあ」

「何か含みのある言い方ね」

「そんなんじゃない面白くないじゃないか。人を越える存在を作るのならわかるよ。でも、アリスの言う自立した人形って、そういうのじゃないんでしょ？」

面白い面白くないか、それがにとりにとっては大事な事らしい。そして、彼女の機械人形の到達地点は、人間を模したのではなく、それ以上の何物かであることを聞いて、私は少し

だけ意外の念を覚えていた。

「ふふ、それこそ陳腐ね。ただ強い物というのであれば、いつだって作れるわ。それこそ、魔法に頼ればね。そうじゃないのよ何ものかを生み出すと言うことは」

アリスの言葉にとりは未だ承伏しかねるという様子だったが、私には理解できた。アリスが何を目指しているか。それは彼女の出自を考えれば当然と言えば、当然のことと言えた。

アリス・マーガトロイド。七色の人形遣いという二つ名を持つ者にして、優秀な魔法使い。魔法の聖地とも言える魔界に生まれ、魔界の全てを生み出した魔界神からの寵愛を受けて育つ。ある意味で魔法の申し子とも言える存在。そんな彼女が、自らの民として自律した人形を生み出そうと考えるのは、決して不思議な話ではない。

また、アリスは、彼女の作る人形、いえ、それ以上に美しい容姿を持ち、それこそ骨董人形のような美しさを持つ少女だった。同姓である私から見ても、思わず見惚れてしまうほどに。普段の彼女は、その人形のような容姿に似つかわしく、冷静沈着、感情的な姿は見せない。けれど、そんな彼女が弾幕戦では、己が感情を発露させ、まるで年相応の少女のように振る舞うのである。

半年ほど前の夏、あのお騒がせ天人によって引き起こされた緋想の剣の異変のことは今でも記憶に新しい。あの時、アリスは異変の犯人に気付くのは遅かったものの、私が辿り着かなか

った答えまで辿り着くことができた。そして、そこで繰り広げられた弾幕遊戯。普段はあまり興味を抱かない私が、記録をとったほど美しかった。

……極光を纏いし比那名居天子。悠然と緋想の剣を構え矢面にふさがりければ、アリス人形を飛ばし天子を斬らんとす。天子それを悟り、軽びやかにして避く。天子アリスに斬りかかりてくれど、すみやかにかはすに距離をとる。然し、天子もいらざたる要石を直ぐに打ち出だし、其れアリスに命中す。体いきほひ立て直さむにするアリスが妨げむと、なほ小型の石ばらまひて動き止むるに、無数の激光撃ちけり。さしものアリスもあはやと思ひしが、然し空中にて其れ防ぐに、なほ向かひてくる激光かはす。然る後に、人形をば、地上と空中に配置するに、御返しとばかりに無数の光弾散じけり。いたく慌つる天子。いきほひ崩しけるところにて、アリス激光撃てど、此はかはされたり。されど、かはしけると思ひし激光は人形にて反射せられ、天子の身体貫く。時を得しと思ひきや、アリス何処より呼び寄せけるや、無数の人形に剣にて天子の身直切りなり。辛うして深き傷免るる天子なれど、猛然にやらるるは変はりなし。攻めむにしても、巧みなる技にて捌かれ、死角よりは人形の砲あり、また、斬飛びてく。いまはと  
なると覚えし天子は、肉切らせて骨断てとばかりに怪しくあうなく攻めむとす。緋想の剣すずろに振り回す天子に、アリスもおぼしおどろきて、守り崩せられかかる。さりとして、刹那の隙



つき、天子の腹蹴え上げ、なほ人形の槍ぐひと突きたり。つひには、空に打ち上げられし天子の身、人形より放たれし極太激光貫きけり。……

本当に芸術のごとき立ち振る舞いだった。私は見惚れてしまったのを誤魔化すように、紅茶を啜る。そして、何事もなかったかのように魔術書に目を落とした。だけど、この眼に焼き付いたあの光景はそう簡単に拭えるものではなかった。

弾幕戦は、アリスにとつては、舞台で人形劇を振る舞うのと何ら変わらないのだろう。複雑な弾幕であればあるほど、彼女はあたかも謎解きをするように楽しんでいく。彼女がよく言う都会派という言葉があるけれど、それにふさわしい物腰を彼女は身に付けていた。

アリスの今一つの特徴は、決して本気を出さぬところである。というのも、彼女は、全てを出し切って負けてしまうと後がなくなるので、相手よりも少しだけ上に行くようにして相対するようにしている。そうした結果、一つ一つの経験によって得た教訓を己が身に取り込み、同じ過ちを繰り返さないし、まず初見で手ひどい失敗をすることはしない。だからこそ、彼女は絶対に敵わない相手に挑むような真似はしないのだ。

けれど、彼女にも決して抗し得ない相手に挑んだことがただ一度あった。かつて、彼女と差

し向かいで杯を交わした時に、恥じらいをもって語ってくれたことがある。それは、彼女が幼い時、まだ魔界に居を構えていた時のこと、一部の跳ね上がり者共が起こした騒動の側杖を食って、霊夢達の襲撃を受けた時のことだ。

そのころ、アリスは幸せな少女だった。神綺の愛し子として生まれ、厳しくも優しい姉妹と共に暮らしていた彼女にとって、理不尽なまでの暴力を以て攻めてくる敵がいるなど思いもよらなかったらしい。知識としては確かに知っていたかもしれない。だが、彼女はいかんせん世間知らずであった。

彼女にとつては初めての实战だった。無論、魔界を統べるものの眷属として、研鑽は積んでいたはずである。当然、絶対の自信を持って敵対者達の前に立ちはだかった。だが、それは呆気なくも打ち碎かれる。そしてそれを為したというのが、当時夢幻館の主であった風見幽香らしい。暴力的なまでの力によって蹂躪されたアリスは、禁断の魔術書まで持ち出したそうだが、結果は惨敗。しかも、幽香にはその後付きまとわれて、散々な目にあつたらしい。そちらは話してはくれなかったが。

その時の経験が、彼女を変えたと言っても過言ではない。甘ったれで、我が儘だった彼女は大人びて、今のようにな冷静な姿を身に付けていった。慎重で、物事に一步引いて構える姿勢はこのときから始まったものだろう。果たしてそれが良いことなのか、悪いことなのかは分から

ない。

さて、神綺の元、本来であれば伸びやかに魔法使いとして成長していったであろうアリスが、こうして今は幻想郷にて人形遣いをやっているというのも不思議な話のように思える。けれど、過去に戻るわけもなく、今の彼女は今の彼女のままで高みに上り詰めるのだろう。それはそれとして素晴らしいものだとは私は思っている。

霧雨魔理沙は不思議な人間である。人間にしては強い。有象無象の端妖怪や妖精達ではとても太刀打ちできぬほど強い。とはいえ、いわゆる大妖怪と呼ばれる存在からしたら、とるに足りぬ存在である。それがこうして大きい顔ができるのも、弾幕ごっこの恩恵とは言えるのだが。まさに彼女は弾幕ごっこの申し子という存在であり、博麗に代われるほどの異変解決屋でもある。

かく言う私も、彼女と初めて出会ったのは、紅霧の異変の時であった。魔法の術も知識も大したことがない。ただ欲深く、御器嚙のようにしぶといただけの女。それが私の彼女に対する第一印象だった。その後、盗賊のように図書館から本を奪っていく姿を見るにつけて、何という浅ましい生き物だと思っていた。しかし、どういう訳か、レミィや咲夜、美鈴は彼女を好ましく思っている。それどころかあの妹様までもが気に入るに及んで、私も彼女を改めて評価し直さ

なくてはならない。そう思うようになっていた。

この意地汚い魔理沙に、認めたくはないが私達三人が斉しく惹かれてしまうのはどういうわけなのか。(こんなことを認めているのは私だけだろう。アリスは決して認めないだろうし、にとりはこんなことを難しく考えたりはしないだろうから。) 私が思うに、私達は魔理沙のあの輝かしいほどの生命力に惹かれているのではないだろうか。

そう、霧雨魔理沙は、人としての限界を越えたところに位置する。捨虫、捨食をせずに魔法使いである彼女は、あくまで人間のままなのだ。幻想郷の加護を受ける巫女とは異なり、あくまでただの人間として魔法使いをやっている。それはある意味異常なことだと私は思う。人である以上いつか終わりは来る。どれだけの知識、技術を詰め込もうとも、それが失われる日が来るのだ。それを分かっているにもなお、彼女は新しい知識を求め、新しい魔法を開発しようとする。人間らしい貪欲さと速さを持って彼女は駆け抜けていく。それこそが、彼女の魅力のように私には思える。

ただ、気懸かりなのは、我が忠実な僕たる小悪魔の解釈によれば、私達の――少なくとも私とアリスの魔理沙に対する親愛の中には、性的要素が含まれているらしい。一笑に付してやりたいところだが。

それにしても、アリスの、あのある種魔法使いと完成した姿と比べて、魔理沙の荒削りであ

ることか。ただ、これは二人の出自と、そして歩んできた道のりを考えれば詮無き事なのかもしれない。何か困難にぶつかった時、魔理沙は躊躇わず突っ込んでいく。それこそ考えなしとも思えるほどに。当然、上手いかないことの方が多いため、手痛いしつべ返しを食らうことも多い。けれど、鉄火場において思案が如何ほどにもものなるるか、詰まるどころ実行こそが全てというのは彼女を見ていると思ひ知らされる。百人のうち九十九人が『これは危機だ』と判断するところを、彼女は全く無意識自然体で『これは好機』と当然のように受け止める。一方、アリスの方はまず立ち止まって、打開策をしつかりと練る。そして、難しい時には巧みにかわしていく。どちらにしても解決できない困難というものはあるのだろう。その時、魔理沙は必要以上に傷だらけであるかもしれない。だけど、それは決して悲しむことではない。彼女はそうやって著しい成長を遂げるのだから。

アリスにとって、知識、技術、そして資質。全ての面で魔理沙よりも優れていることは疑いない。当然、アリスは、魔理沙が自分より勝っているその点を理解しているはずだと思う。不思議なことだが、理解した上で自分が魔理沙よりも優れているとは認められない。けれど、それ故に魔理沙から離れられないことには気付いていない。機嫌が悪い時などは、私が魔理沙の側にいるのは彼女を利用するためよ、などと嘯いているけれど。そして、「世話の焼ける奴」などと愚痴愚言いながら、共に異変解決のために動くのだ。

「まったくこれだから野良魔法使いは困るわ。都会派の振る舞いというのを教えてあげなくちゃ」と言う時、アリスは無知蒙昧なものへの啓蒙だと自惚れているのだらうけれど、真実としては、彼女の気持ちの中にある、未だ荒削りな原石への、何かを育てたいという本能的な母性、輝くほどの生命力への心酔が過分にまじっていることから、彼女は目を逸らしている。

そのことを魔理沙自身が気付いているかどうかは、正直なところ私には判断が付かない。彼女は嘘つきで、気持ちを隠すことがとても上手だから。それでも憎からず思っているのは間違いないはず。だけど、感謝の意を表すというのは、恥ずかしがり屋だから難しいと思うけど。

二人とも自分たちの関係がどうであるか、何となく感づいていても、それを口に出すことはない。時には反目しながら、それでも離れることができないでいるというのは、とても興味深いことだと思う。そして、私は気付いた。合わせ鏡に映ったように対照的な二人だけれど、とてもよく似ているところがあると。それは物事と向かい合う時に、現在を過程と考え、たとえ途中に誤りがあるとしても、それを乗り越えて正解にたどり着けると信じて疑っていないこと。紅玉と蒼玉は同じ物質からできているのだけど、明らかに異なっている。その二つの宝石よりも、違いが著しいこの二人の考え方が、共に無限上昇の精神を持っているということとは、やはり面白いと思うし、このことこそが彼女たちが傑物だという証拠に他ならない。

アリス・マーガトロイドという傑物に圧倒されて、すっかり影が薄いが、河城にとりという

女もとてもあくが強い妖怪だと思う。まあ、妖怪なんてのは、薄い者を探す方が難しいともいえるのだけど。それはそうとして、この河童はとにかく技術というものを愛してやまない。それこそ、魔法使い達が己の魔法を愛するかのごとく。ある時、にとりに尋ねてみたことがあるわ。

「何を思つて、貴女は機械を弄つているのかしら？」

「ん？ 賢者と謳われてるあんたにしては妙な質問をするね。そうだね、私達河童がエンジンアとして技術を求めるのは生まれ持った性分だからかもしれない。だけど、私がこうして作っているのは私のためよ。できればそれで稼げるようになって、そしてそれでさらに新しいものを作るの。どこまでもどこまでも、続けていきたいわね」そう言つてからにとりは、自分がこれまで作ってきた発明品や、これから作りたいものについて、一つ一つ語つてくれたわ。まあ、機械に疎い私にとってはよく分からないことも多かつただけど、それでも私はこの魔法の知識も教養もない河童の言葉に感銘を受けていたわ。かくも熱い衝動というものを持つているとは思わなかつた。確かに、私の魔法研究というのは生涯の事業であることは間違いない。けれども、そこにこれほどの情熱を見る余地があるだろうか。それ以来、私はこの河童に一目置くようにした。だから分かつたことかもしれないけれど、にとりの心中も決して単純明快だけが存しているわけではないということ。だからこそ、こうして魔理沙の誘いにも

乗り、似合わない真似をしているのだと思う。

だけど、にとりのことを考える前に、私はアリスと、そして魔理沙の二人との関係を考えなければならぬ。そこから、私に欠けているものを見出すことが肝要だと思っていた。紅霧の異変よりこの方、図書館に閉じこもっていた生活を変え、外に目を向け始めて以来、いったいどれほど成長したのかしら？ 依然として若き頃のカエサルと同じではないのかしら。この異変での私の役割は、地底に降りていく魔理沙への忠告、アリスの相談相手となり、にとりの暴走をとどめる程度しかない。何か調べ物にしても、いざ使う時には間に合わないことが多い。私のような者は、結局、傍観者にとどまるしかない。決して何か行動に移すということはないだろう。

魔理沙の行動と、アリスの動きを見るにつけ、私はそう考えずにはいられない。だからこそ、私は彼女たちから学ばなければならぬ。遠方から感嘆しているばかりでは、もう駄目なのだ。

深夜。私は独り読書を続けている。

夜半過ぎまでは異変解決の熱気に沸き、宴の騒ぎが耳についたが、今では幾分か静まっていた。私は喧噪の場に身を置くことを良しとせず、早々と自分の城である大図書館に引っ込んでおり、大広間がどうなっているかはもはや知るところではない。ピラピラと魔術書をめくる



音だけが、しんと静まり返った大図書館に響いている。真冬とはいえここには冷気は届かない。私は先刻より漫ろだ。何とはなしに漫ろである。羊皮紙に綴られた文字を追おうとしても集中できないでいた。とうとう私は魔術書を机に置くと、安楽椅子から身を起こした。カップに手を伸ばしたが、空っぽであることに気づき、呼び鈴を鳴らそうとして、止める。あの忠実な小悪魔の顔ですら見たい気持ちではなかった。私はそつと扉を開け、一人図書館を出るとバルコニーへと赴く。やはり外は冷える。寒々とした夜空には宝石箱をひっくり返したかのごとく星が煌めいていた。

流れ星が尾を曳いて、そして消えた。考えるまでもなく、私の胸中に浮かんできたのは、魔理沙のあの力強い瞳だった。常に前だけを見ているあの真つ直ぐな、そして何かいつも愉しげな瞳。けれど、時折その瞳が曇る時がある。平生はまったくもって気にならないでいたが、なぜか今は妙に気になって仕方がない。また流れ星が煌めく。そこで、はたと、気がついた。魔理沙は今を生きている。永劫ともいえる命を持った我々とは違う時を生きている。いつか迎えるであろう運命を前に、それでも全力で生き抜こうとする恪気と、そうした数々の異変をくぐり抜けてきた活力がその瞳をいつそう輝かせている。けれど、かの魔理沙であってもその胆力が鈍る時があるのではないだろうか。次々と流れ落ちていく星の光を見てみると、自ずからそうした心持ちになってしまう。私は振り返って黒々とそびえ立つ紅魔館をじっと見つめる。す

ると、もう一人の死すべき運命を持つ女給の面影が浮かんできた。私は、心の奥で吹き荒れる吹雪を感じ寒々しさを覚えるのだった。

——「わが地霊殿記」の中——《了》

幽  
機  
会

私はその記憶について思い起こそうとした時、まず最初に蘇ってくるのは、蟬の声である。厳しい日差しも和らいだ夏の日の夕暮れの事だった。私は次々と帰路につく友人たちの背中を見送りながら、所在なく立ち尽くしていた。山間に沈んでゆく夕日の赤みがやがて訪れる夜を予感させ、わけもなく走り出してしまいたくなるような不安感を私に植え付けた。

私はそんな必要もないというのに、途方に暮れていた。遠ざかっていく友人たちを追うことも、建物の影で何事か話し合っている母と先生のほうに寄っていく事もできなかった。そのどちらもすべきではないのだと感じて、ただ時間を過ごしていた。

いつものように、一人で家に帰ることはできたはずだった。私を惨めにもその場へと釘付けにしているのは、用達のついでに現れた母が放った、「ちよつと、待つてなさい」という言葉に他ならない。

私はつかれていたし、腹をすかせていた。すぐにでも家に帰って夕餉にありつきたかったが、それは望むべくもないことのようにである。延々続けられる母と先生の会話は、いかにも他愛のないものであったが、会話を切り上げることが訴える私の視線は、その悉くが無視された。

あのような退屈な話を続けることのどこに、私をこの場へと縛り付けておくだけの理由があるのだろうか。私の中には確かに怒りが存在していた。けれどもその怒りに任せて自分の要求を

口に出してしまふことは、いかにも堪え性のない子供のように思われそうでいやだった。

そのうち、私は自分の手足が自由であることも忘れ、風景の中に溶け込んでいくかのような錯覚さえ抱くようになった。それは私が望んだことかもしれないなかった。母がそう望んだように、私もただの風景の要素になってしまえば、惨めさを感じずに居られるのにと。

やがて、一際大きな声でカラスが鳴いた。空に放っていた視線を戻すと、ちょうど母と先生の会話が終わりを迎えようとしていた。先生は申し訳無さそうに何かを告げると、次いで、一瞬だけ私の方を見た。先生のあとを追って私を見た母の眼差しは、先程からずっと私が待ち望んでいたたぐいのものであった。

ようやく私が風景の一部から抜け出す時が来た。然し手足は感覚を取り戻さぬままで、私にとって息苦しい雰囲気の消えた二人に歩み寄り、先生に対して別れの挨拶をしようという気さえ起きなかつた。

さきほどまで確かに感じていた不平のたぐいはいつの間にか流れてしまったようで、妙にぼうっとした気分のまま、私は母が呼ぶ声を待った。

視界には先生の横顔が閉じ込められていた。彼女は美しい少女の姿をしている。

その時私ははじめて目の当たりにしたのだ。先生にまわりつく「気配」を。

それはくすぶる煙のように見えた。先生の背を包み込むように、おぼろげに存在している。

美しい横顔にはまったく似つかわしくない不穏な「気配」。それはいつしか大きな火の手をあげることを予感させた。

その時の私の慄きようは、様々なことをわきまえた今の私でも、筆舌に尽くすことが難しい。思うに、それはただしい記憶ではないのだ。今なお記憶に刻みつけられている光景は、子供ならではの想像力によって置き換えられたものであるはずだ。残念ながら私は、その決定的な「何か」を思い出すことができない。ただ、その瞬間の先生にながしか心境の変化が訪れたことには確信が持てた。

その心の動きが、母との会話によって生み出されたものであるのか、それとも別の何かでもって生まれたものであるのか、子供の私には考えが及びつかなかった。私は先生について、母に聞かされたこと以上のことを何も知らなかったから。

再びなんとも言えない心細さを感じ、途方に暮れだした私は、自分がいつの間にか風景の要素から脱していることに気がついた。なぜだか、もはや二度と元には戻れないのだろうというような気がしたものだ。

この夕暮れ時の出来事ののち、私は小さな学校を離れるその時まで、先生とともに口を利くことすらためらうようになったのである。

※

私が人里の学校に通っていたのは、一年と数ヶ月という、ごく短い期間だけのことであった。父の畑を継ぐことが決まっていた私には、必要な知識はごく限られていた。

母は私に必要な以上の知識をつけることを熱心に勧めてきたが、その気にはならなかった。勉強や、共に学ぶ友人たちが嫌いなわけではなかった。先生に対しても、その人格に対して明確な苦手意識があったわけではない。ただ、私は彼女に周囲の友人たちには見えようもないものを見ていた。それは私の中にすでに形成されていた印象を見せていた幻だったのかもしれないが、少なくとも子供の頃には、それがはっきりと「見えて」いたのである。

先生には、得体のしれない張り詰めた気配が常にまわり付いていた。私は特に、そのことに關して敏感だった。あるいは同輩の中にも、時折垣間見せるちよつとした仕草から、普段のやわらかな笑顔であるとか、優しげな声音の持ち主とは別種の何かを感じとる者があつたかもしれない。然し、私ほど彼女が見せないようにしているものに対して、目を向け、耳をそばだてていた子供は居なかつたことだろう。

私がこのように無礼な子供であつたことには、母が繰り返し語り聞かせてきたものがたりの影響があるが、母だけに責任があつたわけではない。私が自分が母の体験を受け継いでいるこ

とを自覚しなかったばかりに、私は先生と過度に接することを恐れ、そのくせ常に注意深く観察していた。

当時の私は、なぜ自分が先生に対してそのようなものを見てしまうのかわからなかったし、それをなんとなく居心地の悪いものであると感じている理由もわからなかった。あの夏の夕暮れ時、それから劇的な出来事があったわけでもないのに、私はこれ以上私の中の「何か」が歪められることを恐れていた。

私が先生を見つめるとき、その視線には疑いや恐れその他、ある種の祈りが含まれていた。彼女はそれに気がついていたのだろうか。それを訊ねてみる機会は、もはや失われてしまった。

※

私や同世代の人間たちにとって、「先生」と言えば藤原先生ただひとりのことを指すが、私の母や、その仲間たちにとってはそうではないようだった。

人里にて学校——教室と言ひ換えてしまっても構わないような、小規模なものである——をひらき、読み書きや簡単な計算、歴史等を学ぶ場をつくりだしたのは、藤原先生ではないとのことである。ちょうど母たちが生徒と呼ぶべき年齢であったころ、教職の引き継ぎがあった



そうだ。

前任者は私達人間からして気が遠くなるようなはるか昔から人里に関わり続け、その生命の佳境を迎えた老妖怪であった。彼女は数十代にわたって人間の営みの移り変わりを見届けたあと、自身の限界を直ぐ側に感じ始め、自身の最も親しい友人に教職の引き継ぎをするように頼み込んだ。引き継ぎを打診された相手、今の藤原先生は、当初この求めを断った。自分がひとものに教える器ではないというのがその理由であったが、おそらくそればかりが理由ではないのだろう。

前任者は一度断られると、二度とその話を持ち出さなくなった。以降、その話はなかったことのように扱われたが、日に日に体の動きを鈍らせ、ついに前任者をもっとも大切にしていた要素である「記憶」に衰えがあらわれ始めた時、藤原先生は自ら教職の引き継ぎを申し出たのだと言う。

そうして先生が「先生」となつてはじめて受け持った生徒が、私の母親たちだった。

当時のことは今でもよく覚えている。母親は訊かれもしないのに、私を相手に追憶を始め、ることを好んだ。母は自身が当事者であるかのごとく、見てきたことを私に話して聴かせる。母の語るものがたりのなかでは、母は「生徒」であり、また「前任者」でもあり、「先生」でもあった。すべての現実には、母が感じ取った不幸や悲劇のフィルタがかけられている。聞か

されるばかりで何も知らぬ私の頭の中には、いつの間にか母の感性によって修飾されたものがあり、現実のものであるとして受け入れられていた。

母の体験を受け継いだ私にとって、先生は不幸でなければならなかった。ゆるやかに弱りゆく友のために慣れぬ教職を引き受けた先生は、清く、胸を打つような悲劇の体現者でなければならなかった。

そんなことであつたから、はじめて先生と顔を合わせた時、私は首をひねつたものだった。活力にあふれた、十代の少女の姿をしていたからだ。しゃっきりと伸びた背筋、白い素肌にはんのりとさした朱色。堂々とこちらを見つめる瞳。どこをどのように見つめようと、私は彼女に不幸のにおいを嗅ぎ取ることができなかった。ただ、色素の抜けきつた白い頭髪によって得られた妄想だけが、ほんの僅かに私の心をなだめた。

あの夏の出来事に遭遇するまでの間、私は先生と慎重に接していた覚えがある。思えば出会つたその時から違和感を抱いてはいたのだろう。しかし私は、決定的な結末に至るまで、自分が先生を見つめる瞳が自分独特のものではなかったという事に気づくことはなかった。

先生の背負つた「何か」を目のあたりにするようになって、私は本質的に何も変わらないことがなかった。私が恐れたのは、先生が母のものがたりから逸脱した存在になることであつたのだ。先生が纏う不穏な気配は、母の語るような耳聞こえの良い不幸から発せられるものではな

い。——そう察することまでしておいてなお、改まった視線を向けようとはしなかった。私には与えられたものを覆すだけの機会も度胸もなく、また母のような好奇心も持ち合わせていなかったのだ。

やがて必要なことを学び終え、体が成長してくると、私はそそくさと学校に通うのをやめ、父の仕事を手伝うようになった。人里に寄ることがあっても決して学校には近寄らず、当初はそれを意識していたが、時間が経つに連れ他に重要な事柄は増えてゆき、学校に近寄らないということは、私にとってごく自然なことになっていった。

体が成熟し、まだ不完全であるという自覚はあるものの、大人の自覚と精神を手に入れた。父から一部の土地を任されるようになったころ、母が死んだ。突然死であった。

私は素直に悲しむことができなかった。多くの人間がそうであるように、死者を悼むとき、生者は思い出を身勝手に装飾して語り合う。父や類縁が母について思い出話をしている間、私はここ十年ほど振り返ることがなかった、あの夏の夕暮れ時のことを思い出していた。

私が母についての記憶をたぐるとき、どうしても先生の存在は付きまとってくる。一度それについて考えだすと、記憶は数珠つなぎになっていて、曖昧ながらも様々なことが頭のなかに巡ってくる。

まだ幼いころの私の視線。釈然としないものを感じた。

私は大人の分別を手に入れていた。今では昔わからなかったことがなんでもわかるような気がしたのだが、それとは逆に、失ったものも少なからずあった。子供ならではの想像力やものの捉え方がその最たるもので、私は自分のことながら、子供の私がどうしてそんなにも先生とまともに接することを怖がっていたのか、知りたくなかった。

この時の私の心情は、なんと気軽なものであったことか。あるいは、過去の自分のことであるのに、どこか別人を見るような視線を投げかけていたのかもわからない。ただ、それを知らぬままにしておくことに苛立ちを感じるようになった。

※

そうして私は私についてまともを考えてみるよりも先に、先生を訪ねてみることにした。それは唐突にくだされた決定であった。今の自分が先生の顔を見た時、どう思うのか。過去の私が、先生の目にどのように映っていたのか。もう一度先生に会いさえすれば、過去の私についての一切に決着がつくように思われた。そこにまともな根拠と呼べるものは何もなかった。

先生は、人里から離れた竹林に居を構えている。竹林は広大であり、目印になるものが一切なく、多くの妖怪が隠れ住んでいるとされ、何の力も持たない人間が一人で入り込むべきでは

ない場所である。竹林の奥地には名医が住んでおり、里の医者では面倒を見きれない病人を送り届ける役目は、現在でも竹林の地形を熟知している先生が引き受けていた。

元々先生の住居はもう少し奥まった場所に建っていたが、私が学校に通うようになるずっと以前に、里の人間でもたどり着けるような場所に建て直したようであった。教職を務めるにあたって、人間と関わる数と時間が増えたためであろう。

私はいつもより少し早めに仕事を抜けると、学校の授業が終わる頃合いを見計らって、先生の家に向かった。奇しくも季節は夏で、日は赤みを帯び始めており、そこかしこで蟬が鳴いていた。

人里から竹林へと向かう道では、誰ともすれ違うことがなかった。私はひとりきりで黙って歩を進めながら、なぜか自分がこの道を歩んでいることが、ひどく不自然なことであるかのよう感じていた。

後悔というのはしだしたときには取り返しのつかないもので、その時もそうであるように思われた。私は一歩ごとに足取りが重くなることを意識しながらも引き返すことはせず、竹林にたどり着き、予め里人から聞き及んでいたとおりに、入り口からすぐ左手側にある、手入れのされた小道に入った。

そうしてようやく見えてきた先生の邸宅は、どこか鬱々とした雰囲気醸していた。

塀や生け垣などはなく、竹林の中の拓かれた場所にぼつりと建てられている平屋。先生はここに、年老いた前任者と二人で暮らしていると聞く。その生活を夢想してみる私の目には、背の高い竹が落とす影がそれ以外の要素を含んだものに映った。

しばらく玄関の外でまごついたあと、意を決して戸を叩こうとし——手を伸ばしたところ、私が触れるまでもなく、不意にガラリと戸が開いた。

薄暗い屋内から私を見つめる人物が先生その人であると認めるのに、たったそれだけのことに、数秒の時間を要した。ああ、こんな人であったか。私の記憶に火が灯った。曖昧だったものに彩がつく。私はそのことに安堵したが、同時に決して口にだすことができない嫌悪感をも抱いた。

私の見た目と心に変化するのに、十余年という月日は十分なものだった。それにも関わらず、目の前の少女の姿形は、あまりにもすんなりと古い記憶に馴染む。彼女の不死性について知らないわけではない。そして、決して何も思わないわけではないのだ。

私は愕然とした。先生と対面したことでもたらされたその感覚が、あまりに新鮮なものであったことに。私は彼女の不死性を、この時初めて身近に感じたのであった。

「どうしたんだ？」

先生は、黙りこくったまま自分を見つめる私に問いかけた。

「そんな顔をして」

私は次ぐ言葉を失っていた。何も考えていなかったわけではない。ただ具合の悪いことに、私はここに、言葉にはしづらいことを求めてやってきたのだった。

気の抜けた挨拶をし、名乗ると、先生は私を安心させるように「覚えているよ」と笑った。自分がこのような新鮮な気持ちでいるのに、先生は過去の私と目の前の私の変化に驚き、懐かしんでいる。

私が何も言えぬままに立ち尽くしていると、先生が顔を覗かせるために開いた戸の奥から、小さく咳き込むような音が聞こえてきた。思わず中の様子を伺おうと首を動かすが、その行為が無作法であることに気づき、すぐに体裁を取り繕う。視線を戻したさきの先生の笑顔は、当惑に少々歪んでいた。

「あの、今はまずかったですでしょうか」

ようやく絞り出した間の抜けた問いかけに、先生はなにも答えなかった。その沈黙が、私自身の後悔にさらなる重圧を加えた。

「何、今少し立て込んでいてね。私に用事？」

私はその言葉に対して、頷くほかなかった。具体的な相談事と呼べるものがあつたわけではない。ただ、当時のことを少し話題にでもしてみれば、子供の頃の私が何を考えていたのかわ

かるかもしれないと思っていた。

先生は逡巡したあと、ひとこと断つてから、一度屋内へと引つ込んだ。先生の体が退いたことで垣間見えた部屋の奥は、締め切られたふすまで遮られており、隙間から灯りが漏れている。先生がふすまの向こう側に体をすべりこませてゆくと、ややあつて、なにやらひそひそと話し声がしてきた。どうやら複数人が突然舞い込んできた先生の用事が済むのを待っているようであった。いよいよ肩身の狭くなる思いを強くし始めた私は、そのままその場を辞してしまおうかと考えたが、私をもたもとと判断を先送りしているうちに、再び先生が姿を表した。

「それなりに時間が要りそうなこと？」

「いえ、そういうものではありません。ほんのすこしの時間でいいんです……」

「……そうか、わかった。申し訳ないんだけど、今は家にかけて話を聞くといいわけにはいかないんだ。外で話そう。もうじきに夜だ。里まで送ってゆくから」

それはおだやかな拒絶であつたように思う。私はこの場において自分が身勝手な闖入者となることが、予定調和であつたことのように感ぜられた。たとえ都合悪く病人が臥せているようなことがなかつたとしても、私と先生とが向かい合つて座り、会話を弾ませるといふ光景を想像できない。それは不可能なことなのだ。先生の誘いに、私は不満どころか確かな安堵さえ感じていた。その気持の根源を無意識に探ろうとし、道すがら感じていた居心地の悪さの正



体に手をかけた。

私は断らなかつた。目に見える終わりのある場合であれば、耐えられると思つた。

意識せぬ間に、日は昏れかけている。先生に促されるまま踵を返したとき、私は辿つてきた道を眺め、ずいぶん途方も無いところまでやつてきたものだと思つた。実際的な距離ではなく、無闇に落ち込んだ心情がそんな気分になさせていたのである。

先生は指先に炎を生じさせ灯りとし、先陣を切つて歩いた。私は彼女の背中を追いかけて歩きながら、さて何をどう切り出して良いのやらと、考えるふりをしていた。そうやつて努めるふりをしていても、誰かが納得するわけではない。私自身を慰めるために脳は虚に回転を続けたが、それによつて得られるものはなにひとつなかつた。

手がかりがなどはなかつた。私と先生との関係は、単なる事実でしかない。それは希薄な関係で、深い繋がりと呼べるものではなかつた。

私はこれまで、いくらか先生について知つた気持ちで居たのだが、私は私として先生と語り合う言葉を持つていなかつた。すべては母からの借り物でしかなかつたのだ。どんどん領域の狭まる視界の最中、私はようやくその事実を認めざるをえない状況に立たされた。

先生は何も言わなかつた。時折氣遣わしげに後ろを振り返る他は、私に対してなにがしかの行動を起こすことをしなかつた。少し歩む速度を上げて斜め後ろについて歩いてみても、彼女

の鼻筋であるとか、長い睫毛ばかりしか視界に入つてこず、表情はよくわからなかった。ただ、私の言葉を待っているのだらうとういうことはわかつていた。私は彼女を見つめることによつて、その事実から目を背けようとしていのかもわからない。歩調に比例して、意味のない思考の速度ばかりが上がつてゆく。

やがて竹林を抜け、にわかには視界が広がつた。すでに宵の曖昧な色調が空を覆っている。もうじきに完全な闇が訪れるであらう。ほんやりと人里に続く一本道を眺める。今度はなぜだか、それがひどく短く猶予のないもののように思われた。結局この時まで、私は一言も口を利かぬままであつた。

二人の間に横たわる沈黙が、子供の頃の私の恐れが産んだ結果であり、欲した答えでもあつた。

子供の私は知ることを恐れ、大人の私は知らぬことに怯えた。

今も昔も私は対話の機会を失つたままであつた。得ることを望んだはずの答えに、私の心情は打ちのめされていた。

あと十数分も歩けば人里に着くというところで、私はようやく口を開いた。母の死について。そのことに心の整理が追いついていないという態度を装つた。

先生は私について、どのような印象を抱いているのだらう。どの程度のことを知っているの

であろう。そのことを訊ねるのが恐ろしくて、私は唯一の逃げ道である母の思い出話を始めた。先生は辛抱強く付き合ってくれた。丁寧に相槌を打ち、慰めの言葉をくれた。

私はいっそのこと、非難されたかっただと思う。そうすれば謝ることができる。謝罪さえしてしまえば、いくらか私の気持ちが悪われたことだろう。愚かで身勝手な私は、先生の優しさに、それこそ自分勝手に追いつめられていった。

次第に話題が尽き、沈黙が再び舞い戻ってくる。私はすぐ目前に迫ってきた人里の明るさに、安堵感と焦燥感を煽られた。帰り道のやりとりのなかでは、何も完結していない。先生にそう捉えられるのが苦痛であった。しかし、私は自身の姑息な態度について、ひとまず決着がついたというような印象を与えるすべを持たなかった。

「それじゃあ、また。私で良ければ話を聞くから……」

最後に何かを言う代わりにそのような当り障りのない言葉を残し、先生は去っていった。その背を見送り、受け取った言葉を反芻させるうち、私は確信した。

今回の訪いは完全に無駄なものだった。それがどのように、あるいは誰にとつての「無駄」であったか。その違いはあれど、それが私と先生が初めてやりとりを通じて共有した「結果」であると――。

それから自宅へと戻った私は、すべてを自覚がなかった頃のものと巻き戻そうと試みた。

一晩明け、普段よりも少しばかり遅めに起床した私は、朝早くになにがしかの知らせを受けて外出していた父に、喪服の準備をしておくようにと言い渡された。大恩のある人物が昨日のうちに亡くなったのだという。その話を聞き終えた時、私の中に前日の経験が焼き付けられた。私の人生に、決して消えることがない焼き痕が残されたのである。

私は自分こそが先生を決定的に、ほんとうの意味で不幸な人にしてしまったのではないかという妄想に囚われた。それを否定するにも確信するにも至らぬまま、私は父に同行するか否かの決定を迫られていた。

私は今も、あの夏の夕暮れ時に垣間見えた、不穏な気配の正体を知らないままで居る。

あれは未だに先生を取り巻いたままなのであろうか。それともなにがしかの変質を遂げたのであろうか。母が語り聞かせてくれた先生のものがたりは、母の知らない展開を迎えている。私はそれに関して、どのような態度をとればよいのか。逸した機会は、もはや取り戻せないものであるように思えた。

私は子供の頃のように、途方に暮れていた。大人になったことで加速し始めた時間の流れは、私が風景の要素に埋もれてしまうのを、もはや許してはくれないだろう。《了》





青矢鴉

潮騷

幻想郷は人口五千四百、周囲五里に充たない小さな世界である。

幻想郷に桜のもつとも美しい場所が二つある。一つは東の頂きちかく、東にむかつて建てられた博麗神社である。

ここからは、盆地状の幻想郷と周囲の山々が隈なく見える。北には噴煙を燻らせる妖怪の山が迫り、東から北へ魔法の森が延びている。西には再思の道から無縁塚にいたる小高い丘の稜線が隠見している。

二百段の石段を登って、一双の唐獅子に成られた鳥居のところで見返ると、こういう遠景にかこまれた古代さながらの原風景が眺められた。もとはここに、枝が交錯して、鳥居の形をなした「鳥居の松」があつて、それが眺望に面白い額縁を与えていたが、先代の巫女がその鉄拳で粉砕してしまった。

神奈備より続くなだらかな斜面は、淡い紅白に染っている。妖怪の山より吹き下ろす風に揺られて打ち寄せる様は、飛沫をあげる波濤にも似ていた。

桜のもつとも美しいもう一つの場所は、幻想郷の西端に近い無縁塚である。

無縁塚に至る再思の道は緩やかな流れに沿って伸び、霧深い中でも清流の響きが絶えなかつた。その先、世界から忘れ去られたような狭窄な谷に位置するこの塚は、風のある日には嘆きにも似た声をあげた。無数にある無名の墓碑が哭き続ける荒涼とした大地を覆い隠すように紫



雲の如き桜霞がたなびいている。

人々の罪を吸い上げて紫苑にけぶる桜を観に訪れる者は少ない。この地は結界の交点であり、幽冥の境界も曖昧ならば、外界との境界も曖昧である。故に幻想郷の外より様々なモノが流れ着くだけでなく、しばしばヒトすらも迷い込む事で知られていた。それらを目当てに彷徨う物が跋扈する有数の危険地帯なのである。

黄昏時となつて日が翳ると、紫雲は朱に染り、境界は一層曖昧になった。その空に滲み込んだ墨のように鴉が舞っている。鴉は天の高みで、両翼をためすようにかわるがわる撓らせて、さて下降に移るかと思ふと移らずに、急に空中であとずさりをして、帆翔に移ったりした。

日が翳り始めたころ、一人の商人の若者が背に大きな籠を担いで再思の道から無縁塚に向かう下り一方の道を急いでいた。

姿は若く見えるが、幻想郷が結界で隔離される前の世界も見たことがある。線は細いものの背丈は高く、精悍な顔つきと眼鏡の奥にある猫睛石のような瞳だけが爛々と好奇心を湛えていて、稚い印象を拭いきれないでいる。肌は日焼けがちな幻想郷の男達とは違って白く、月白に染められたかのような特異な髪の色も相俟って遠目からでも酷く目立った。

普段から好んで纏っている桧垣文様をあしらった濡羽と瑠璃を組み合わせた衣の胸元には彼

が命の次に大事にしている商売台帳を収めた小型の鞆が提げられている。

若者はすでに深閑としている再思の道を抜け、物謂わぬ番人の如き巨石が坐した丘を上った。巨石の裏に回ると無縁塚の静謐な姿が見渡せた。夕闇の朱に沈みかけた紫苑の桜がしらじらと見える。そこから目的地まで数分足らず下ればよいのである。

無縁塚の道は実に崎嶇きことしていて、馴れない人は昼でもつまずくだろうが、若者の足は目をつぶっていても無数の墓石や桜の根を踏み分けて行くことができた。今のように、ものを考えながら歩いていてさえ、つまずかない。

先刻、まだ残照のあるうちに若者は店仕舞いをして店を出た。本来であれば無縁塚へは日が高いうちに来るのが鉄則であるが、太陽が博麗神社の鳥居を潜り、無縁塚に沈むこの日だけは日没と同時に足を運ぶを習わしとしていた。彼岸と此岸の境界が繋がりに、そこに縛られる魂も彼方あちらに渡り易かろうと考えての事であった。

背に負った荷を下ろし、大きな薦こもを広げ、古木を井桁に組む。この煙は天への架け橋となるだろうか。薦を掛けて抱き上げた仏に視線を落とすと、若者はそんな事を考えた。

一人の黒衣の少女が無縁塚の入口に程近い丘の上の巨石に身を凭もたせかけて休んでいる。少女は無縁塚での蒐集を常としていたが、特に目ほしい物も見つけられず、歩き回るのに飽きて一息入れているところらしかった。白いリボンをあしらった鏝広の黒い三角帽に覆われた額は汗

ばみ、頬は燃えていた。片手で帽子を払い除けると、その下からは地中海の陽に染まった檸檬<sup>れもん</sup>を思わせる波打つ髪が零れ落ちた。吹き抜ける西風は冷たかったが、少女は歩き回ってほてった顔をそれにさらし、髪をなびかせて楽しんでるようにみえた。はためく黒衣の間から時折覗く白いエプロンが魔女のそれというよりは、彼女に無邪気な少女の輪郭を与えている。顔つきは稚いが目もとは涼しく、眉は静かだった。少女の瞳は紫苑の桜を透かして西の空をじっと見つめている。そこには黒ずんだ雲の堆積に翳る夕日の一点の紅が沈んでいる。

若者はこの顔をよく見知っていた。あのような恰好をしていれば薄闇の中でも見分けられる。と謂って、今自分が為そうとしている事を彼女に見せるのは憚られた。薦を抱き、顔を上げず、少女が佇む丘の下を足早に通り返した。うしろめたさを悟らせぬよう、重ねた井桁の上に包んだ薦を慎重に寝かせていった。胸部の盛り上りから女性である事は知れたが、何れも微動だにしなかった。薦の下でその曖昧な顔の輪郭だけが臆に浮かんでいる。燐寸<sup>マツチ</sup>を胸元の箱から取り出すと、若者はそれを擦る前に少女に視線を移した。少女は軽く眉をひきしめた。目は若者の方を見ずに、じつと紫苑に沈む紅を飛び越えて来る暗雲を見つめたままであった。

熾<sup>おこ</sup>された焔<sup>ほのお</sup>は暗天から下しる潮のさざめきに次第に勢いを弱めていった。これでは、煙も天には届くまい。鈍色の帳に覆われた巨石の下に佇んでいた少女の姿も消えていた。傘は手にし

ておらず、髪から流れ落ちた雨の雫が若者の心と視界を一層曇らせた。溜息と共に一度眼鏡を外して拭い、掛け直す。だから不意に現れた黒いトンがり帽子を胸元に押し付けられ、若者は尻もちをついてしまった。

「相変わらず行き当たりばったりだな、香霖こうりん」

濡れた悪戯猫のような少女の笑みに、雨中に射し出した日の光を若者は見たが、終ぞ口にはできず、辛うじて少女の名前を呼ぶのみであった。

「何を弾幕喰らった鳩みたいな顔をしてるんだ？　こういうのはとっとと済ますに限るぜ」

若者の胸元に押し付けた帽子が無事である事に満足そうに頷くと、少女は右手に携えた八卦炉を火勢の落ちた炎に向け、黒のスカートを翻した。風は一層強くなり、居並ぶ名前無き墓石群は低い嘆きをあげ続けている。それらに立ち向かう少女の横顔も、彼女が熾す焔の強さも若者には暖かなものを感じられた。

猛る天を繋ぐように紅蓮が燃え上がる頃には焔の中の影も境界を失っていた。若者はその様子腕を掻き抱いて、眼鏡の奥から遠くの世界の出来事のように眺めていた。嵐に抗おうとするかのように盛る焔も、梢を揺らす風も、岩を叩く雨の雫も、丁度彼の静かな幸福が静かな自然との連関のなかで確かめられるように、今の彼の内部は自然のこの狂躁に、いいしれぬ親しみを感じるのであった。

少女の方とは言えば、帽子を目深にかぶり、炎の方には興味を失ったように周囲に転がる無骨な石を所在なげに足先でつついたりしているようであった。

「なあ、香霖。こいつらにも名前はあったんだよな？」

少女からの思いがけない問いに若者は喉を詰まらせた。元来この世のあらゆる物には名前がついていない。太古の神々が名前を与え、秩序を齎すまで、遍く物がただ「それ」としてある混沌とした世界だった。名前は境界を生み、境界は自我を生んだ。それは無から有を生み出す創造の力であり、失われることのない強い呪いでもあった。だからこそ、彼はその名前を視ることができた。そんな事を以前少女に語った事を思い出し、彼は慎重に言葉を選んだ。

「僕には彼女達がヒトであったという事しか分からないよ。ヒトがヒトである為には、他人がどう認識しているかは関係ないんだ。言っただろう？ 僕的能力は物に神々がつけた境界としての名前と用途を視ることだと。だから、彼女達の名前は彼女達のものだ。譬え僕達には同じような屍にしか見えなかったとしてもね」

少女は暫く考え込むようにしゃがんで雨に濡れた草を弄っていたが、目を大きく見開くと、淡い碧の光を放つ小さな皮製のベルトに包まれた硝子玉をつまみ上げた。

「じゃあ、これに固有の名前があったとしても分からないのか？」

どれ、と若者は焰から視線を外すと少女から受け取った硝子玉を覗き込んだ。元々は鮮やか

な樺色をしていたはずの細いベルトはすっかり湿つて黒ずんでいたが、小さな硝子窓の向こうには鮮やかな燐光を放つ文字盤と金の針が見て取れた。

「これは夜光時計だね。用途はご婦人の腕を美しく飾る事と時間を把握する事……。君の言う通り固有の名前はない。もしかしたら裏蓋に手掛かりがあるかもしれないがね。もし僕に固有の名前が読み取れるとしたら、余程持ち主の想いが強かつたか、物自体に意思がある事になる。ほら、僕が君を霧雨魔理沙きりさめまりさだと認識できているのは、君がそう名乗っているからだろう？」

少女は洪々といった体で若者から夜光時計を受け取ると、降りしきる雨にそれを翳かしてみた。空に迸る雷光の下でも硝子の奥の燐光は輝きを失わず、それが鮮烈な印象となつて雷鳴のように少女の胸に去来した。

「なら、そいつらはヒトのまま死ぬて幸せだったのかな……。ほら、妖怪になるとそう簡単にヒトからは認識されなくなるだろう？」

「その答えは魔理沙の方が知っているんじゃないか？」青年は打ち付ける雨に片腕を掲げて雨を凌しのぐとしたが、もはやそれも徒勞に終わろうとしていた。炎の傍に居るとは言え、陽が落ちた後の無縁塚はぐつと冷え込み、肌着にまで滲み込んだ雨水は容赦なく体温を奪いにかかった。少女が小さなくしゃみをしたのを合図に、青年は彼女の手を握り、確固たる足取りで燃え盛る炎に背を向けた。

「あ、おい……香霖!？」

粗末な扉を閉めると、小屋の中は揺りかごになったかのように思われた。嘆き声は遠くなり、木の下に位置している分、叩きつける雨の潮騒も幾分か和らいでいた。高い所に据え付けられた小窓の向こうからは、相変わらず嵐の跳梁が感じられたが、光が射さない分二人しかない音が息遣いで強く意識された。床板を叩くお互いの衣服から零れ落ちた雨滴が規則正しい音を奏で、それはいつしか二人の心音となった。若者はこの小屋の持ち主に心当たりがあつたが、敢えて口には出さず、空き家だとだけ少女に説明した。あまり生活感もなく、雑多な物が積み上げられ、闇との境界を失っている様を見て彼女も特に追究しようとはせず、可愛らしいくしゃみをしてそれに応えた。

「火を熾せないかな……。僕はともかく、このままじゃ君が風邪をひいてしまう」

部屋の中央にあると思しき囲炉裏に近寄り、燐寸を胸元の箱から取り出したが、それは既に本来の役割を果たしそうにはなかった。

「本当にしょうがないな香霖は……」

被っていた帽子をその辺に放り、八卦炉を取り出してから、少女はその檸檬のような髪を梳いて、雫と笑みを零してみせた。

「あつはつはつ、……さつきので触媒全部使っちゃったの忘れてたぜ」

深い溜息が木の匂いの色濃く残る室内に充滿したが、携えてきた手拭も役に立ちそうにはなかつた。その時、ことり、と小さな音がした。

体から自然に落ちる水滴が勢いを失い、その音の後には静寂だけがあつた。闇に慣れぬ眼で周囲を見回していた若者は、冷えきつた少女の手に腕を掴まれ、大きく跳ね上がった。

「そんなに驚くことないだろ……。ほら、そこ見てみろよ」

闇との境界を失つた床板を少女のほんのりと陽に灼けた指が示していた。あれは、魔理沙の帽子だろうか？ そのすぐ横に淡く輝く光があつた。

「今日はボウズかと思つたが、拾つてきてよかつたな」

闇に沈んだ中で仄暗く光る無名の夜光時計。碧の燐光を放つ文字盤を中心に世界が在るように若者には感じられた。一步進む度にぎしり、と鳴る床板が張り巡らされた結界のように二人の接近を拒んだ。二人は夜光時計に手が届くか届かないかの距離に来ると腰を下ろし、肩を寄せ合つて己の膝を抱えた。

「なまえ……か」

若者は己のそれには無頓着だつた。苗字代わりの「森近」は魔法の森近くに店を出した時になんとなく付けたものであつたし、名乗っている「霖之助」も隣にいる少女が生まれる前に世



話になっていた大店の名と妖の象徴である魔法の「森」を組み合わせて半妖である己への皮肉としたものに過ぎないし、彼の店の屋号である「香霖堂」こうりんどうもその名に「香」すなわち「神」を加えたものに過ぎなかった。分かる者が分かれれば良い。名前を付けないからこそ成長するものもあるのだ。己の名がないからこそ、それを名付けられるような存在になろうとするのかもされない。遠い雨の潮騒に耳を澄まし、そんな事を魔女の帽子を淡く照らす光を見ながら考えているうちに、若者は膝頭に頭をのせて眠り込んだ。

……霖之助が目を覚ますと、目の前には漆黒の闇が横たわっていた。瞼の奥で慣れた瞳ですらも世界に輪郭を与えはしなかった。夜光時計も既に光を失い、ベゼルの金だけが鈍い輝きを辛うじて放っていた。湿った衣擦れに意識を移す。部屋の端の方だった。見馴れない臃げな形が佇んでいる。隣で膝を抱えていた少女がいなくて、彼女である事は疑いようはなかったが、ぼんやりと露わになった白い背中を晒すその姿は、普段若者が目にしてる少女とは別人のように思われた。先程からそう時間は経っていないであろうことは、少女の肌を滑り落ちる服の重みで知れた。闇に浮かぶ白が増える度に若者は己の膝頭に頭を埋めた。殆ど視界が利かないとは言え、直視する事は少女に対して誠実ではないだろうと考えたが、目にした彼女の後ろ姿は閉じた瞼まぶたの裏に現像されたかのように在り続けた。

少女の方は、ずぶ濡れになった衣服を纏う寒さに耐えかね、せめて肌だけでも乾かそうと肌着まで脱ごうとしたのであろう。普段魔法の森の我が家に帰った際にはさしたる躊躇はないものの、ほぼ完全な闇の中とはいえ、若者の前で肌を露わにすることは年相応の羞恥しゅうちが働いたものらしかった。その躊躇ためらいによって引き伸ばされた時間が永遠にも感じられ、最後の衣擦れが床に落ちると同時に、若者は身じろぎせずにいる事に耐えかねたように顔を上げた。部屋の端に白い影がほんやりとした輪郭を保っているのを目にして、それに背を向けようと床板に手を突いた。見えないからこそ、そこには完全なる美があるように若者には思われた。

ぎしり、と鳴った古い床板の欠伸に、白い影は瞬時に縮こまってしまった。

「香霖……？ 起きてるのか……？」

「スマン……。寒さで目が覚めてしまった。大丈夫かい？」

少女は叫ぶような真似をしなかったし、若者も無用な心配を与えまいとして彼女の姿を見たかについては言及しなかった。それでも、背中越しに彼女が寒さのあまり小さく歯を鳴らしながら、己の肩を抱いているであろうことは気配で感じられた。

衣服を絞る水音が続く。その後も一向に衣擦れが聴こえてこないところをみると、乾ききらない肌着を身に着けることに躊躇いを感じているのだろう。

「見えないと分かっているても存外に恥ずかしい、もんだな……」

少女の声には震えが混じっていた。恐怖からくるものではないと理解はしていても、直接それに触れることを避けるほうが賢明であると若者は信じていた。

「すまない……。火が熾せたら良いんだが、手持ちの道具ではどうにもなりそうにない」

古道具屋であることの矜持きょうじが無力な彼の胸の裡うちに怒りの火を灯していた。どんなに知識があつても、道具そのものがなければ少女に暖をとらせてやることもできない。ラムプとは謂わな  
いまでも、せめて防水処理を施したライターさえあれば……。空を飛ぶ事が適わぬ彼の足では  
助けを呼んで戻ってくるにしても相応の時間を要することは容易に想像がついた。暗がりから  
は間断なく歯鳴りが響いてきている。

若者が意を決して口を開こうとするより先に口を開いたのは意外にも少女の方であつた。

「なあ……。そっち……。行つていいか？」

若者は己の頬がかあつと熱くなるのを感じた。寒さのためとはいえ、一糸纏わぬ姿であるとの理由で、少女と自分の間に妨げが生じ、平常の挨拶あいさつや親しみのある接近がむつかしくなることを厭いとと言う程彼は理解していた。しかし、己の誠実さに従つてすぐに返答はすべきと考えた。

「構わんが……。背を向けていれば平気かい……。？」

自分がどのような姿をしているか若者が認識していることを知つて少女は耳まで朱に染つた。

「香霖は、ずるい……。ぜ。私だけに恥をかかせるつもりか？」

若者も意思を少女に委ねる事に後ろめたさを覚えていた。そこで話の継穂にこままって、子どものような質問をした。

「どうしたら恥ずかしくなくなるんだい？　もう背中を向けてはいるつもりだが……」  
すると少女の返事は、実に無邪気な返事だったが、おどろくべきものであった。

「お前も裸になれ、そしたら恥ずかしくなくなるだろ」

霖之助は大そう困ったが、立ち上がると一瞬の躊躇いの後で、ものも云わないで胸元の鞆を外し、衣の帯を解き始めた。霖の音と共に流れる衣擦れの響きに少女は己の体を隠すことすら忘れて聴き入った。輪郭を失った人影は少女が普段見馴れているものより尚大きく感じられ、若者が禪ぜんどし一本の裸体となっても少女にはそれが書物を通してしか見たことがない異国の彫像のような触れ難い美しさに感じられた。

「これでいいかい……？」

頼りなげに改めて膝を抱えたであろう若者の姿を想像して少女は微笑した。

「ううん」

「これ以上どうしろと言うんだい……」

「まだ裸になっていないだろ」

若者の体は羞恥のために真赤になった。言葉は出そうになって咽喉のどに詰った。立ち上がろう

とした爪先つまさきが闇にぼっかりと口を開けた囲炉裏のなかへめり込むほど迫り寄って、霖之助は部屋の端に佇む少女の白い影をみつめながら、辛うじて声を絞り出した。

「こつちに来ちゃいけない。僕は……」

軋わみが近付くにつれて鼓動が破鐘やがねとなつて若者の耳じ朶だを打った。少女が凍えてしまうかもしれないという考えは己の内に沸き起こった狂乱に掻き消された。呆然と彫像のように立ち尽くす彼の視界の中で白磁の影が不規則な息遣いと共に形を成し始めている。

このとき急に嵐が、窓の外で立ちはだかつた。それまでも風雨は同じ強さで最果ての塚をめぐつて荒れ狂つていたのであるが、この瞬間に嵐はたしかに現前し、高い窓のすぐ外では紫苑の桜がゆつたりとこの持続的な狂躁にゆすぶられているのがわかつた。

若者は二三歩引いた。出口は闇に閉ざされていた。年月を重ねた煤すすけた壁が若者の背中にさわつた。

「香霖！」

と少女が叫んだ。

「僕は……、僕はここに居る！」

若者は息せいてはいるが、清らかな弾んだ声で言った。糸纏いとまとわぬ少女は躊躇しなかつた。

爪先に弾みをつけて、雷光に映えた彼女の体は声目掛けてまっしぐらに飛びこんだ。次の刹那、

その体は後ろ髪を引かれたかのようにのけ反り、嵐に負けぬ勢いで床に叩きつけられた。

「つてえ……」

少女が仰向けとなつて見上げた先では梁から網で吊り下げられた大きな硝子玉が警咳と共に遠慮がちに揺れていた。幽かな秒針の音が耳に寄り添い、傾けた顔の先には消え入りそうな文字盤の燐光があつた。その時になつてようやく羞恥がその身に舞い戻つたのだろう、少女は膝をすくめ、傍にあつた闇色の帽子を丸めて、丁度子供が草叢の中に虫をつかまえたときのように、それでもつて頑なに身を護つた。

どちらからともなく、笑い声が洩れた。それは、共鳴しながら次第に大きくなり、やがて囁きのようになつた。

「やつぱ、駄目かあ……。慣れないことはするもんじゃないな」

——少女は目をつぶつて、訓戒するような、なだめるような調子で独りごちた。

「今はいかん、ということさ。まだまだ早いって、神様も仰っているんだらう」

若者の心には、道徳的な事柄に対するやみくもな敬虔さがあつた。先程の少女の行動が好奇心からもたらされたものであつても、彼女と言う存在の道徳的な核心に触れたような気がした。若者が頑なに帽子を握りしめる少女の後ろに腰を下ろすと、小さな背中が寄りかかつてきた。

「香霖って……あつたかいんだな」

背中越しに二人は互いの裸の鼓動を聴いた。少しの後ろめたさはふしぎな幸福感に転化していった。握りしめられた帽子の白から時折滴る無色の雫は小さくはね、二人はその音や、高い窓をかすめる嵐の呼笛が、お互いの鼓動に混じるのを聴いた。すると霖之助は、この永い果てしれない酔い心地と、戸外のおどろな雨の轟きと、梢をゆるがす風の響きとが、自然の同じ高調子のうちに波打っていると感じた。この感情にはいつまでも終わらない浄福があつた。

若者は身を離れた。そして男らしい、落ち着いた声音で言つた。

「魔理沙、暫く目を瞑っていてくれるかい？」

「別に……開けてても何も見えないだろ」

若者は、それじゃあだめなんだと言つと、濡れた己の衣服から小筆を取り出してみせた。そして、壁際まで這つて行くと床に落ちていた小瓶の蓋をそつと外した。

「目は開けていないかい？」

「ああ、しょうがないから瞑つてるぜ！」

若者は少し肩を竦めると、唇でつまんで小筆の穂先を調べ、そつと小瓶に浸した。慎重に壁や天井に筆を走らせ、世界を描いてゆく。

闇の中から響いてくる床板の軋みや若者の息遣い、繰り返される筆の音に少女は遠い潮騒を聴くかのように、じつと耳を澄ませていた。

「魔理沙は海を見たことがあるんだったね」

「月でだけどな……変な話だろ」

少女の周りを打ち寄せる波のように行ったり来たりを若者は繰り返した。その音が完全に止むと、若者は再び背中合わせで少女の後ろに座った。

「いいよ。開けてごらん」

息を呑む音がきこえた。あれだけ狂躁を奏でていた嵐もその一瞬だけは口を噤つぶんだ。満天の星が瞬いていた。淡い碧の燐光に彩られた星々が部屋を濡らしていた。年輪を深く刻んだ床板は消え、二人は宇宙に漂っていた。

「これで少しは見えるかい？」

「凄いな……どんな魔法を使ったんだ？」

ほんやりと浮かぶ天の川はゆつくりと揺蕩たゆたい、銀河は海門にあるかのように渦を巻いた。

「外の世界では幻想となった技術さ。ほら、魔女は様々な毒物を霊薬として使うだろう？」

「水銀とかか？」

「ああ、使い方を誤れば命さえも容易く奪い去ってしまう。それでも、ヒトはこの未知の輝きに心を奪われずにはいられなかったんだろう」

「まるで星の海だ……」



若者は床で沈黙を保っていた夜光時計を拾い上げると、竜頭りゅうずを通して命を吹き込んだ。幽かだが、明確な秒音が遠い潮のさざめきのように戻ってきた。

「ユールの夜にあてもなくうろつく者は樹上からのさらさらという音を耳にする。それは、風の音だろう。でも、他の木はしんとしている。でも、その次に犬の吠える声を耳にするだろう。軍団の首領が舞い降りてくる。目から火を噴く黒い獵犬、黒い馬の嘶いびなき……」

若者が子守唄のように口遊くちずんだ内容に、少女は胸の前で抱き締めていた帽子を尚一層強く握りしめた。全身の毛が逆立つような不気味さを覚えたのだ。

「なんだ……それは？」

「ワイルドハントを知っているかい？ 北欧を中心とした伝説でね、ハロウィーンを境に現世と霊界の壁が一番薄くなるのに合わせてオーデインが魔物や精霊たちを従えて狩りに赴く。彼らは嵐に乗ってやってくるのさ」

「ハロウィーンは魔女の新年だからな。でも、一体何を狩るんだ？」

若者はしばし膝の間に生まれた暗闇に頭を預けて考え込んでいたが、厳かに口を開いた。

「人の魂さ。人々は嵐が死者の魂を運び去ると信じて家に籠もるんだ。丁度今の僕達みたいにね。地域によっては春分や秋分の頃にもワイルドハントは現れた。まさに今の時期だ」

先刻茶毘だびに付しただけで埋葬を済ますことができなかつた後悔が少し氷解したように感じら

れ、少女は握りしめていた帽子から手を離し、形を整えて抱えた膝の上にのせた。

「なら、さっきのやつらも無事あつちに行けたのかもな」

「そう願うよ。オーデインはここにはいないだろうけど、魔女の女神ならば場所は選ばないだろうからね」

「香霖……、それってまさか……」

「おや、てつきり魔理沙なら知っていると買ったがね。ギリシア神話における女神ヘカテーは元来、魔女の騎行の首領とされている。霊の先導者、死者達の女王の二つ名にふさわしいだろう？　そして、彼女が司る月は死者の世界だ」

「いや、まあ……あの恰好でそうなのか……？　早苗さなえはどつかの有名な街の交差点に居そうな

恰好だと言ってたぜ」

ほう、と言つて若者は碧の燐光に煌めく眼鏡の位置を直してみせた。結局のところ若者にとって場所や己の恰好よりも好奇心を満たすことこそが至上の悦びであると知りぬいている少女は、背中合わせで若者の顔を見ることができないことに安堵し、また少し落ち込んだ。

「彼女はなかなか鋭いね。時代が下ると、ヘカテーは夜の三叉路に松明を掲げ、地獄の猛犬と共に現れるようになるんだ。交差点は神々や精霊が訪れる場所と信じられ、集会場や墓地として使われてきた。ならば、結界の交点である無縁塚を訪れても不思議じゃないだろう？」

「そんなご立派な女神様が単なる暇人だとは信じたくないな……」

若者が朗らかに笑った。彼のはなしにいちいち頷いていた少女は、本当に彼が変わらないことが俄に可笑しくなつて帽子でお腹を抱えた。

「こら、最後まで聞きなさい。神は概して気紛れなものだが、女神ヘカテーは三面三体の神なんだ。その分司るものも多い。天上、地上、地下の三相、そして過去、現在、未来。出産、成長、死。つまり、全てを見通しているんだ。そう考えると、古来より魔女達が彼女を崇めていた理由も少しは分かるだろう？」

「はいはい、どうせ私はコルキスの魔女にはなれないさ。真理は自分で見つけてこそ価値があるんだぜ。だからこそ、香霖もここに物を探しに来るんだろう？」

真理か、と若者は眩き、そつと少女に頭を寄せた。

「魔理沙は海は好きかい？」

「嫌いじゃないぜ。とはいっても、月で見た感想だけだな。でも、なんかこう私が求めているものとは少し違う気がしたんだ。もつと私に相応しい海があるんじゃないかって……」

若者は変わらない自分と変わりゆく少女を交互に見た。

「そして、いつか私がそれに名前を付けてやるんだ！」

もう少女の基準で言えば随分前になるが、あの流星祈願会以来魔理沙は少しずつ変わって

った。変わらない彼と変わる彼女。その正体が知りたくて、若者はこんな質問を試してみた。

「名前を付けてどうするんだい？」

名前を付ける事は、その存在を制覇するという事だと若者は知っていた。だから、彼女の願いの真意を知りたくなつたのだ。

「そんなの、好きナだけそこで遊んで、好きナだけそこから欲しいものを持って行って、疲れたら好きナだけそこで寝っ転がるために決まってる！」

背中合わせだった少女がゆっくりと隣に動くのが分かった。そして、笑うなよと前置きをして若者の月光のような肩に太陽のような髪をそつと触れさせた。

「そしたら、いつか宝石箱一杯に星を集めるんだ。そこでは、星はずつと輝きを失わず、私はそれをいつまでも眺めているんだ。飽きたらまた仕舞って、辛い事があつたらそつとそれを開く。それが私の名付けた星たちだったら最高だろ？」

「そうか、魔理沙。君は……」

少女は水を湛えた海ではなく、星の海に憧れたのだ。幽かな光を放つ過去の光芒。触れることが叶わぬからこそ、それを自分で作り出そうと躍起やっきになつて居るのだ。その願いが余りにも「彼女」そっくりだったから、若者は思わず吹き出してしまった。

「おい、香霖！ 笑うのは反則だろう！」

なら、尚更今これを彼女に伝えておかねばならないだろう。きつと長くなる。

「魔理沙、君の名前はね……『海の』っていう意味なんだよ」

碧の燐光の中で初めて視線が合った。薄闇の中の太陽は若者が話し終えるまで弾み、いつまでもその輝きを失うことはなかった。《了》



嘉島安次郎

夜霧廻りて

その門が意思を持って佇んでいるかのように見えたのは、たちこめた夜霧のせいばかりではなかった。世界の文明の大半を水の底へ引きずり込んだ再海進から安寧を求めて逃れるように、信州の戸隠高原に建設されたサナトリウムを、今日も夜霧が包んでいた。敷地の北側には戸隠山の鋸の尾根を臨み、朝日は飯縄山の脇をすり抜け、四阿山の彼方から登ってくる。斑に緑の萌ゆる裾花川の流域を照らしながら、後立山連峰を朱に染めて沈んでいく。人間の息遣いというものが全く聞こえてこないかのような場所に、国立戸隠高原特別療養所、敷地自体が信州特有の白樺林の中にあり、また建物自体が濃い緑で塗られている故、緑のサナトリウムはある。

ここに、この国では余り見ることのない金髪の少女が入院してから一週間ほどが経つ。大学の課外活動中に負傷し、そのショックで精神に変調をきたし妄想を口走ることが見受けられたため、当院での静養を期す、云々。

入院当初のマエリベリー・ハーンは、不満と期待が半々の表情をしていたが、直に好奇心を充足させるこのサナトリウムの諸々の虜になった。静養に専念するため外部との通信に制限が加えられる、携帯電話の電波の受信範囲以外であったり、あるいはパーソナルコンピュータの外部への通信が途絶されていたりはするものの、まず目の前にある何もかもが新鮮に見えて退屈することがなかった。検査と治療でのみしか入る機会のない、医療関係者以外立ち入りのできない区画の存在は、それが広い病院のどこに散在しているのかを探検しに行くことでとり



あえず一日を潰すことが出来た。

長期療養の患者が多いこの病院では、娯楽のプログラムも少なからず揃っていた。個室に備え付けのモニターは古今東西の映画を自由に見ることもできるし、あるいは演劇、オペラ、クラシックコンサート、演奏会、落語、歌舞伎、様々な芸能の視聴が出来た。無論、音楽も幅広いものが取り揃えられている。紙の本を集めた大きな図書館もあった。カラオケルームもあった。任意参加型の、日替わりの簡単な工作やゲーム会もあった。運動不足を配慮しての簡易なスポーツジムもあって、専属のトレーナーも配置されていた。

何より、この病院の大きな特徴は、それを巡るだけで何日も掛かりそうな、そしてどこを見てもぬかりなく手入れの行き届いた庭園であった。信州の山々を借景にした外庭、季節に応じた花が咲く西洋風の庭園。あるいは枯山水の、龍安寺の石庭を模した小さな、他の庭に比べればという意味で、玉砂利の海が広がる庭。現実の世界でこの病院のすべての庭を見ようと思えば、豪華なランチどころでなく、相応のディナーくらいかかるのではないかと思わせるほどである。庭園の一角に病院がある、主従が逆転しているのでは無いかと感じさせるほどに。

白玉の海に浮かぶ七つの石は、龍安寺の趣を汲んで、必ず一つが見えないような配置を組んでいた。ようやく苔の蒸してきた岩の頭を見続けて、半日は潰れた。

幾何学文様に区切られた花壇には初夏の、京都よりも一月遅いけれども、花が咲いていた。

マーガレット、マリーゴールド、町のほうで見る花もあれば、ライラックの花も見かけた。花壇の一部は夏に向けてヒマワリが、その後へのコスモスが植えられていた。

東西南北の外庭は、南側が玄関になっているのでそこは途切れているが、馬蹄形にひと続きになった回遊式庭園になっていた。淀みのない透き通った水が池を潤っていて、動きの鈍い真鯉が底に漂っていた。人影を見ると水面上がってとりあえず餌をねだるように口を大きく開けた。係員に告げればもらえるペレットを水面上にばら撒くと、ばちやばちと大きな音を立ててそれに群がった。庭の所々に、信州らしく、わさび田が景観の中に溶け込んで在った。ミズバショウの区画も在った。

メリーがサナトリウムのあちこちを探検し終えて、好奇心を充足させてようやく退屈を覚えたのが、一週間過ぎた頃であった。メリーはある違和感を抱いていた。この病院は、どこまでも手入れが行き届いていると。

病院内が整理整頓されているのは、理解の範疇である。少々潔癖の度が過ぎるようにも見えただが。

庭が、美しすぎるのである。外庭の周りに設けられている壁越しに見える戸隠高原の木々の雑然さ、あるいは、京都の古利に見られた空隙を見出すことが出来なかった。園路の端に頭を覗かせる雑草の一把までが何らかの意図を持ってそこに存在しているような、人間の秩序の徹底

した敷衍、透徹というものをメリーは感じた。

特別療養所は精神疾患「治療」のための施設である。少なくとも社会生活を営むにあたってはという観点で、科学技術の発達により身体や感覚器の欠損は最早さしたる障害とみなされなくなつたこの世界においても、未だに人間の精神というものは不可知に近い領域が多く残存していた。確かに種々の症状に対応する新薬の開発は進んでいた。それはブローム剤や座浴の時代はもとより、重篤な副作用のある薬を全く歴史の中へ追いやった。それでも、何故にその症状に変化が起るのかというところは、仮説の域を出なかつた。確かにある種の化学物質を人体に送り込むと、特定の症状は改善を見る。しかし、生きている人間の中でどのような反応が起っているか、脳という深遠な世界を調べることは、不可能であつたのだ。

そもそも、精神疾患は、疾患たるのか。日常生活を独力で送ることが困難である程度ならば、確かに治療の対象たりえよう。では、日常生活どころか、社会生活にすら支障のない程度であれば。軽微な妄想の類、確かに投薬によって解消されることの多いこの症状は。

メリーは不満であつた。私は確かに私の身に起こつたことを述べただけに過ぎなかつた。

メリーは孤独であつた。医師は私の体験を妄想だという。ここに蓮子はいない。

医師も、看護婦も、あるいは他の職員も、愛想は良かつた。ちよつとした世間話は出来た。

ただ、メリーが鳥船で体験したこと、あるいはそれ以前の不思議な体験は、否定されているわ

けではなかったが、あくまでも妄想として肯定されているのが伝わってくる反応をされた。

他の人間は。

入院して二日目に、図書館でメリーは唐突に話しかけられた。有名な電機メーカーが強力な電磁兵器の開発に加担していて、それが稼働することによって脳内に作用して思考が妨げられるという旨のことを、早口で一方的にまくし立てられ、あつげにとられて相槌さえ打てずにいると、向こうは言葉を発したということに満足したかのように何処かへ去っていった。廊下を歩いていると、庭が見えるように設けられた長椅子に、庭とは逆の白い壁の方を向いて座っている人がいた。ふと私を向いている。お嬢さん、ここでテレビを一緒に見ないかねと。長椅子に正座して穏やかに私に微笑んでくる老婆の前には、やはり白い壁しかない。ようやく、いえ、私はいいです、と少しこわばった顔で返すと、そうかい、気が向いたら何時でもおいでと返された。老婆は白い壁に正対し、たしかにそこに面白い番組が映っているかのように時折笑ったり首を縦に振っていた。私には画面は見えなかった。

不思議なこと、自分が体験した不思議なこと、そして、自分が信じていることが出来ない不思議なこと。メリーはようやく自分が一体どのようなように他者から見られているかを理解することが出来た。それは、性質としては一致しながら、決して互いを理解するものの出来ないものによって。

常人にとって理解し難いもの。二項対立のようにありながら、外部に置かれた者同士がそれを共通だと認識することは困難を伴う非対称性。

メリーはただそこに在るだけでしかなかった。蓮子の声も一週間聞いていない。このままだと、自分が自分ではなくなってしまうのではないか、そんな恐怖すら頭をよぎった。

「もうし」

石庭の前の廊下を歩いていると、若い男の、西の方の訛りの声が聞こえた。私に発せられたものであろうか。

「思い違いかもしれませんが、西京大の学生さんじゃなかったですか？」

私の周りにはそれと思しき人間はいない。

「いえ、自分もその人間なのですが、キャンパスでお見かけしたことがあるなあと。なかなか金髪の人というのはいないものですから」

「あなたも西京大の方なの？」

「ええ、経済の院のほうに。ああ、やがしま矢賀島といえます」

経済学部の院生だとすると、私には直接的な関わりはない。ただ、私は目立つ髪をしているので、同じ大学ならば外見だけは覚えられることもあるだろう。

「教育学部の、マエリベリー・ハーンです」

「マエリベリーはん？」

「いえ、マエリベリーが名前で、ハーンがファミリーネーム」

「なるほど、ハーンさん。小泉八雲、ラフカディオ・ハーンと一緒にですね。」

矢賀島と名乗ったその男は、この病院の患者にしては珍しく、だいたいジャージであったり、寝間着の類であったりが常であるが、きっちりとした服装をしていた。ページュの綿のパンツに水色のスプライトのカッターシャツ、紺のジャケットを羽織っていて、このまま白衣でも着せれば回診にやってくる医師の中に紛れ込んでもおかしくない感じだった。度が強い眼鏡を掛けているのが尚更その印象を増した。

一見、普通の青年に見える。会話も、今のところ普通に成り立つ。が、ここにスタッフでない立場でいるのだとすれば。

「まあ、ここでこうやって言葉を交わしているということはお互い様ですよ」

表情を読み取ったのか、矢賀島の方からそう声をかけてきた。

「それより、京都は変わりはないですか。こっちに來てからは新聞はともかく、それ以外に外部から情報の仕入れようもないから、地元のことでも知りようがない」

「ええ、特に変わりは。小さなお店の入れ替わりはともかく、街が大きく変わるようなことは何も」

「そうか、それは、良かった」

矢賀島は目を瞑って、久方ぶりにそれをしたかが分かるような安堵を見せた。

「私が、見落としていたこともあるかもしれませんが」

メリーはそう付け加えたが、矢賀島は気にしていないようであった。

「もうすぐ一年になるからねえ」

「一年、入院しているということですか」

「そう、もう一年だ。長かったような、あつという間だったような」

自分に言い聞かせるように言ったその言葉に何らかしらのやりきれなさが微かに在った。

「ハーンさん、君は外に出れそうなのかい」

「まだ、主治医は何も」

「そうかい、でも君なら大丈夫だ、多分そんな気がする」

「矢賀島さんも、大丈夫ですよ、見た感じ」

「まあ、そうかもしれないんだけどね。大体の人はそういうんだ」

寂しそうな笑みを浮かべて言う。

「薬で抑えられるはずの妄想が、未だに出るんだ。いや、自分はあれを妄想とは思えないし、だからこそ薬も効かないのだろうけど。自分が見たものに嘘をつけないのは、研究者の性だから」

らね」

メリーはなんと返して良いのかわからなかった。

「それよりハーンさん、もう少し京都のことを教えてくれないか。あと大学のことも」

そう言うと矢賀島は立ち上がってティーサーバーへ行行って、二人分のお茶を取ってきた。メリーは、大学の、あるいは日常の、些細な事を矢賀島に聞かせた。矢賀島は、穏やかな表情でそれに頷き返していた。

夜、目が覚めても、窓の外に星明かりを認めることが出来なかった。夜霧が建物を包んでいて、常夜灯で橙になった室内が反射して窓に映っているだけだった。個室のモニターは電源が夜になっても落ちるような前時代的なものではない。尤も、患者の症状に合わせて制御できるようだが、メリーに制限は加えられていなかった。電源をいれると、プログラム選択の画面がある。自分で選択するのが億劫になることも考慮されて、時間を決めて色々なものを流すチャンネルもあれば、サーバーにある番組をランダムで拾う機能もついていた。

リモコンのランダムセレクトのボタンを押す。数秒番組名が表示されて、その後に本編が流れる仕組みだ。メリーはしばらく番組の名前を見て、そしてモニタの電源を切り、布団を被った。



作られた美しい物は、この病院にはなんでもある。あくまでも秩序に則ったものは。秩序にない美しさは。それが理解できるものであるという保証は。

この病院の隅々に行き届いているのは理性であり、秩序だった。ただ、患者だけがそれぞれ独立して孤立していた。

メリーの目に入らないところで、二十四時間監視下の元、施錠された保護室で過ごす患者もいることは知っていた。症状が軽度で、自他に危害を及ぼす虞れがなければ、病院内は自由に往来することが出来た。動く人間だけが、意思はありながら、程度の差はあれど、秩序から逸脱したところに在った。

夢の世界だけが心休まる場所の気がして、メリーは早く眠れることを願って、目を瞑った。朝には、陽の光に照らされて、メリーは再び現実へ戻った。

起床の放送が、午前七時半。朝食が八時から八時半、食事は食堂でとるが、膳を部屋に持って帰って食べても構わない。九時に検温、投薬。その後、午前の自由時間。十二時に昼食、投薬あるものは詰所に集合してそれを受ける。その後昼の自由時間。十三時から十七時半までは浴場が開放される。浴場は天然温泉になっているのだという。確かに、身体が夜になっても冷えなかった。十八時、夕食。二十時に就寝前投薬。二十一時に部屋の照明が常夜灯に切り替わって、実質就寝の合図となる。これが一日の時間割であった。

病院の中には小さな売店もあって、嗜好品の類も入手することが出来た。食事制限を受けている患者もいないわけではないので、そういう患者に不適切な食品が渡らないように、病院独自の「カード」で決済を行う。制限のある患者が該当の品目を購入しようとする決済ができない仕様らしく、メリーの前に並んでいた初老の男性がジュースを買おうとして警告が出、店員に品物を除けられたのを見た。

この病院の特徴として、剃刀のような刃物と、長い紐状のものは患者は身の回りに置くことが出来ない。自他ともに危害を及ぼすのを防ぐためである。電子機器の充電ケーブルは短めのものがわざわざ貸与されるほどで、また、ズボンにベルトを通してある患者はいない。

矢賀島に二度目に会った時に、メリーが覚えた違和感の正体がわかった。きっちりした服装の中に、あるべきはずのベルトが見えない。

「矢賀島さん、ベルトがないと不便じゃないですか？」

「まあ、もう慣れたもんだね。服をズボンに入れなおすのも手間というものでもないし」

石庭の前の廊下の椅子で本を読んでいた矢賀島は、手は本を閉じようか思案したまま、メリーの声に顔を向けた。

「ハーンさん、でしたね」

「ええ」

「ここには慣れた？」

「なんとか。んー、でも、息苦しさはあります」

「それだったら大丈夫だ、ここに居心地の良さを感じるようじゃ先が思いやられる」

「これだけ娯楽に溢れていると墮落するという意味ですか？」

「まあ、当たらずといえども遠からずかな。この秩序に飼いならされてしまつては、生きているとはいえないよ」

そう言うとうやうやく矢賀島は本を閉じた。「ドイツ戦中期政治史概論」と書かれたハードカバーだった。

「難しそうな本を読まれているんですね」

「自分にとっては数式が踊る教科書を理解できる人間のほうが尊敬できるよ」

「あら、でも経済だと数学は問題ないのでは？」

「うちの学部だとそのはずなんだけど、恥ずかしい限りで、数学が、正確には曲線が絡むとはとんど歯が立たなくなつてね。だから、経済といつても、歴史の方をやっている」

「珍しいですね、経済で歴史。歴史といえば文学部の専売特許みたいなものかと」

「まあそれで概ね正しいのだけど、経済だと経済史、法学部には法制史や政治外交史、理工系にもそれぞれの分野の歴史があるし、農学部みたいに農業政治経済史という相当な方面の知識

を要求されるものもある」

「で、ドイツの歴史ですか」

「これは趣味みたいなものだけだね。色々面白いことも書いてある。何故にドイツは日本と同盟を組むに至ったか」

「教科書には、ソビエトや英仏米と共同で対抗するため、と書かれてあったような」

「答えはね、阿片なんだ」

「阿片？ 麻薬の？」

「そう、阿片を求めてドイツは日本と同盟を組んだ」

「えっ」

メリーは驚いた。それこそ妄想のたぐいではないのか。

「戦争を遂行するためには、鎮痛剤としてモルヒネがいる。モルヒネは、阿片から抽出され、では、その阿片を得るためのケシの産地がどこであったか。それが日本の権益が及ぶところにあった。日本としてはドイツの高性能の工作機械や技術が手に入れられる」

「でも、間にはソビエトがあつたはずでは？」

「確かに一見ソビエトは日本にとつてもドイツにとつても敵対していたかのように見える。しかし、実際は独ソ戦が開始される前まではシベリア鉄道を介しての輸送が可能だった。独ソ戦

開始後は、南回りの海路を使うしかなくて封鎖突破船、あるいは潜水艦。潜水艦であれば、少量でも効果の大きい物を運ぶこともできるしね」

筋は通っている。

「まあ、阿片だけの単一要因ではないけれども、一因ではある、と書いてあった」

にわかには信じがたいというメリーの表情に、矢賀島はこう続けた。

「国家の敵は他の国家ではない。他の国家を含めたその国家が直面するあらゆる状況の、存続の困難となるものが全て敵なんだ。再海進の時もそうだった」

教科書の歴史で習ったことがある。海面水位が現在の位置に、数十年の間たった5m上昇しただけで、日本も他の国も相当な困難に陥ってしまった。なにせ、海運が物流の基盤である以上、海港に近いところに、こと日本は栄えた都市が少なくなかった。それが、東京は下町を中心に壊滅、名古屋は機能を三河に移転せざるを得ず、大阪は正真正銘東洋のベニス。京都再遷も、その対応の一つであった。越後平野、仙台平野、筑後平野といった穀倉地域も水没、あるいは塩害に見舞われ食料生産も大きく後退せざるを得なかった。これは日本に限らず、世界の海洋に面した国家は程度の差こそあれ直面した問題であった。

食糧生産が極度に縮退する中で、各国は自国民の飢餓を避けるためのあらゆる努力を行おうとした。日本においては、国際的な食料価格の暴騰と飢餓輸出阻止のため、農産物の生産分配

は完全に国家統制におかれた。土地の接収も幅広く行われた。低層の住宅は取り壊され、高層住宅の団地に強制的に転換されるものが少なくなかった。発電施設も少なからず稼働停止に追いやられ、電力は生産優先で分配されることになった。享樂的な芸術芸能の類は、国家による規制の前に経済難で姿を消し、却って国家の保護を以って存続させるほどであった。

ありとあらゆるものが、国民の生存と国家の存続のために、個人の自由から切り離されて国家の統制の元へと組み込まれていった。今は、海面上昇が収まって、経済復興とともに自由が少しづつ戻ってきている時代だと、そう教わっている。

「困難の時代という意味で、先の大戦には学ぶことが多い。おそらく、今の我々が存在している世界に移植されたものもあるだろうから」

「なんだか、怖いことを言うのね」

「怖いと感じる感性を大事にした方がいい。妄言だと一笑に付すのが、正しい反応らしいようだから」

「矢賀島さんはこのせいで退院できないの？」

「どうなのか、僕にはわからない。僕は自分が正しいと思っていることを述べているにすぎない。それは世間一般から見れば、正しくないらしい。同じものに接しているはずなのに、出力されるものが違うからこそその疾患だとは言うのだけだ」

「私も、同じだわ」

「そうなのかい」

「秘封倶楽部ってご存じですか？」

「なんだいそりゃ」

「西京大の非公認サークル、同好会です。結界を暴くためには手段を選ばない、そんなサークルです」

「はあ、また面白いことをやるもんだねえ」

「私と宇佐見蓮子という子の二人でやってるサークルなんですが、活動の途中に怪我して、その経緯を話したらここに」

「となると、結界を暴いてしまったのかい」

「ええ」

「なるほど、なるほど」

矢賀島が見せたのは、否定の表情でもなく、それを妄想だとも捉えない表情だった。

「結界の向こう側は、どんな感じだった？」

「衛星トリフネの中でした」

「あの鳥船遺跡？」

「はい。中に、木々が生い茂って、おかしな生き物が」

「うーむ、うーむ、なるほど、なるほどなあ……」

「矢賀島さん？」

「そうか、トリフネの中に」

「あれは、間違いなくトリフネの中です」

「今までにない、矢賀島の表情が見れた。」

「君も見えてしまったのか」

ようやく仲間を見つけ出したという、メリーも、そうして彼のこれまでの一生も、すべてを肯定しようという、力強いものだった。

矢賀島はちよつと待っていてくれというと、しばらくして手帳を持って帰ってきた。

「これを見せてくれるか」

そこには詩のようなものが書かれてあった。

「我が名は」

いらっしやいませ

いらっしやいませ



トロヤ群の密林へ

地球にはないものをご用意いたしました

どうぞ心ゆくまでお楽しみください

このツノゼミはいかがでしょう

大変大きく育ちました

このモルフォチョウはどうか

誠に鮮やかな色合でございます

ウイングタイガーにございます

地球では絶対にお見かけすることが出来ません、自慢のものです

あつお嬢様方 どちらへ行かれました

またお越しくださいます。お待ちしております

いらっしやいませ

いらっしやいませ

トロヤ群の密林へ

地球にはないものをご用意いたしました

どうぞ心ゆくまでお楽しみください

右手をご覧ください 天鳥船神社です

宇宙航海安全がご利益です

左手をご覧ください 地球です

私はそこで生まれました

お嬢様方 初めてお目にかかります

我が名は

あつお嬢様方 どちらへ行かれました

またお越しくださいます お待ちしております

我が名は トリフネ

メリーが一読したのを確認して、矢賀島が問いかけた。

「君の、宇佐見さんでしたか、サークルが、秘封倶楽部、でしたか、そのもう一人の方は、

黒を基調とした服を着ているんだね？」

答えが肯定であること九割九分確信した疑問であった。メリーはたしかに首を縦に振った。

「僕も、別の視点からようだが、君たちが見たものを、君たちを含めて見ている」

メリーは、緑のサナトリウムに来て始めて安堵を覚えた。仲間が、いたのだ。

「あれは、トリフネそのものだったのかもしれないね」

「どういうことですか？」

「人型のぼんやりしたものが君たちの方に近づいていくのが見えたんだ。それに驚いて、君たちは転倒し、そのまま姿が見えなくなってしまった。人型のものも君たちが姿を消したのを確認してその場にとどまって、そのうち消えてしまった。あれは、トリフネそのもの、なんというか、意志疎通のために拵えたインターフェイスのようなものだったんじゃないかな」

「すごい……」

「んん、何が？」

「いえ、矢賀島さん、多分、私達より向こう側へ深く行けてるんじゃないんですか」

「僕としては結構困っていたんだよ。なにか意識したわけでもなく、見えてしまうんだ。研究室にいる時、バスに乗っている時、下宿でもそうだった。時折自分が別の世界にいることがあって、そこで自分はいろいろ見えるんだけど、傍から見るとぼうつとしてるように見えるら

しい。自分でも困っていたし、研究室の仲間や師匠も心配になって受診を勧めたんだ。大方根を詰め過ぎて勉強をしたから神経が参っているのだろうと。当初は自分もそう思っていた。ただ、いくら薬を飲んでもその世界が見えてしまっていたんだ。それ故に、ここにいる」

「私達をトリフネで見た時は？」

「すでにサナトリウムにいたよ。まさかこうやってお目にかかれるとは」

大きく息を吸って、上を向いてこうつぶやいた。

「人生は最後まで本当に何が起ころかわからないもんだねえ、とりあえずは生きてみるもんだ」

目をこすって矢賀島は言う。

「ハーンさん」

「はい」

「この病院の中に結界はあると思うかい」

「探してみます」

「僕も一緒に」

「是非」

次の日から、秘封倶楽部の臨時メンバーを加えての活動が始まった。この広い病院の何処か

に結界が開きそうな場所はないか。霊安室の近く。あるいは火葬場。無縁墓地の周囲。保護室に続く廊下。石庭に妙なところはないか。

メリーは、証人が現れたことで俄然活力に満ち溢れていた。自分の体験が嘘ではなかったことが証明できる。すぐにまた蓮子にも会えるだろうし、この矢賀島もきつと退院できることだろう。院生なのだからスタッフに昇格した暁には秘封倶楽部の顧問になって貰って正式に大学公認のサークルにしてもらおうのも手かもしれない。部室と部費がもらえるはずだ。

まさしく欲しかったおもちゃが手に入った子供のように、メリーは病院のありとあらゆることを丹念に、もつとも単なる散歩に見えるようにはカモフラージュし、探索した。

おやつを食べる時間にたどり着いた場所。東側の外庭にある築山に、小さな祠がある。善鬼大明神と立て看板に記されているだけの祠。

「ぜん、き、だいまようじん？」

「ああ、こちらへんでたまに祀られている神様だよ。なんでも、宴会のためのお膳を里の人に貸してくれる善い鬼がいたらしいのだけど、ある時借りたお膳の数を間違えて欠けたまま返してしまったところ、鬼は嘘をつくことが非常に嫌いだったようで、二度と里の人にお膳を貸す事はしなかったらしい。それを愚んで里の人がその鬼を祀るようになったのだという。善いではなくお膳の膳の字を以って祀っているとこもあるそうだが、ということらしい」

「流石歴史専攻だけありますね」

「全く専攻の範囲外だが、暇だからここにいろちに覚えてただけだよ」

メリーは矢賀島の説明をそこはかたなく聞きながら忙しなく祠の周りをうろついていた。

「矢賀島さん」

「なんだい」

「夕方に」

「結界かい」

「ええ、開きそうです。四時三〇分にもう一度ここに集合で」

「用意するものは？」

「勇氣と好奇心、物事を否定しない素直さ」

「わかった、それでは後ほど」

この調子だと、もうお風呂に今日は入れないだろうけど、そんなことはどうでも良かった。自室に帰ってお茶を飲んだ。別に一旦解散する必要もなかった気がする。精々、水分補給をして、動きやすい靴に履き替えるくらいなものだ。

夕焼けが空を覆い始めた頃に、メリーがまず祠に着いた。殆ど変わらずに矢賀島もやってき

た。

「なにか特別な呪文を唱えたりするのかい」

「いえ、時間が来れば結界が開くので、その時に私と一緒にくぐってもらえば」

「ふむ」

祠の前に二人して並んで黙って立った。はたから見ればお参りをしているようにも見えるし、たとえそれが長時間に渡ったとしても、特に妙に思われない空間である。

「もうすぐです」

メリーは慣れたものだが、矢賀島は少々緊張しているようで、上手く返事が出なかった。

「五秒前、四、三、二、一！」

一瞬二人が光に包まれた。

あたりの風景が切り替わったのに二人が気づくのに時間はかからなかった。

「結界の向こう側なんだね、ここが」

先に言葉を発したのは矢賀島だった。

「間違いないかと」

メリーは返す。矢賀島は靴で足元の地面を掘り起こしたり、自分の拳を突き合わしたりして、たしかにこの世界に自分が存在していることを確かめようとしていた。

「矢賀島さん、あれ」

メリーが小声で注意を促し、指差した先に、空に浮かぶ光の、鮮やかな色の筋が見えた。それは時折なんらかの意匠を組んだかのような形を描いていた。

「あの光をまた見ることが出来たのか」

「過去にも？」

「何度も見たんだ。ハーンさんも、今見えているんだね？」

「はい、私にも、確かに」

「嘘じゃないんだね」

「嘘じゃありません、真実なんです」

そう言うと、メリーの目に涙が浮かんで、急に堪え切れなくなってその場に座り込んで大声を上げて泣き出した。矢賀島は頑なに上を向いていた。弾幕は、お構いなしに遠くで飛び交って、それが途切れると二つの人影が飛び去っていった。

メリーが泣き止んで、ようやく、まだ少し涙声のまま、矢賀島に声をかけた。

「私達の体験は嘘じゃない。これで、私も、矢賀島さんも、退院できますね」

何故か矢賀島の顔が引きつった。メリーはそれがなぜか理解できなかつた。

「ハーンさん」



矢賀島は、なぜかこわばった顔でメリーに、自分を静めるかのように話し始めた。

「私の言うことをよく聞いてほしい」

「はい」

「どちらかが嘘つきにならなければ、駄目だ」

「なんでですか」

思わずメリーは声を上げた。矢賀島の表情になぜか悔しさが混じったのを見た。

「シヨッキングかもしれないことを、今から話すから落ち着いて聞いてほしい」

「はい」

「君は、なんであのサナトリウムがあんなに整った設備になっている理由を知っているか」

確かにサナトリウムは月に数日のバイトで済むような大学の寮費と同程度を入院費でとられる割には、その一〇倍どころか三〇倍ほどの家賃を払ってもいられるかどうかかわからないほどに整った設備を持っている。

「快適に過ごして、治療の効果を上げるためじゃ、無いんですか？」

「それだと可の評価だね」

「優は一体」

深呼吸して矢賀島は続けた。

「どうか落ち着いて聞いてほしい。あのサナトリウムは、治療の効果を望めない患者を安楽死させる機能も併せ持っている」

「そんな……！」

「我々の国は、未だ危機の中にある。物質的充足の整っていないうちに、無限の精神的充足をこなせるわけがない。それ故、我が国は新しい何かを創ることを統制的に劣後させて、国民を養ってきた。国民の思考は徹底的に画一的になったし、娯楽は、あるいは社会的思想は昔のもの焼き直して満足させるまでは成功した。ただ、どうしても、その秩序からはみ出してしまっているものがある。故意に、確信的にやれば当然政治犯だ。じゃあ、意図せず、どうしても秩序の外にはみ出してしまおう者は」

「それが私達だというのですか」

「この国の解釈では、そうなってしまふのだ。可能性は、限られた資源を食い潰すリスクも孕んでいる。自由は、そういうものなのだ。無限の自由は、結局のところ失敗を許せるだけの豊かさが同居していなければ成り立たない。歴史は、それを知るための学問だ」

メリーは口を一文字に結んで黙って聞いているしかなかった。

「人間というもののあり方を、ある程度のパターンの中に収めることができれば、ある程度の自由は許されているように見せかけることもできる。白紙に線を引くことではなく、複数の

選択肢から選ぶということで自由を演出する。白紙に線を引こうとするものは、紙の無駄遣いだから、消えてもらうしかない。まだ、残念ながら、我が国はそこにあるのだ」

メリーは言葉を挟めない。矢賀島の演説が続く。

「歴史が繰り返しているだけなんだ。」と作戦というものがドイツ史の中にある。ナチスドイツ下での優生学思想に基づいた安楽死政策だ。非常時において、それが繰り返されている、しかも、最善の努力はしましたという見せかけまで伴って。あの過剰なまでの設備は、壮大な言い訳なんだ。死を迎えるまでの幾ばくかは、確かに人間としての尊厳を全うさせてやりましたよという」

「私には、何も出来ないのですか」

メリーはようやく言葉を発した。

「生き延びてくれ、嘘をついてでも」

「矢賀島さんは」

「私は正しさに殉ずる。私は嘘をくことは出来ない。そして、然るべき時間が経ったら、私の正しさを糾弾してほしい」

「そんな！ 矢賀島さんも退院しましょうよ！」

「ちょっと時間が足りなかったんだ、もうすでに私の死は予定に組み込まれているんだ。入院

後一年の大規模な検査というのが実質その合図なんでね。治るも何も、もう治らないと判断されてしまっているんだよ」

「ここまで来たのに、なんで、なんで！」

「時代に、大きな構造に逆らうというのは、なかなか一人だと難しいもんなんだ。特に、この病気は、正常でないとされながら、それぞれが違う。どうしようもない孤独の中なんだ」

「でも、私達はここにいるじゃないですか」

「そうなんだ、可能性が開いたんだ。僕だって全く考えてはいやしなかったんだ、奇跡なんだよ、偶然の。だからこそ、可能性を潰しちゃならない。この世界があるということを知っている人間を、未来へ送らなくちゃならない。君が行け。必ず行け。君の体験が確かだったと証明できる人間がもう一人いた事を忘れずに」

もう一度メリーの顔が涙で溢れようとしていた。

「約束してくれ」

矢賀島の手がメリーの小さな手を握った。

メリーは泣きじゃくりながら、たしかにその手を握り返した。

「これで、安心できる」

あたりの景色が、サナトリウムの中の小さな祠に戻っていた。日が山の彼方に落ちていた。

矢賀島の死は、少し不思議なものだった。確かに日時はプログラムされたものであったが、服がずぶ濡れになって石庭に倒れて事切れていたのである。

メリーはある可能性に気づいた。死に方を選ぼうとしたのではないかと。まだ朝晩肌寒さのあるこの地で濡れた衣服を着用して屋外で眠りに入ればそのまま凍死する可能性がある。彼の、最後にできる秩序への抵抗ではなかったのかと。

メリーは、生きろという以外に、もう一つの約束を交わした。退院したら、宇佐見さんともう一度トリフネに行けと。おそらく、あの宇宙ステーションは自我を持っている、宇宙の只中に、孤独なまま。まだ発達が幼かったから、上手くコミュニケーションに至らなかったのだから、もう少し時間を置いてから行けば、なにか進展があるかもしれない。彼も私達と一緒に、寂しいだろうから。

メリーは夜霧のかかってない窓の外に広がる天の川を見上げながら、その中に仲間を探した。マエリベリー・ハーンが、地底世界に行き無事退院する数週間前の話である。(了)



ばつ

沈黙

「神さま、今日も一日よろしくお願いします」

そのあどけない少女は、その日も朝早くから守矢神社を訪れてパンっパンっとなと柏手を打っていた。太陽がまだ昇るか昇らないくらいの肌寒い時間にも関わらず、山を登った先にある守矢神社に参拝するのが彼女の日課である。

朝のおおよそ決まった時間に神社にやってくるものだからそこに住む守矢の巫女、東風谷早苗はその少女の柏手の音で目を覚ますのが常にまだまなっていた。そして起床した早苗は身支度を整えてからその少女に朝の挨拶しに行く。慌てる必要はなかった。少女はいつも長いこと境内で祈りを捧げている。

「あつ、早苗さま、おはようございます」

「ええ、おはよう、今日も早いのね？」

早苗の顔を見て元氣よく朝の挨拶を叫ぶ少女に、早苗も微睡みを抑えつつ返事をした。それから少女はまたお祈りを再開する。

彼女の行っているのは拝むというより祈りと呼んだ方が適切であった。指を組んで瞑想をするように目を瞑る。彼女の姿はまるで基督教徒のそれである。彼女は守矢神社に一体どのようなものが祀られているのかよく分かっていないようだった。だが早苗はこの少女信者のことをとても好んでいた。こんな朝早くに、それも毎日山の上の神社に通ってくれているだけでも巫



女としては嬉しい。そして彼女はお昼に神社にやってくる信者たちより真摯さを持っていた。

少女は早苗の知る限り、守矢神社の信者の中で一番敬虔な者であったのだ。いや、早苗はこの少女ほど神に従順な信徒を幻想郷の中でも外の世界にも見たことがなかった。

早苗は一度「いつも神さまに何をお願いしてるんです？」と少女に聞いてみたことがある。守矢は信者のお願いを聞いてくれるような神社ではない。少女が何か叶えたいことがあつて信仰心を深めているとしたら少し気の毒だと早苗は思ったのだ。だが、その問いに対する答えはこういうものであった。

「神さまには何もお願いしません。だって、とうさまが神さまを信じてればきっといつか幸せになれるって、いつもいつてるんです！ だからこうやってお祈りしてるだけでいいんです」  
彼女は無垢なのだ。神に見返りを要求しない。ただひたすらに神に祈っていた。早苗は作法無茶苦茶なままに神に深く、どこまでも祈り続けるその少女を、数多の信者の中でもとりわけ大切な存在のように思っていた。

ただ最近、早苗には少女について気になっていたことがある。この少女の父親は彼女に負けないくらい信心深い男であった。いつも少女はその父親と一緒に参拝にきていたのだが、それが一週間ほど前から神社にやってくるのは一人になっていた。最初はたまたまかと思った。彼女の父親は雇われ仕事をしているそうなので、これまでも仕事の都合で神社に来るのは少女だ

けということのままあった。だが、次の日もその次の日も、そして今日も神社に来たのは少女だけだったのだ。そして今日で7日目である。何かあったと考えるのが自然なことだろう。

「ところでお父様は最近いらっしゃらないようだけど、どうかしたの？」

早苗が何ともなし少女に父親のことを尋ねると、

「とうさまは今風邪ひいてるんだ。それでお参りにこれないんです。ごめんさい。だから私はとうさまの分もお祈りしてるんです」

「あら、風邪ですか」

少女に聞くとところによると彼女の父親はもう何日も寝込んでいるらしい。確かに最近悪い風邪が流行っているという話もチラと聞いたことがある。

「あ、そうだ、早苗さま。もしよかったら、とうさまにお見舞いにきてくれませんか？」

「え、お見舞い？」

早苗は少女の突然のお願いに戸惑ってしまった。そして即答することを避けた。

実をいうと早苗はその父親のことはこの少女ほどには好いていないのだ。確かに父親も神社に足繁く通ってくれる熱心な信者ではあった。だが早苗にとって父親の面持ちはどこか卑しいものに思えてならなかった。思い出されるその形相は、十以上も年下の早苗に対して媚びるような、阿るような態度。それは現人神としての早苗ではなく、一人の若い娘に対する嫌らしい

態度。もっと直截的なことを言えば少女の父親は時たま早苗の胸元を凝視することもあったように思える。早苗も自身が異性から視線を注がれる対象であることに気づいていないわけではない。だが熱心な信仰を謳いながらの卑しい劣情。そして何よりこの少女の汚れのなさとの差異が、少女の父親に対して早苗にわずかながらの生理的嫌悪感をもたせていた。

「ねえお願いします。早苗さまが来てくれたら、とうさますますに元気になると思うから」

それとなく遠慮したいという顔をしている早苗に、少女はまだおねだりを続けていた。「この子も私相手に中々に凶々しいな」と早苗は苦笑する。彼女が信仰している相手はやはり自分ではないのだらうと早苗は思った。自分の全てを捧げる祈りを毎日欠かさず、尚見返りを求めない少女がこんなにもお願いをしているのだ。少女にとって自分は年上のお姉さんといったところか。

早苗もここまでこの愛らしい少女に食いつかれては断ることはできない。父親も早苗に対して直接嫌がらせをしてくるというわけではないのだ。むしろ熱心な信者を見舞うという意味では自分の責務にすら思えた。

「そうね、じゃあお父様のお見舞いに行かせてもらいましょうか」

「やったー、早苗さまが家にきたらとうさま喜びますよ」

というわけでトントン拍子に早苗は少女の父親の家を見舞うこととなった。

「おかえり、とうさま」

「おう、おかえり……え？」

自分の娘が家に帰ってきたと思つたら、後ろから守矢神社の現人神、東風谷早苗と一緒に家に入ってきたときの父親の驚き方は如何ほどであつただろうか。

「ややや、こ、これは早苗さま。ど、どうしてこんなところに……？」

「……いえ、お父様がお病氣だとこの子から聞きましたので、お見舞いにと思ひまして」

「そ、そんな。あつしみたいなのにもつたいねえ……」

家の奥の部屋で布団に包まっていた少女の父親は早苗の顔を見て立ち上がって挨拶をしようとしたが、足がふらつきそのままドスンと布団に倒れ込んでしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

「おっとと……な、情けない足腰ですみません。一週間寝込んだだけでこのザマなんですよ」

父親は早苗の介助を受けながら再び布団に潜り込んだ。

「た、大した病氣じゃありませんよ。こ、これくらいすぐに治ります」

父親は小さい声でそっくりつ早苗に向かって卑屈な笑い顔をみせる。歪んだ口元に、早苗の機嫌を伺うようなその顔は、確かに早苗が好まぬ笑みであつた。

しかし父親は早苗に続けてこう言う。

「何しろあつしには神さまがついてますから」

父親は部屋の住みにある神棚を指差した。早苗がそちらをみるとそこには得体の知れない訳の分からない神棚が飾ってあった。得体の知れないというのはその神棚の様式が、娘のお祈りの仕方と同じく極めて乱雑なものだったからだ。一応神道系のものなのだろうが、見る人が見れば怒りそうな散らかり具合である。

しかし散らかり具合というのは様式の話であって、神棚の手入れは完璧になされていた。早苗が近づいて見てみても、神棚には埃一つ落ちていない。神酒と柏も毎日取り替えているようだ。日頃から丁寧に掃除をしているのだろう。神棚の様子をみるだけでもこの父親の信仰心は本物だと分かる。

「信仰心が厚いのですね……」

早苗が振り向いて、ぼつりと呟くように父親に言う。

「そ、そんなことはないです。あ、あつしみたいなのはこれくらいでもしないと神さまに申し訳が立たないっていうか……」

早苗に褒められているにも関わらず父親は娘の前でオドオドとした様子である。早苗の前だからというわけではなく、これがこの男の性分であるようだった。もしかしたら自分が胸元を見られていると錯覚したのはこの父親が単に人と目を合わせることでできず視線を下に逸らし

てしまうからなのではと早苗は思った。考えてみれば毎日参拝にきてくれるこの熱心な信者の男ときちんと話したことは数える程もない。早苗はそんな自分を恥じるしかなかった。

「む、昔から神さまにお祈りは続けてるんです……あつしも親父から神さまは大切にしろって。神さまを信じてればきつといつか良い事があるって、言われて、育ったから……」

「そうだよ、神さまはいつも私たちを見てくれるんだから。とうさまも早く元気になって一緒に祈りに行かないと、神さま怒っちゃうよ」

「あ、ああ、そうだな……ははっ」

そういつて父娘は二人そろって笑った。

それから早苗は正座したまま静かに二人の会話を聞いていた。父と娘の口から出てくるのはおおそが神への感謝と神の有り難みであった。それは明らかに守矢の神を指しているのではなかったけれど、それでも早苗はただ黙ってその話を聞いていた。神さまがどれだけ偉大な存在か。そして神に祈りを捧げることがどれほど大切なことなのか。それは守矢神社の巫女に話すようなことではなかったのかもしれない。しかしその熱の籠った信仰心に早苗は耳を傾けざるを得なかった。宗派は違ふけれどこの親子が疑いようもない、真の信仰者であることを確信する。

そうしている内に、いつの間にかやう良い時間になっていた。

「すみません、そろそろお暇させて頂きますね」

早苗は名残惜しそうに父親に言う。

「あ、も、申し訳ねえ、早苗さま。お、お時間とらせてしまいました」

「いえいえ、本当はもつとお父様のお話聞かせて頂きたかったですけど流石に帰らないと私が叱られてしまいますから」

「そ、そうですね」

早苗は父親に一つ頭を下げると、立ち上がって玄関へと向かう。

「じゃあね、早苗さま。また明日もお祈りに行きます！」

彼女後ろからついてきた少女は元気に手を降って早苗に別れを告げる。

「……ええ、じゃあさようなら。……お父様もお大事に言っといてね……」

父娘の家をでた早苗は足早に歩を進めました。彼女の眉間には皺が寄り、何かを畏れているようにも見える。大して動いてもいないのに息も荒くなっている。

「そんな……なんで……」

早苗はギリと歯ぎしりをしながら独り言ちた。早苗が来訪前に父親に持っていた偏見はもうなくなっていた。守矢のそれに限らず、あれほど心から神に祈れる者が他にいるだろうか？ 早苗の知る限りあの二人は幻想郷で最も神に心も身体も捧げている父娘である。

早苗はしばらく行つたところで早足だった歩を止めた。彼女の脳裏に思い出されていたのは先ほど見たばかりの父親の様子。

血色を失い白くなつた顔。肉が削げ落ち痩せ細つた身体。震えが止まらなくなつた手足。彼女の父親の罹つていた病。あれは風邪などではない。

それは素人の早苗ですら分かる、明らかな死病であつた。

もう長くはなからう。

もつて二、三ヶ月というところだろうか。

☆

☆

☆

「ねえ霊夢さん、神さまつていると思いませんか？」

神社にやってきた友人に唐突にそう尋ねられたときの霊夢の最初の反応は鈍かつた。退屈そうな顔をまるで変化させることなく、三白眼の視線だけを早苗に向ける。まったく興味なさそうにも見えるが、どんな話を持ちかけられようが霊夢はこれと大同小異の反応しか見せない



ことを早苗は知っている。とはいえ流石に今回の質問はピントがズレていた。

「あなた……この私に『神さまはいますか?』って、なんて質問よ。神さまがいるかって、貴女のとこの神さまや、大体貴女自身だって現人神とか言っただけでなかった?」

霊夢にそう言われて、早苗はすぐに自分が間抜けな質問をしてしまったことに気づいた。この幻想郷にはそれこそ八百万の神々が住んでいる。そして何よりいやしくも早苗自身もその神々の末席を汚す存在である。そんな自分が神の存在を問うのは余りに馬鹿馬鹿しい。

「あつ、やつ、すみません」

「何よいきなり変なこと聞いてきて」

「やつ……だから」

早苗はまとまらない思考のままに言葉を懸命に繋げようとする。霊夢もどもる早苗の次の言葉を黙って待っていた。

「私は確かに神さまと呼ばれる存在です。私の持つ力は本当に微々たるものですが、それでもそんな私を信者の方々は神さまだと慕って、私を祀って下さります。私にお願い事をする方がいらっしやれば、私はそれに応えられる範囲で応えることができます。だけど……」

早苗はそこで言葉を一拍詰まらせる。

「だけど、私のできることなんて極極小さいことだけです。それに……どんな神さまだってで

きることに限界があります。それでも人は神に必死で縋りつきます。孤独や絶望からの救済を求めて一途に祈りを私たち神さまに向けてきます。わ、私たちができることなんてごく限られたことだけなのに。むしろできないことの方が多くくらいです。で、でも……それじゃあなんで人は神に祈るのでしょうか？　たくさん苦しみや禍を除いてくれるように人は神に祈ります。それが無為に終わるかもしれないのに……」

早苗は真剣な眼差しを霊夢に向けながら言葉を続ける。

「それとも彼らが祈っているのは私たちみたいなカミではなくて、もっと……それこそ全知全能みたいな神さまなんですか？　もし私にも見えないような、途轍もない力を持った神さまがいるとしたら、なぜその神さまは人々の想いに応えてくれないのでしょうか……？」

早苗の言葉はやや感情的であったものの、表面上は淡々としていた。しかしそれは霊夢が友人の中にある切迫した感情を汲み取るには十分なものであった。思春期の少女が持つような単なる哲学的思惟ではない。その裏にあるのは間もなく父親を失わんとしているかの神の信奉者の少女の存在である。

その少女の存在は知らぬ霊夢であるが、早苗の問いかけに対して数秒程の間に色々なことを考えて、最後に「うん」と一つ唸った。

「少なくとも幻想郷には全知全能なんて、口だけの奴でもないわね。どれだけ力が強くても

みんなそれぞれに限界をもっている」

千年後の未来を観る神、神代から生きる神、悍ましき破壊を齎す神。幻想郷に数多く存在する神々の上澄みともなればそれは文字通り神話の世界の住人である。だが、それでもなお各々全知全能とはほど遠い。それらは全て早苗に見える範囲の神々である。ということも少女が祈っている神ではないのだ。

「本の中にならたまに見るわ、全知全能を謳う神はね。外国に行けばそういうのは多いと思う。でも、そいつが本当に万能なのかは私には分からない。それに、これは私の考えだけど、やっぱり全知全能なんて存在するとは到底思えないわ。万が一、そんな存在がいたとしても……そいつは人の祈りを易々と聞いてくれるようなお優しい存在ではないのでしょうか？ むしろ沢山の厄災を人間に与えてくる。貴女のところの神社だって似たようなものじゃない？」

霊夢の言う通りである。他ならぬ守矢神社が祀っている神こそが人を救う神とは程遠い、崇りと災いを司る存在である。

「それでも……」

霊夢はしっかりと早苗の目を見て言う。

「それでも人は神に祈らずにはいられない。たとえ何の益も得られなくても人は神を信じ、そしてそこに命を投げ出す。数多の祈りが空の中に消えようが、それでも人は神に祈ってしまう。」

そんな人を私は今まで沢山みてきたわ」

「……そんなのって残酷すぎませんか？」

早苗には耐えられなかった。あの父娘の祈りの先が空虚なんてことに。もし仮に早苗にすら姿を見ることができない超越的な神なんてものがあるとしたら、なぜそれは彼らを救わないのか。彼女は守矢神社の巫女でありながら、深くそう思わずにはいられなかった。

☆

☆

☆

博麗神社で早苗と霊夢がそんな会話をしてから更に数週間が経った。医者もとうの昔に少女の父親の延命を諦めていた。もって一週間というのが医者の話であった。既に父親が死んだ後の少女の処遇までもが決まっていた。

父親は今も少女の家にいない。病に伴う激痛を少しでも和らげるために今は医者の方に泊らせてもらっている。誰も口にすることはなかったが、それは紛れもない終末医療であった。

「お邪魔します」

父親が家を出て以来、早苗は一足先にひとりぼっちになってしまった少女の様子を見によく彼女の家にやってきていた。まだ幼い少女である自分が会いに行くことで少しでも彼女の心が和らげば良いという考えであった。

「早苗さま……おはようございます」

しかし少女の挨拶も露骨に元気がなくなってしまうていた。少女の顔には頬骨が浮いており、食事もロクに摂れていないことが伺えてしまう。

日に日に身体を壊していく父親を一番近くで見なければならなかったのはこの少女である。少女ももう父親が助からないことは頭の中では理解しているだろう。彼女に降り掛かる精神的な苦しさは早苗に想像することすらできない。

「今日も……お祈りしてるんですね」

早苗が少女の家に入ったとき、少女はまた神棚に向かってお祈りをしていた。

「はい。私にできることなんて、神さまにお願いすることくらいしかできませんから……」  
少女は父親の病が進行していく中でも神に祈りを捧げることがはけして止めなかった。だが早苗が眺める少女の祈りの顔は前とはまるで違っている。以前から彼女の祈りは自身の心の真ん中を捧げるような真剣な祈りではあった。だが、今の彼女のそれはもっと具体的な感情が籠っている。彼女は神に対して祈願していたのだ。何を祈願していたのか。考えるまでもなく父親

の快癒であろう。

早苗は健気に神に祈りを捧げる少女に胸がぎゅうと締め付けられるような気分を覚えてしまふ。

早苗は正座をして両手を揃える少女の横にしずしずと腰を下し、少女と同じように神棚に向かつて頭を下げた。

早苗が自分と同じように神に祈り始めるのを見た少女は目を丸くして驚いた。

「早苗さまも祈ってくれるんですか？」

「ええ、私もお父様のために神さまにお願いたくなつたから」

「ふふ、早苗さまが神さまにお祈りするっておかしいじゃないですか。早苗さまも神さまなのに。神さまが神さまにお祈りするって変なの」

久々に少女は屈託のない笑顔を見せる。

「でも、早苗さままでお祈りしてくれるならきっと効果は抜群だね。きっととうさまもすぐ家に帰ってきてくれるよね？」

彼女は未だに神の力も未だ信じているのだ。神さまにお祈りを捧げれば、きっと神さまが不治の病にかかつて父親を助けてくれると。だからこそどれだけ辛くとも。いやむしろ辛いときだからこそ彼女は神に祈っている。

「……うん、そうね」

どこまでも純粹な信仰心に早苗に軽く相槌を打つことくらいしかできなかった。

そして早苗は少女の祈り方を見よう見まねで真似しつつ、神棚に向かって少女の父親の回復を祈った。

（この子のお父様を助けて下さい。お願いします）

早苗は心の中で強く、強くそう願った。だが……その後には続く言葉は早苗には見つからなかった。少女のいう神さまとは何者なのか分からなくなってしまったからだ。

思えば幼き頃から余人には見ることにすらできない神妖と交流してきた早苗にとって、存在すら定かでない神に頭を下げるのは初めての経験であった。早苗にとって神さまとは姿を持ち、言葉をもつ存在である。少女が祈っているような観念的な神に祈るなんてしたことがない。

何も見えない神に向かって祈りを捧げる。それは早苗の心に名状しがたい虚しさを覚えさせた。

（私は今一体何に祈っているんでしょうか？ 幻想郷に住むどんな神さまでもない。もつと別の何かなのでしょうか？）

早苗の頭に疑問が浮かんできてしまう。今まで早苗は信仰あるところに神は生まれると考えていた。だがこの現実は一体なんだろう。自分はともかくこの少女は生まれて以来ずっとこの

神棚に祈りを捧げていたのだ。いや、少女だけでない。この少女の父親や、その更に親の代から一日も欠かさずにだ。その結果は一体どうだっただろうか。父親は若くして病に倒れ、少女は天涯孤独の身となる。本当にそこに神はいるのだろうか。

早苗は今自分が頭を下げているのが神棚ではなく、単なる木造のガラクタのようにすら思えてきてしまった。早苗の信仰する信仰とはこういうものではなかったはずだ。自分や、守矢の神のように、例えばそれが人間の望む形でなかるうとも何かしらの応えを人に与えなければ、人の祈りはただ無為なものに過ぎない。こんなガラクタに頭を下げているのなら、幻想郷に住む医療の神や病の神を頼れば良い。彼らは姿を見ることができ会話すら可能な存在だ。無論、彼らにも既に父親の病を治せないことは早苗も知っている。しかしそれでもこんなことをしているよりは幾許かマシであろうと思ってしまう。

早苗の思考は少女の不幸に支配されていた。思わず目頭が熱くなる程に。それは冷静な思考ではなかったのかもしれない。だが早苗はそれでも怒らずにはいられなかった。少女の祈っている神に憤るしかなかった。……そんな神なんて者が本当にいければの話ではあるが。

そんな早苗の隣りで「ぐす、ぐす」と鼻を吸る音が聞こえてくる。早苗が横を見ると、少女が祈りを捧げながら瞳から大粒の涙を零していた。

「ねえ、早苗さま。とうさまの言ってることって本当なのかな？」



少女は目を赤くしながら早苗に言う。

「わたしはこうやって毎日神さまにお祈りしてるの。いつだって……神さまから命をもらってから、私の心の中にはいつだって神さまがいた。なのに……なんで……神さまは私に何も言ってくれないの？」

それでも今まで気丈に振る舞ってきた少女も限界がきていたようだった。自分と一緒に祈ってくれる早苗を前にしてついに少女の感情がついに決壊を始める。

「わ、私、とうさまが死ぬなんてイヤだよ。と、とうさまが死んだら、わ、私……ひとりぼっちになっちゃう。だ、だから……私、なんどもなんども神さまにお願してるの『とうさまを助けて』って、だ、だけど神さまは黙ってばかり。ねえ、どうしたなの、早苗さま？ な、なんで神さまは私がこんなに辛いときに何か言ってくれないの？ 教えてよ……」

祈りは確かに人の心に希望を与え、時に神の加護を授けてくれる。だが、今の彼女の祈りというのは果たして誰が聞いてくれるものだろう。誰がこの哀れな少女の祈りに耳を傾けてくれない。

今まで何の見返りも求めずにただひたすらに天に頭を下げ続けた少女が、はじめて神に願いを請うている。

『父親を助けてほしい』

唯一の肉親が病に苦しんでいる。そして父親が死んだときの彼女に襲いかかるであろう絶望と孤独。そんな不安を奪ってくれと祈る少女の声を聞いて、なぜ少女が祈りを捧げる神とやらは何も彼女に声をかけてくれないのか。

いや父親を救ってくれなくてもいい。少女の信じる神というものが人間の願いなど聞き届けてくれない存在というのならば、それはそれで良い。神は人を救うものではない。神はただ見守るのみ。神は自ら助くものを助る。それが早苗にすら見えぬ超越的な神だと言うのなら彼女も何も言うまい。

しかしただ、この少女に何か一言を与えてほしかった。少女の信じる神が、少女に試練を与える神が、何か一言でも言葉をかけてくれるだけで少女の心がどれほど救われるだろうか。

少女の祈りは届いていたことを少女に教えてほしかった。

だが少女がいくら祈ったところで神は彼女に何も言うことはなかった。

神は沈黙したまま、数ヶ月後に少女の父親は病に逝った。

☆

☆

☆

「ここでの暮らしはどう？ もう慣れた？」

少女は父親を亡くしたあとは近所の寺にいられた。幻想郷は土地柄、親を持たない子ども数も多く孤児院代わりになっている寺の数も多かった。そのお寺の一つが彼女の新しい家になっている。

「はい、住職さまも優しいですし、友達もたくさんできました」

そういって少女は早苗に白い歯を見せた。早苗はそんな少女の頭を優しく撫でてやった。

父親が死んだあと少女は人並みに泣いたがそれだけであった。少なくとも見かけの上では父親の死を受け入れているようであった。もちろん心の中では天涯孤独となってしまうた不安と震えは残っているだろう。早苗は時間をみつけてはお寺の少女に会いに行き、努めて明るく接していた。

少女はもうあれほど熱心であった信仰を放棄してしまったようであった。父親を助けてくれなかった神への怒り。祈りの無意味さ。そういうものが彼女から信仰を奪ってしまったのだと早苗は考えていた。少女は守矢神社に祈りに来ることはなくなった。早苗に会いに行くことはあっても、けして神さまに向かって祈ることはなかった。あの神棚があった家も既に立て壊されてしまっている。

お寺での生活上仏様にお祈りをする修行もあり一応少女も真面目にやっているフリをしていたが、それはどこか気が抜けていた。真剣ではない。ただポーズをとっているだけだ。住職もそれに気づいてはいるが既に注意することを諦めてしまっているようである。

「それでは早苗さま、私も言いつけががありますので。また住職さまからお時間を頂いたら会いに行きますね」

そういつて少女は早苗の許を去っていった。

一見元気を取り戻したかのように見える少女の後ろ姿が、早苗には酷く虚ろなもののように見えた。寄るべき肉親と信仰を失った少女はどこか生の輪郭が失われてしまっていたのだ。

事実、その少女は結局長生きすることはなかった。父親を失ってから5年後、父親とは別の病に罹り、成人を待たずして死んだ。信仰を生き甲斐とし、神へ一生を捧げた少女の今際の際にも彼女が祈り続けた神は決して言葉を沈黙を保ち続けていた。《了》

近藤貴弥

夢の続き

ある冬の夜のことであった。稗田阿求は布団の中で何度目か分からない寝返りを打った。稍に止まった野鳥の鳴き声が聞こえたかと思えば、廊下が軋む微かな音を捉え、寢床の前に誰かが待っているような感覚に陥り、そつと障子を開ける。

するとそこには数刻前と変わらない濡羽色の夜空が広がっていた。少し高い所に上った三日月の周りには、幾つもの星が煌めいている。夜風が素足を撫で、障子を閉め、布団に潜り込んだ。しかし、全然眠れる気がしない。

阿求が寝られなくなったのは、今夜が初めてではない。『幻想郷縁起』の編纂を終えた時分から眠りが浅くなり、朝だろうと目覚めた時には、まだ四方は夜の帳で包まれている時分であったり、東雲の時分であった。そんなことを気にかけていると眠っている時間が少しずつ短くなり、いよいよ床に就いても眠れなくなった。

白昼に微睡むことが多くなり、女中に起こされるようになった。寝ている阿求を氣遣うような遠慮がちな声音ではなく、生きているのを確認するような切迫したものだだった。

御阿礼の子は『幻想郷縁起』を編纂するために転生を繰り返している。となれば、『幻想郷縁起』の編纂を終えた頃から、旅立つ準備をしていると考えてもおかしくない。しかし、転生の準備を終えていないのに、亡くなるわけにはいかない。

永遠亭に文を出したのが一昨日だが、返事はまだ来ない。寝る間を惜しんで何かやりたいことがあるわけでもなく、今は一日でも多くの時間を生きたいと願っているだけだ。転生の準備を終えていないから、という『幻想郷縁起』の編纂からの陸続きの願いではない。

この願いには、先代の御阿礼の子が、流行りの病で夭折したり、『幻想郷縁起』編纂の途中で亡くなったたりしていることが関わっている。彼等が何をしたかったのかは、断片や手記、『幻想郷縁起』の独白でしか分からない。そこから更に考えを巡らせ、彼等がどのように己の人生を歩んだのか改めて知るつもりはない。

しかし、知ってしまった以上は、彼等の思いを受け継がなければならぬような気がする。しかし、そうなってしまえば、阿求の生は阿求の生と呼べるのだろうか。九代目御阿礼の子という肩書きだけで十分なのではないだろうか。

阿求が阿求らしく己の生を歩まなければならぬのではないだろうか。転生の準備というものは、『幻想郷縁起』の編纂を終えた御阿礼の子が、御阿礼の子という名に縛られることなく生きる事なのではないだろうか。

頭は夜が深くなるにつれ、真昼の時のように鮮やかに動きはじめ、目も冴え渡る。眠るのが勿体ないように思えてきた。寝間着から小袖に着替え、羽織を重ね、洋灯を手に、縁側を通り、書斎へ向かう。

垣根の向こうにある人里は夜気を揺することなく眠っている。御阿礼の子として代々、姿を変え、人里や人間の平穏を見守ってきたが、博麗大結界を始めとした八雲紫と博麗の巫女の活躍により、阿求の役割は先代達と比較して随分と穏やかになった。『幻想郷縁起』という書も人間を守るといっても、御阿礼の子が生きるために編纂が続いていくようだった。

書の在り方も変わり、生きられる時間の中には、阿求個人の時間も出てきた。九代目である阿求の生き方は、十代目や十一代目といった次代の御阿礼の子達の生き方の指針となるべき代なのではないだろうか。

書斎の明かりを灯し、博麗大結界が張られてからの御阿礼の子の生き方を文にまとめる。朝になれば、永遠亭から返事が来るか、遣いの者が飛んでくることだろう。そうなれば、ぐっすり眠れるはずである。

朝が来た。女中の慌ただしい足音が屋敷に響く。阿求は抽斗にしまった白粉と頬紅を取り出し、来訪に備える。

「阿求様！」



「何ですか、早朝から」

書斎へ入ってきた女中は、涼しい阿求の顔を凝つと見た後、惟みた後に念を押すように低い声で訊く。

「寝られましたか？」

「ええ、少しだけですが」

「朝ご飯は、もう召し上がりますか？」

「お願いします」

朝食の後、鈴仙が書斎へ来た。手には、小さな風呂敷包みを持っており、阿求はようやく眠りが返ってくると思ひ、安堵の笑みを浮かべた。

小包みを指した指先が微かに震えていた。阿求は驚くことなく寝不足のせいであろうと判断したが、鈴仙は目を瞪る。

彼女の胸中には、果たして本当に寝られないために薬を依頼したのであるか、という不審感が渦巻いていることだろう。『幻想郷縁起』の編纂を終えた今、阿求がこの世界に留まり続ける必要はない。転生の準備を終えているのであれば、苦しまない方法として薬を選択した可能性もある。

先代の中には、『幻想郷縁起』の編纂を終え、服毒自殺をした者もいるため、鈴仙がそうい

う不審感を抱くのは当然過ぎるほど当然だった。

あるいは、病の予兆として捉えたのかもしれない。阿求ぐらいの年齢を迎えると、心身の不調を訴える者が多かった。手足の震え、食欲不振、頭痛、言葉がうまくまとまらない、物事を思い出しにくくなる。薬を処方して、阿求の限られた時間を縮めてしまう可能性はないだろうか。

「転生の準備を終えてないんですよ、まだ死ぬわけにはいきません」

「転生の準備の途中で死んだのもいるみたいじゃない」

「彼は関係ありませんよ」

「でも、同じ御阿礼の子じゃない」

先代と阿求が全くの無関係であるとは言いつれない。阿求の生は阿求個人の生でありながら、御阿礼の子の生でもある。先代の記憶も失い、記録でしか知ることのできない彼等と同じ存在である。

「眠っている間、私達の脳は、記憶を整理するって聞いたことがありますか？」

「あるわよ」

「昨晚、寝られなかったので、八代目である阿弥の記録を読みました。そこに、こんな記述がありました。私達の求聞持、見たことを忘れないというものが、整理の邪魔をしているの

ではないか、と」

「整理することも覚えている、ってこと？」

「可能性としては十分では？」

「……寝る前に一つだけ服薬してちょうだい」

鈴仙が包みを解く。中には薬籠が入っており、蓋を取ると白い錠剤が幾つも入っている。

「眠りやすくなるお薬なんですか？」

「三十分から一時間程度したら効いてくると思うわ」

「どれくらいの間、効くんでしょうか？」

「八時間程度だけど、起きた時に残っているかもしれない。おかしいなって思ったら、すぐに連絡をして」

阿求の脳内には、先代の御阿礼の子の記憶の欠片も存在している。その記憶が整理されるとなれば、阿求の記憶と混じり合う危険性があるのではないか。幻が見えたり、聞こえたりする可能性はないのだろうか。そして、忘れられないとなれば……。

先代の記憶は、本来ならば、阿求の脳内にあってはならない異物である。脳はどのように処理し、整理するつもりなのだろうか。眠っている間に脳が異常を来すことがないと言い切れない。

阿求は急速に先代の服薬自殺を肯定しそうになった。しかし、彼の時代の『幻想郷縁起』と阿求の時代の『幻想郷縁起』は性格が異なり、その書の必要性が問われることとなるだろう。御阿礼の子が存在しなくとも、『幻想郷縁起』がなくとも、幻想郷の人間達が生きられるのであれば、それで良いのではないだろうか。

しかし、この問いに答えるのは九代目では尚早だろう。もっと先の御阿礼の子に課せられるものである。今は、転生の準備を終えるために生きることを優先するべきだろう。

その日の夜、言われた通り、一錠だけ薬を飲んだ。布団で横になっていると阿求の不安を余所に、指先が微かに熱を帯び、瞼が重くなっていき、まるでこれまでの日々が戻ってきたかのように穏やかな眠りへ落ちた。

翌朝、垣根の向こうから響いてくる鶏の甲高い声で目が覚めた。車夫達の大きな声や屋敷の中で水を撒く音も聞こえてくる。

起き上がってみようとしたが、足に違和感がある。力を入れて動かしてみようとするも、全然力が入らない。

鈴仙の言っていた通り、まだ薬が残っているのだろう。阿求は薬が抜けるまで、布団で横になった。

薬で眠ることが続けば、毎朝、こうして感覚が戻るまで横にならねばならないのだろうか。

薬が残る量は毎回決まっているのであろうか、毎晩服薬することによって、体内に蓄積される量が増え、歩けなくなる日を迎えてしまうのではないだろうか。

この頭も、少しずつ動きが鈍くなってしまわないかと思うと、薬に頼って眠ることが恐ろしくなった。刻一刻と死に近付くのが、生きているのにも拘らず死んでいるような感覚に襲われる。

布団から這い出て、何とか立ち上がろうとするが両足が震え、布団へ崩れ落ちる。薬が完全に抜けるまで、阿求は再び眠った。

微睡みの中、誰かに呼ばれているようだった。指先に温もりを感じる。白く、長い指が、阿求の小さな指と絡まっている。この温もりに触れていると心が落ち着き、全ての心配事が全身から抜け、身体が軽くなる。

女中が心配になつて様子を見に来たのだろうが、彼女の指はこんなに長くなく、あかぎれやささくれがある。

阿求は慌てて身を起こした。背中にかけていた布団が畳に滑り落ちた。辺りを見渡すと、目の前に柔らかい笑顔を浮かべる藤原妹紅が座っている。

阿求は耳まで熱くなるのを覚え、取り繕ったように不器用に笑う。

紫檀の机には昨晚服薬した薬籠があり、その側に空になった紅茶茶碗が置いてある。どれほ

ど前から、妹紅は阿求を待っていたのであろう。妹紅は阿求が目覚めるまでの間、ここで待ち続けていたのであろうか。阿求の寝顔を見ながら。

「おはよう、よく寝ていたみたいね」

阿求は羞恥と安堵を交互に味わい、妹紅に何と言っているのか分からず、そもそも何故、妹紅がここに居るのかすら分からず、寢床には余所余所しい沈黙が落ちてきた。

妹紅は阿求が大いに慌てているのを察すると、優しい調子で答える。

「下女から、阿求の様子を聞いてね。見に来たのよ」

「何も聞いてません」

「秘密にしておいてほしい、って頼まれたからね」

「それでも、一声かけてもよかったですじゃありませんか」

「優しい嘘は残酷なのよ」

二度目の沈黙が落ちてきた。妹紅は深い笑みを浮かべ、自身の膝を軽く叩く。

「もう少し、眠る？」

「今日はしっかりと寝られました」

「来客に気付かないほどね」

阿求は拗ねたようにそっぽを向き、女中を呼び、着替えと二人分の軽い朝食を用意するよう

に頼んだ。

「妹紅さんはもう朝食を食べられましたか？」

「まだだけど？」

「でしたら、一緒にどうですか？」

妹紅と一緒に遅い朝食を摂りながら、眠れないことを打ち明けるかどうか悩んだ。妹紅ならば、先代達と会い、眠りについて何か相談を受けていないだろうか。阿求は朝食後の紅茶を飲みながら、尋ねた。

「知っているかもしれませんが、最近、よく寝られません。先代から何か相談を受けたりしていませんか？」

妹紅は紅茶を飲む手を止め、意外そうな声を上げる。

「私が？　そこは、永遠亭じゃない？」

「永遠亭に行ったような記録はありませんでした」

「そうは言われてもあんまり覚えていないのよねえ、百年近く前だから。阿求は何か覚えてないの？」

「覚えてません」

「思い出せない？」

「思い出す？」

聞き返した阿求に、妹紅は驚きを示した。阿求と妹紅の間で、御阿礼の子の記憶について異なる部分があるらしい。

「どういうことでしょうか？」

「阿弥が言っていたのよ。『先代の記憶の大部分を失っているだけで、全てを失っているわけではない。』ということは、何かがきつかけとなり、思い出すことも可能なのではないか』って。実際、阿弥は阿七に関することを思い出たらしいわ」

「そんなの記録にありませんでした」

「筆マメじゃなかったら仕方ないわ」

「大事なことは記録に残してくれないと困ります」

「自分のことは記録に残したくなかったのよ」

「……困った男ですね」

「ええ、全く」

阿弥のことを話す妹紅の顔は自然と柔らかくなり、優しいものだった。阿求と話している時とは違う、妹紅でありながら全然妹紅ではない別の女性と話しているような気分になり、楽しくない。



阿求の内に、阿求とは違う男の影を見られているようで穏やかになれない。同時に、阿求が見てはいけない妹紅の顔を見てしまったようで、胸の端が痛くなった。阿弥が記録を残さなかった意味が分かる。次代よりも大切にしたいことがあった。

これ以上、阿弥のことを、阿弥と一緒にいた妹紅のことを知るのが恐ろしくなり、話を断ち切るように欠伸を零した。

「もう少しだけ休みます」

「阿求……？」

「妹紅さんが言ったんですよ」

阿求は妹紅を独占するかのようになり、彼女の膝の上で横になる。見上げると目を瞠る妹紅の顔がある。

妹紅が温かいせいであろうか、彼女の側にいると自然と安心した。きっと、妹紅が御阿礼の子という存在を知っているからであろう。

しかし、幾度となく転生を繰り返して、姿も名前も違うけれども、『幻想郷縁起』という書の編纂を続けるこの身を、妹紅はどう思っているのだろうか。

阿求としては、不老不死である妹紅と知り合えたのは嬉しいことである。先代との関係というのを除いても、これからも御阿礼の子を知っている存在が一人でも幻想郷にいることが嬉

しい。

「妹紅さんは、私達に会って、どうでしたか？」

「どうって？」

「その、嫌じゃないんですか？」

妹紅と初めて出会った時、無視をされたのは鮮明に思い出せる。『幻想郷縁起』のためと伝えても、変わらないわと一蹴された。そんな冷たい関係だったはずなのにも拘らず、こうして屋敷に訪れるようになり、息が届くほど近くにいる。

一体、妹紅の胸の内にとのような変化があったのか分からない。深く踏み込む気もなかった。三十年も生きられないのであれば、誰とも深い関係にならない方が良い。しかし、ならばどうして、同じように短命である阿弥が、妹紅の内、まるで特別な存在としてるのであるのか。そのことを考えると生じるこの胸の苦しみは……。阿弥の記憶が阿求の記憶のどこかで眠っている証拠なのであるのか。

妹紅はずっと遠くを見て、訥々と語り始めた。見上げる瞳は柔らかい光を受け、輝いていた。

「……嫌、だったのかもしれないわね。でも、あなた達は変わらず、私の元に来た。『幻想郷縁起』のために、毎回、来た。それが何だか嬉しかったのよ」

「嬉しかった？」

「皆、私を忌み嫌う。でも、あなた達は、たとえそれが役目であろうと、不老不死だから何一つ変わらないのに、律儀に來た。それが、それが……」

阿求の頬に、温かい雫が落ちてきた。妹紅の膝を離れ、肩を震わせる彼女を優しく抱きしめ、不安を消し去るように囁く。

「妹紅さん、大丈夫ですよ、大丈夫です。私達はここにいますよ。ずっと、ここにいます」

発作的に涙する妹紅を励ます言葉を、阿求は沢山持ち合わせていない。彼女が涙している本当の理由も分かかっていないかもしれない。改めて尋ね、辛い記憶を思い出させたくない。妹紅の涙を見たくない。

「妹紅さん、忘れてください。全てを忘れて、また……」

「でも、それで、阿求が……」

「大丈夫ですよ、また思い出します」

肩に伸びた妹紅の手に力がこもる。妹紅は寢床の机に置いてあった薬鐘を思い出したのか、溢れ出る言葉を堪えているようだった。

妹紅のことを思い出すことが、どれほど危険なことなのか分からない。どれほどの断片が、頭の中をさまよっているのか分からない。安らかな眠りの中で、その一つ、一つを確認していけば、全てを思い出せるのではないだろうか。

「妹紅さんと一緒にいると、何だかすごく安心するんです。今日だけ、一緒に寝ませんか？」  
その日の夜、寢床には二組の布団が敷かれた。阿求は寝る前の薬を飲まなかったが、平静を味わっていた。隣に顔を向ければ、妹紅は顔を強張らせ、沈黙を保っている。阿求は起き上がり、そつと声をかけた。

「起きてますか？」

「早く寝なさいよ」

「眠るって、記憶を整理するみたいですね」

布団から飛び起きると思っていた妹紅は静かに笑うだけだった。

「阿弥から聞かされてましたか？」

妹紅は眠ったのか返事はない。阿求も眠ろうとしたが、妹紅の透けるような白い横顔を見て、触れるように自らの唇を落とした。

妹紅は待つことしかできない。阿弥から阿求へ、阿求から次の御阿礼の子まで、その間を待つことしかできない。阿求は妹紅を再び、一人にしたくなかった。しかし、それでも、一人になつてしまうのが妹紅と阿求であった。

そんなことを考えていると、眠っていたはずの妹紅の手が阿求の頭へ伸びてきた。

「何も考えなくていいから、休みなさい」

「妹紅さんは……」

「明日の朝、全部聞いてあげるわ。今は、ただ、寝ましよう?」

「思い出してほしいんですね」

「……うん」

「それは、私達を愛していたからでしょうか?」

「今も愛しているからよ。互いに生きられる時間を精一杯、生きて、生きましよう」

## 二

こんな夢を見た。

男が縁側に佇み、庭に花開く大輪の百合を見ている。隣には、すらとした品の良い女が腰掛けていて。男が不意に口を開けた。

「俺は、もう少して死ぬかもしれない」

女は何とも答えなかったが、袖から覗く男の細腕や頬の痩せた様子を見ると、死ぬのだろうと思わざるを得ない。女もそう思ったのか何も言わず、張りのある潤んだ瞳で、もうすぐ側を

離れる男を見ていた。

女の瞳に映る男の姿は鮮やかだったが、少しずつ幾重に別の姿を有し、男なのか男ではないのか分からなくなる。

男は慰めるように女の頭を撫でたが、女は長い睫毛の間から涙を零し、頬を濡らす。男は思い切ったように声を張り上げた。

「ここで待っておいでくれ」

「今度は何年待てばいいの？」

男と女の間には、数え切れない時の隔たりがあった。男は百年程度だと思っているのだが、女にとってはもつと長い時であろう。その内に、女は何人もの男と出会い、手伝い、受け入れ、また別れたことだろう。

男は女の側を離れたくはなかった。しかし、男は女のように長い時間を生きられない。

「百年待つてくれ」

女は頷いた。それから、震える声でこう言った。

「ねえ、あなた、覚えている？ 私に愛しているって言ったこと」

「忘れもしない。でも、それは、子供のような遊びじゃなかったのか？」

「ええ、子供の夢みたいよ。私は死なない、あなたは死ぬ。だから、愛情なんて、寂しくなる

「だけよ。それでも……どうしてかしら、それでも……」

「九代目にその愛を注いでやってくれ。俺にそうしてくれたように。乙女だったら尚更だ。腕っ節もないだろう、編纂のこと以外にも沢山のことを考えるだろう。支え合って生きてくれ」

「……あなたがいない間に忘れるかもしれないわ」

「その時はその時だ。でも、きつと、九代目が思い出すよ」

「どうして？」

「お前が俺達を愛してくれたからだ」

それだけを言うと、男は女の膝に頭を落とした。女は一切を否定できなかった。

女はその夜から、この広い屋敷で一人になった。男の言ったように九代目の子が来るのか分からなかった。女はそれでも、もしもを信じた。九代目が来た時のために屋敷の掃除を始めた。畳を磨き、廊下を磨き、柱の埃を落とし、庭を整え、瓦を新調する。

一つ、二つと勘定していた唐紅の天道もいつしか数えなくなり、ただ待ち続けるようになった。傍らには、掃除の間に見付け、屋敷の蔵にしまおうとした数々が物があった。女はその全てに並々ならぬ感情をいだいた。その全ての物には、男達との思い出があったのだ。

一つ、また一つと女は思い出を胸に待ち続ける。思い出すことに疲れると庭を眺め、今を確認した。

百合が枯れ、楓が色付き、葉を落とし、椿が開き、梅が散り、桜が開き、新緑が芽生え、また百合が開く。女は待ち続けた。

そうしていると、ある日、一人の少女が女の前に立った。はにかむ笑顔が、男によく似ていた。男ではない、初めて出会ったあの少女によく似ているのだ。

「稗田阿求です」

女はこの時、ようやく百年が経ったのだと思い出した。《了》





## 注 釈

九七八

主に中世の武士などが男子の平常服として用いた衣料。近世に入ると儀式用の礼服としてのみ使用されるようになった。

ク 9

蓬のように伸び、乱れた髪。

一〇〇三

労働者階級を意味するドイツ語『Lumpenproletariat』（ルンペンプロレタリアー ト）に由来。転じて、日本語では浮浪者を指す俗語として用いられる。

一〇三十五

江戸時代中期の剣客・真里谷円四郎義旭の剣術書『中集』に拠る。「心に思慮あつて勝負の場に立てば、敵間遠く見へて中の勝負に塞れて、向へ届ざるものなり」。

一〇四十一

前注と同じく、真里谷円四郎の剣術思想に拠る。視覚や聴覚といった身体器官より得られる情報と、そこから連立して発生する自己の感覚に惑わされることなく、現実があるがままに捉えて対処せよという程度の意か。「目二ハ色ヲ視ルト雖モ瞽ノ如ク」「耳二ハ声ヲ聞クト雖モ聾ノ如ク」。

ク 3

江戸時代中期の武士・佚斎樗山の戯作本『田舎荘子』の中の一話『猫の妙術』に拠る。鼠捕りの名手である古猫が若い猫たちに鼠捕りの極意を教えるという物語に

仮託し、劍術における精神修養のあり方について説く。劍術を極め我執を捨てた者は自己を意識する必要がなくなるので、自己と対立する存在がなくなる。その境地に達すれば敵はなく、また自分もないと主張する。この考えは老莊思想を始めとして、儒教や易経など中国思想の影響を受けているとされる。「我あるが故に敵あり。我なければ敵なし。敵といふは、もと对待の名なり。陰陽水火の類の如し。凡そ形象あるものは必ず対するものなり。我が心に象なければ対するものなし。対するものなき時はあらそふものなし。是を敵もなく、我もなしという」。

一〇九 臆病で気の弱いこと。意気地なし。

一一一 身分卑しき女、道理を解さない女。男の場合は『匹夫』となり、思慮に欠けて血

気にはやるだけの勇気を『匹夫の勇』と呼ぶ。

一一四 仏教徒の臨終の際に、死者を迎えるため仏が乗って現れる雲。

〳 8 師や賢者などに対する尊称。

〳 8 修行者や求道者が悟りの境地に達すること。

〳 10 悟りを開いた者。

## 後書き

この度は、夏目漱石没後百年記念『東方近代文学合同「それから」』をお買い上げいただきまことにありがとうございます。夏目漱石没後百年という節目の年に、こうした合同誌を作り上げられ主催として、一人の近代文学を好む者として、嬉しく思います。参加していただいた皆様にもお礼申し上げます。カバー絵を描いたくださった、うーみん氏にも厚くお礼申し上げます。

近代文学のことを書くこうと思ったのですが、まとまらずに断念しました。多種多様の作品が収録しております。楽しんでいただけたら幸いです。

参加者の原典を掲げ、左記の通りです。

ひととせ氏 『帰ってきた死者』小泉八雲

甘茶氏 『それから』夏目漱石

長久手氏 『出来事』志賀直哉

百合街かねる 『愛撫』梶井基次郎

ガルゾ氏 『春は馬車に乗って』横光利一

完熟オレンジ氏 『富嶽百景』太宰治

こうず氏 『名人伝』中島敦

久我暁氏 『悟浄歎異』 中島敦

幽氏 『砂嘴の丘にて』 島尾敏雄

青矢鴉氏 『潮騒』 三島由紀夫

嘉島安次郎氏 『夜と霧の隅で』 北杜夫

ばつ氏 『沈黙』 遠藤周作

近藤貴弥 『開化の良人』 芥川龍之介

二〇一六年四月中旬 近藤貴弥

---

なつめそうせきぼつごひやくねんきねん とうほうきんだいぶんがくこうどう  
夏目漱石没後百年記念 『東方近代文学合同「それから」』

発行日 2016年5月8日 初版

原作 東方 Project（上海アリス幻楽団）

印刷 ちょ古っ都印刷製本工房

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ  
近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先 [stkk7.920521@gmail.com](mailto:stkk7.920521@gmail.com)

カバー印刷 プリントパック

カバー絵 うーみん（狼疾人）

寄稿者（敬称略）

ひととせ（四季堂本舗）

甘茶（Angraecum）

長久手（長久手小牧場）

百合街かねる（生首屋）

ガルゾ（よろづの葉）

完熟オレンジ（シトラス・ブルー）

こうず

久我暁（青猫幻想団）

幽（宵越幻想）

青矢鴉（白雲長久）

嘉島安次郎（幻想郷交通公社）

ばつ

本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。

---